

Oracle9i Database for 64-bit Windows

インストレーション・ガイド

リリース 2 (9.2.0.2.1)

2003 年 7 月

部品番号 : J07694-01

ORACLE®

Oracle9i Database for 64-bit Windows インストール・ガイド, リリース 2 (9.2.0.2.1)

部品番号 : J07694-01

原本名 : Oracle9i Database Installation Guide, Release 2 (9.2.0.2.1) for 64-Bit Windows

原本部品番号 : B10546-01

原本著者 : Herbert Kelly

原本協力者 : Punsri Abeywickrema, Trilok Agarwal, Toby Close, Dave Coello, Jonathan Creighton, Sujatha Gopalan, Raj Gupta, Clara Jaeckel, Stephen Lee, Mark Kennedy, Sham-Rao Pavan, Peter Sciarra, Helen Slattery, Janelle Simmons, Debbie Steiner, Linus Tanaka, Alice Watson

Copyright © 2003, Oracle Corporation. All rights reserved.

Printed in Japan.

制限付権利の説明

プログラム (ソフトウェアおよびドキュメントを含む) の使用、複製または開示は、オラクル社との契約に記載された制約条件に従うものとします。著作権、特許権およびその他の知的財産権に関する法律により保護されています。

当プログラムのリバース・エンジニアリング等は禁止されています。

このドキュメントの情報は、予告なしに変更されることがあります。オラクル社は本ドキュメントの無謬性を保証しません。

* オラクル社とは、Oracle Corporation (米国オラクル) または日本オラクル株式会社 (日本オラクル) を指します。

危険な用途への使用について

オラクル社製品は、原子力、航空産業、大量輸送、医療あるいはその他の危険が伴うアプリケーションを用途として開発されておりません。オラクル社製品を上述のようなアプリケーションに使用することについての安全確保は、顧客各位の責任と費用により行ってください。万一かかる用途での使用によりクレームや損害が発生いたしましても、日本オラクル株式会社と開発元である Oracle Corporation (米国オラクル) およびその関連会社は一切責任を負いかねます。当プログラムを米国国防総省の米国政府機関に提供する際には、『Restricted Rights』と共に提供してください。この場合次の Notice が適用されます。

Restricted Rights Notice

Programs delivered subject to the DOD FAR Supplement are "commercial computer software" and use, duplication, and disclosure of the Programs, including documentation, shall be subject to the licensing restrictions set forth in the applicable Oracle license agreement. Otherwise, Programs delivered subject to the Federal Acquisition Regulations are "restricted computer software" and use, duplication, and disclosure of the Programs shall be subject to the restrictions in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software - Restricted Rights (June, 1987). Oracle Corporation, 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このドキュメントに記載されているその他の会社名および製品名は、あくまでその製品および会社を識別する目的のみ使用されており、それぞれの所有者の商標または登録商標です。

目次

はじめに	v
対象読者	vi
このマニュアルの構成	vi
関連ドキュメント	vii
表記規則	viii
1 Oracle9i for 64-bit Windows の概要	
Oracle9i for 64-bit Windows の概要	1-2
インストールの計画	1-2
Optimal Flexible Architecture の使用方法	1-2
Oracle Universal Installer の概要	1-3
Oracle Universal Installer の制限事項	1-3
インストール対象の Oracle9i 製品	1-4
Oracle9i Database	1-4
Oracle9i Client	1-4
Oracle9i Management and Integration	1-5
インストールの開始	1-5
2 インストール前の要件	
単一 Oracle ホーム・コンポーネント	2-2
最上位コンポーネントのシステム要件	2-2
NTFS ファイル・システムのシステム要件	2-3
Oracle9i のシステム要件	2-3
オペレーティング・システムの要件	2-4
プロトコル・サポート	2-4

プロセッサ要件	2-4
ハードウェア要件	2-4
領域要件	2-5
コンポーネントのサポート	2-5
Windows Terminal Server	2-5
個々のコンポーネントの必須要件	2-6

3 データベース作成および Oracle Net Services 構成の方法の選択

データベースの作成およびネットワークの構成方法	3-2
データベース環境のタイプ	3-4
データベースの作成方法の選択	3-5
ネットワークの構成	3-8
サーバー・ネットワークの構成	3-8
クライアント・ネットワークの構成	3-11

4 Oracle コンポーネントのインストール

Windows と UNIX でのインストールの相違	4-2
Oracle9i をインストールする前に	4-2
Oracle9i のインストールの開始	4-3
インストール・タイプの選択	4-5
「Enterprise Edition」、「Standard Edition」または「Personal Edition」のインストール	4-6
Oracle9i Database の「Custom」インストール	4-9
Oracle9i Client の「Administrator」または「Runtime」インストール	4-10
Oracle9i Client の「Custom」インストール	4-11
Oracle Internet Directory のインストール	4-13
Oracle Internet Directory の最初のインストール	4-13
Oracle9i Management and Integration の「Custom」インストール	4-16
インストール・セッション・ログの確認	4-19
Oracle のコンポーネントとサービスの削除	4-19
Oracle サービスの停止	4-20
Oracle Internet Directory サービスの停止および削除	4-20
Oracle Universal Installer によるコンポーネントの削除	4-21
レジストリからの Oracle キーの削除	4-22
システム変数パスの更新	4-24
「Start」メニューからの Oracle の削除	4-24

5 インストール後の構成タスク

パッチ・セット情報	5-2
無効な PL/SQL モジュールの妥当性チェック	5-2
コンポーネント別インストール後の構成タスク	5-3

6 インストールされた初期データベースの内容の表示

ユーザー名およびパスワードの概要	6-2
パスワードのロック解除および変更	6-2
ユーザー名およびパスワードの確認	6-4
データベースの識別の概要	6-6
64 ビット Windows での Oracle9i サービスの概要	6-7
表領域とデータ・ファイルの概要	6-7
初期化パラメータ・ファイルの概要	6-9
REDO ログ・ファイルの概要	6-9
制御ファイルの概要	6-10
ロールバック・セグメントの概要	6-10
データ・ディクショナリの概要	6-11

A インストール可能な個々のコンポーネント

Oracle9i Database のコンポーネント	A-2
Oracle9i Client のコンポーネント	A-6
Oracle9i Management and Integration のコンポーネント	A-7
コンポーネントの説明	A-10

B Oracle Real Application Clusters インストール前のタスク

Real Application Clusters のインストール要件	B-2
Real Application Clusters インストール時の考慮点	B-2
ネットワークの考慮点	B-3
Real Application Clusters インストール前のタスク	B-4
投票ディスクのインストール前のタスク	B-5
シンボリック・リンク名の割当て	B-5
Oracle Cluster Setup Wizard	B-5
ImportSYMLinks ユーティリティ	B-6
Object Link Manager	B-7

共有ディスクの構成	B-7
パーティションの作成	B-9
ディスク管理ツールを開く	B-9
ディスク管理ツールからの拡張パーティションの作成	B-11
ディスク管理ツールからの論理ドライブの作成	B-11
Oracle Cluster Setup Wizard の使用	B-12
データ・ファイルの RAW パーティション	B-15
RAW パーティションおよびサイズ	B-16
Real Application Clusters 管理ユーティリティの概要	B-18
RAW デバイス管理ユーティリティの手動インストール	B-18
クラスター・ファイル・システムによってインストールされるコンポーネントおよびサービス	B-19
OcfsUtil コマンドの概要	B-20
OCFS に追加するパーティションのフォーマット	B-22
バックアップ目的の RAW パーティションの内容の標準ファイル・システムへの移行	B-22
Oracle オペレーティング・システム固有クラスタウェアの削除	B-23
Real Application Clusters インストールのトラブルシューティング	B-23

C 拡張インストール

非対話形式モードでの Oracle コンポーネントのインストール	C-2
レスポンス・ファイルのコピーおよび変更	C-3
複数 CD からの単一インストール・ステージの作成	C-3
Oracle Universal Installer の実行およびレスポンス・ファイルの指定	C-3
異なる言語の Oracle コンポーネント	C-4
異なる言語での Oracle Universal Installer の実行	C-4
異なる言語での Oracle コンポーネントの使用方法	C-5

D グローバリゼーション・サポート

NLS_LANG パラメータ	D-2
一般的に使用される NLS_LANG の値	D-3
MS-DOS モードおよびバッチ・モードでの NLS_LANG 設定	D-4

用語集

索引

はじめに

このマニュアルでは、Oracle9i for 64-bit Windows オペレーティング・システムの概要、インストール前、インストールおよびインストール後の作業について説明します。

このマニュアルでは、Windows XP 64-bit Edition および Windows Server 2003 オペレーティング・システムに適用できる Oracle9i for 64-bit Windows ソフトウェアの機能についてのみ説明します。

次の項目について説明します。

- [対象読者](#)
- [このマニュアルの構成](#)
- [関連ドキュメント](#)
- [表記規則](#)

対象読者

『Oracle9i Database for Windows インストール・ガイド』は、Enterprise Edition、Standard Edition および Personal Edition のデータベース・タイプで Oracle9i クライアントまたは Oracle Internet Directory のインストールまたは構成を行うユーザーを対象としています。「Oracle9i for 64-bit Windows」という用語は、このマニュアルではこれらすべてのタイプの説明に使用されます。

このマニュアルを使用するには、次の要件があります。

- Windows XP 64-bit Edition または Windows Server 2003 をコンピュータ・システムにインストールし、テスト済であること
- オブジェクト・リレーショナル・データベース管理の概念に精通していること

関連資料：

オブジェクト・リレーショナル・データベース管理の概念の詳細は、『Oracle9i データベース概要』を参照

このマニュアルの構成

このマニュアルは次のように構成されています。

第 1 章「Oracle9i for 64-bit Windows の概要」

Oracle9i for Windows の概要を示し、インストールの計画について説明します。

第 2 章「インストール前の要件」

対応するオペレーティング・システム、Oracle9i for Windows のインストール・タイプと個別のコンポーネントの要件およびサポートされているプロトコルについて説明します。

第 3 章「データベース作成および Oracle Net Services 構成の方法の選択」

インストール中に使用可能な Oracle9i データベースの作成および Oracle Net Services ネットワークの構成方法について説明します。

第 4 章「Oracle コンポーネントのインストール」

Oracle コンポーネントのインストールおよび削除方法について説明します。

第 5 章「インストール後の構成タスク」

インストール後の構成タスクについて説明します。

第 6 章「インストールされた初期データベースの内容の表示」

インストールされた初期データベースの内容について説明します。

付録 A 「インストール可能な個々のコンポーネント」

3つの最上位コンポーネントの各インストール・タイプで使用可能な個々のコンポーネントおよびそのコンポーネントの説明を記載します。

付録 B 「Oracle Real Application Clusters インストール前のタスク」

Windows でのクラスタ・ソフトウェアおよび Oracle Real Application Clusters に対するインストール前の必須のタスクについて説明します。

付録 C 「拡張インストール」

第4章「Oracle コンポーネントのインストール」で説明していない拡張インストールについて説明します。

付録 D 「グローバル化・サポート」

グローバル化・サポートについて説明します。

用語集

関連ドキュメント

詳細は、次の Oracle ドキュメントを参照してください。

『Oracle9i Database for Windows プラットフォーム・ガイド』

リリース・ノート、インストール関連ドキュメント、ホワイト・ペーパーまたはその他の関連ドキュメントは、OTN-J (Oracle Technology Network Japan) から、無償でダウンロードできます。OTN-J を使用するには、オンラインでの登録が必要です。登録は、次の Web サイトから無償で行えます。

<http://otn.oracle.co.jp/membership/>

すでに OTN-J のユーザー名およびパスワードを取得している場合は、次の URL で OTN-J Web サイトのドキュメントのセクションに直接接続できます。

<http://otn.oracle.co.jp/document/>

表記規則

この項では、このマニュアルの本文およびコード例で使用される表記規則について説明します。この項の内容は次のとおりです。

- 本文の表記規則
- コード例の表記規則
- Microsoft Windows オペレーティング・システム環境での表記規則

本文の表記規則

本文では、特定の項目が一目でわかるように、次の表記規則を使用します。次の表に、その規則と使用例を示します。

規則	意味	例
太字	太字は、本文中で定義されている用語および用語集に記載されている用語を示します。	この句を指定すると、 索引構成表 が作成されます。
固定幅フォントの大文字	固定幅フォントの大文字は、システム指定の要素を示します。このような要素には、パラメータ、権限、データ型、 Recovery Manager キーワード、 SQL キーワード、 SQL*Plus またはユーティリティ・コマンド、パッケージおよびメソッドがあります。また、システム指定の列名、データベース・オブジェクト、データベース構造、ユーザー名およびロールも含まれます。	NUMBER 列に対してのみ、この句を指定できません。 BACKUP コマンドを使用して、データベースのバックアップを作成できます。 USER_TABLES データ・ディクショナリ・ビュー内の TABLE_NAME 列を問い合わせます。 DBMS_STATS.GENERATE_STATS プロシージャを使用します。

規則	意味	例
固定幅フォントの小文字	<p>固定幅フォントの小文字は、実行可能ファイル、ファイル名、ディレクトリ名およびユーザーが指定する要素のサンプルを示します。このような要素には、コンピュータ名およびデータベース名、ネット・サービス名および接続識別子があります。また、ユーザーが指定するデータベース・オブジェクトとデータベース構造、列名、パッケージとクラス、ユーザー名とロール、プログラム・ユニットおよびパラメータ値も含まれます。</p> <p>注意： プログラム要素には、大文字と小文字を組み合わせて使用するものもあります。これらの要素は、記載されているとおりに入力してください。</p>	<p>sqlplus と入力して、SQL*Plus をオープンします。</p> <p>パスワードは、orapwd ファイルで指定します。</p> <p>/disk1/oracle/dbs ディレクトリ内のデータ・ファイルおよび制御ファイルのバックアップを作成します。</p> <p>hr.departments 表には、department_id、department_name および location_id 列があります。</p> <p>QUERY_REWRITE_ENABLED 初期化パラメータを true に設定します。</p> <p>oe ユーザーとして接続します。</p> <p>JRepUtil クラスが次のメソッドを実装します。</p>
固定幅フォントの小文字のイタリック	<p>固定幅フォントの小文字のイタリックは、プレースホルダまたは変数を示します。</p>	<p>parallel_clause を指定できます。</p> <p>Uold_release.SQL を実行します。ここで、old_release とはアップグレード前にインストールしたリリースを示します。</p>

コード例の表記規則

コード例は、SQL、PL/SQL、SQL*Plus または他のコマンドライン文の例です。次のように固定幅フォントで表示され、通常のテキストと区別されます。

```
SELECT username FROM dba_users WHERE username = 'MIGRATE';
```

次の表に、コード例で使用される表記規則とその使用例を示します。

規則	意味	例
[]	大カッコは、カッコ内の項目を任意に選択することを表します。大カッコは、入力しないでください。	DECIMAL (<i>digits</i> [, <i>precision</i>])
{ }	中カッコは、カッコ内の項目のうち、1つが必須であることを表します。中カッコは、入力しないでください。	{ENABLE DISABLE}

規則	意味	例
	縦線は、大カッコまたは中カッコ内の複数の選択項目の区切りに使用します。項目のうちの1つを入力します。縦線は、入力しないでください。	{ENABLE DISABLE} [COMPRESS NOCOMPRESS]
...	水平の省略記号は、次のいずれかを示します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 例に直接関連しないコードの一部が省略されている。 ■ コードの一部を繰り返すことができる。 	CREATE TABLE ... AS subquery; SELECT col1, col2, ... , coln FROM employees;
.	垂直の省略記号は、例に直接関連しない複数の行が省略されていることを示します。	SQL> SELECT NAME FROM V\$DATAFILE; NAME ----- /fsl/dbs/tbs_01.dbf /fsl/dbs/tbs_02.dbf . . . /fsl/dbs/tbs_09.dbf 9 rows selected.
その他の記号	大カッコ、中カッコ、縦線および省略記号以外の記号は、記載されているとおりに入力する必要があります。	acctbal NUMBER(11,2); acct CONSTANT NUMBER(4) := 3;
イタリック体	イタリック体は、特定の値を指定する必要があるプレースホルダや変数を示します。	CONNECT SYSTEM/system_password DB_NAME = database_name
大文字	大文字は、システム指定の要素を示します。これらの要素は、ユーザー定義の要素と区別するために大文字で示されます。大カッコ内にかぎりが表示されているとおりの順序および綴りで入力します。ただし、大/小文字が区別されないため、小文字でも入力できます。	SELECT last_name, employee_id FROM employees; SELECT * FROM USER_TABLES; DROP TABLE hr.employees;
小文字	小文字は、ユーザー指定のプログラム要素を示します。たとえば、表名、列名またはファイル名などです。 注意： プログラム要素には、大文字と小文字を組み合わせて使用するものもあります。これらの要素は、記載されているとおりに入力してください。	SELECT last_name, employee_id FROM employees; sqlplus hr/hr CREATE USER mjones IDENTIFIED BY ty3MU9;

Microsoft Windows オペレーティング・システム環境での表記規則

次の表に、Microsoft Windows オペレーティング・システム環境での表記規則とその使用例を示します。

規則	意味	例
ファイル名およびディレクトリ名	ファイル名およびディレクトリ名は大 / 小文字が区別されません。特殊文字の左山カッコ (<)、右山カッコ (>)、コロンの (:)、二重引用符 (")、スラッシュ (/)、縦線 () およびハイフン (-) は使用できません。円記号 (¥) は、引用符で囲まれている場合でも、要素のセパレータとして処理されます。Windows では、ファイル名が ¥¥ で始まる場合、汎用命名規則が使用されていると解釈されます。	C:¥winnt"¥"system32 は C:¥WINNT¥SYSTEM32 と同じです。
Windows コマンド・プロンプト	Windows コマンド・プロンプトには、カレット・ディレクトリが表示されます。このマニュアルでは、コマンド・プロンプトと呼びます。コマンド・プロンプトのエスケープ文字はカレット (^) です。	C:¥oracle¥oradata>
特殊文字	Windows コマンド・プロンプトで二重引用符 (") のエスケープ文字として円記号 (¥) が必要な場合があります。丸カッコおよび一重引用符 (') にはエスケープ文字は必要ありません。エスケープ文字および特殊文字の詳細は、Windows オペレーティング・システムのドキュメントを参照してください。	C:¥>exp scott/tiger TABLES=emp QUERY=¥"WHERE job='SALESMAN' and sal<1600¥" C:¥>imp SYSTEM/password FROMUSER=scott TABLES=(emp, dept)
HOME_NAME	Oracle ホームの名前を表します。ホーム名には、英数字で 16 文字まで使用できます。ホーム名に使用可能な特殊文字は、アンダースコアのみです。	C:¥> net start OracleHOME_NAMEListener

規則	意味	例
ORACLE_HOME および ORACLE_BASE	<p>Oracle8i より前のリリースでは、Oracle コンポーネントをインストールすると、すべてのサブディレクトリが最上位の ORACLE_HOME の直下に置かれました。ORACLE_HOME ディレクトリの名前は、デフォルトでは次のいずれかです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ C:¥orant (Windows NT の場合) ■ C:¥orawin98 (Windows 98 の場合) <p>このリリースは、Optimal Flexible Architecture (OFA) のガイドラインに準拠しています。ORACLE_HOME ディレクトリ下に配置されないサブディレクトリもあります。最上位のディレクトリは ORACLE_BASE と呼ばれ、デフォルトでは C:¥oracle です。他の Oracle ソフトウェアがインストールされていないコンピュータに Oracle9i リリース 2 (9.2) をインストールした場合、Oracle ホーム・ディレクトリは、デフォルトで C:¥oracle¥ora90 に設定されます。Oracle ホーム・ディレクトリは、ORACLE_BASE の直下に配置されます。</p> <p>このマニュアルに示すディレクトリ・パスの例は、すべて OFA の表記規則に準拠しています。</p>	%ORACLE_HOME%¥rdbms¥admin ディレクトリへ移動します。

Oracle9i for 64-bit Windows の概要

この章では、Oracle9i for 64-bit Windows の概要を示し、インストールの計画を支援します。
この章の項目は次のとおりです。

- [Oracle9i for 64-bit Windows の概要](#)
- [インストールの計画](#)
- [インストールの開始](#)

Oracle9i for 64-bit Windows の概要

Oracle9i for 64-bit Windows は、インターネット用の開発および実行プラットフォームです。Oracle9i for 64-bit Windows の機能には、次のものが含まれます。

- Oracle9i データベース内に Java コードを格納し実行できる組み込み Java Virtual Machine (JVM)
- Java プログラムに埋め込まれた SQL 文をサポートするプログラミング構文である SQLJ のサポート
- Component Object Model (COM) や Microsoft Transaction Server との統合

インストールの計画

ここでは、Oracle Universal Installer、インストール・タイプ、データベース構成、およびインストールの計画で注意すべき概念について説明します。

- [Optimal Flexible Architecture の使用方法](#)
- [Oracle Universal Installer の概要](#)
- [インストール対象の Oracle9i 製品](#)

Optimal Flexible Architecture の使用方法

Oracle9i データベースをインストールおよび構成する際に、Optimal Flexible Architecture (OFA) 規格を使用することをお勧めします。OFA 規格は、高速で可用性および信頼性が高く、メンテナンスがほとんど必要ない Oracle データベースを作成するための、一連の構成ガイドラインです。最も重要な特長は、次のとおりです。

- ディレクトリやファイルの構造化された編成およびデータベース・ファイルに使用される整合性のあるネーミングにより、データベース管理が簡略化されます。
- I/O を複数のディスクへ分散することにより、同時に単一ドライブへ発行される複数の読取り / 書込みコマンドが原因のパフォーマンス・ボトルネックを防止します。
- アプリケーションを複数のディスクへ分散することにより、データベース障害から保護します。
- データベース管理者が Oracle ホーム・ディレクトリを追加、移動または削除するとき、ホーム・ディレクトリに安全にログオンできます。
- 複数のバージョンのアプリケーション・ソフトウェアを同時に実行できます。
- 本番データベースがある Oracle ホームとは別のディレクトリの Oracle ホームで、ソフトウェアのアップグレードをテストできます。

注意： Oracle Universal Installer は OFA をサポートしていますが、OFA は必須ではありません。

Oracle Universal Installer の概要

Oracle Universal Installer は、CD から Oracle コンポーネントをインストールするための Java ベースの Graphical User Interface (GUI) です。Oracle Universal Installer には、次の機能があります。

- コンポーネントおよびコンポーネント・セットのインストール
- グローバリゼーション・サポート
- 分散インストールのサポート
- レスポンス・ファイルを使用した (対話を必要としない) サイレント・インストール
- インストール済コンポーネントの削除

関連項目： サイレント・インストールの詳細は、[付録 C 「拡張インストール」](#) を参照

Oracle Universal Installer の制限事項

Oracle Universal Installer の実行時には、次の制限事項があります。

- Oracle Universal Installer により、Java Runtime Environment (JRE) の Oracle バージョンが自動的にインストールされます。このバージョンは、Oracle Universal Installer およびいくつかの Oracle アシスタントの実行に必要です。
- Oracle Universal Installer は、Oracle 製品のインストールを非対話形式で実行でき、オプションでサイレント・モードに設定できます。サイレント・モードはバックグラウンド・プロセスであるため、ウィンドウに表示されません。
- リモートの Terminal Services Client から、**Terminal Server Service** を実行している Windows Server 2003 への Oracle9i データベース・コンポーネントのインストールは、サポートされていません。この方法で Oracle9i のインストールを試行すると、多数のデータベース構成ツールが応答を停止します。すべての構成ツールは Terminal Server コンソールから開始し、Terminal Services Client からは開始しないでください。

関連資料： 『Oracle Universal Installer Concepts Guide』

このガイドは、Oracle9i データベース・ドキュメント CD に含まれており、インストール時に自動的にハード・ディスク・ドライブにインストールされます。このマニュアルを表示するには、「Start」 → 「Programs」 → 「Oracle Installation Products」 → 「Universal Installer Concepts Guide」を選択します。

インストール対象の Oracle9i 製品

インストール時に、3つの最上位コンポーネントの1つを選択するよう求められます。これらのコンポーネントは次のとおりです。

- **Oracle9i Database**
- **Oracle9i Client**
- **Oracle9i Management and Integration**

個々の最上位コンポーネントには、いくつかのインストール・タイプが含まれており、各タイプには一連の個々のコンポーネントが含まれています。ここでは、3つの最上位コンポーネントと、そのインストール・タイプを示します。

Oracle9i Database

Oracle9i データベースは、オブジェクト指向リレーショナル・データベース管理システムであり、Oracle データベースおよび Oracle インスタンスから構成されています。4つのインストール・タイプがあります。

- **Enterprise Edition:** このタイプを選択した場合、Oracle Universal Installer は、事前に構成されたシード・データベース、ネットワーク・サービス、Oracle Option、Oracle ユーティリティ、データベース環境ツールおよびオンライン・ドキュメントをインストールします。データ・ウェアハウス環境およびトランザクション処理環境で最もよく使用される製品もインストールします。
- **Standard Edition:** このタイプを選択した場合、Oracle Universal Installer は、事前に構成されたシード・データベース、ネットワーク・サービスおよび Oracle ユーティリティをインストールします。
- **Personal Edition:** このタイプを選択した場合、Oracle Universal Installer は、「Enterprise Edition」インストール・タイプと同じソフトウェア（Real Application Clusters 以外）をインストールしますが、Enterprise Edition および Standard Edition との完全な互換性を必要とする単一ユーザーの開発および配布環境のみサポートします。
- **Custom:** このタイプを選択した場合、Oracle Universal Installer から、使用可能なコンポーネントのうちインストールする個々のコンポーネントを選択するよう求められます。

Oracle9i Client

Oracle9i クライアントは、フロントエンド・データベース・アプリケーションで、1つ以上のアプリケーション・サーバーを介してデータベースに接続します。3つのクライアント・インストール・タイプがあります。

- **Administrator:** このタイプを選択した場合、Oracle Universal Installer は、ネットワーク・サービス、ユーティリティおよび基本クライアント・ソフトウェアをインストールします。

- **Runtime:** このタイプを選択した場合、Oracle Universal Installer はネットワーク・サービスおよびサポート・ファイルをインストールします。
- **Custom:** このタイプを選択した場合、Oracle Universal Installer から、「Administrator」および「Runtime」で使用可能なコンポーネントのうちインストールする個々のコンポーネントを選択するよう求められます。

Oracle9i Management and Integration

このリリースでは、2つの Management and Integration インストール・タイプがあります。

- **Oracle Internet Directory:** このタイプを選択した場合、Oracle Universal Installer は、Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) 対応の Oracle Internet Directory データベース、LDAP 対応のクライアント・ツールおよび Oracle Internet Directory データベース・スキーマをインストールします。
- **Custom:** このタイプを選択した場合、Oracle Universal Installer から、「Oracle Internet Directory」で使用可能なコンポーネントのうちインストールする個々のコンポーネントを選択するよう求められます。

関連項目: 各インストール・タイプでインストールされる個々のコンポーネントのリストは、[付録 A 「インストール可能な個々のコンポーネント」](#)を参照

インストールの開始

インストールを開始する準備ができました。迅速に作業を開始するには、次に示された順序で各章を参照し、その指示に従います。

目的	参照先
次の事項のインストール要件を調べる。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 個々のインストール・タイプ ■ 個々のコンポーネント ■ 単一 Oracle ホーム・コンポーネント ■ ネットワーク・プロトコルおよびベンダー 	第 2 章 「インストール前の要件」
Oracle9i データベースの作成方法および Oracle Net Services ネットワーク環境の構成方法を選択する。	第 3 章 「データベース作成および Oracle Net Services 構成の方法の選択」
Oracle Real Application Clusters のクラスタ化データベースに対してインストール前のタスクを実行する。	付録 B 「Oracle Real Application Clusters インストール前のタスク」
Oracle コンポーネントをインストールおよび削除する。	第 4 章 「Oracle コンポーネントのインストール」

目的

Oracle コンポーネントを非対話形式でインストールする。

参照先

C-2 ページの「[非対話形式モードでの Oracle コンポーネントのインストール](#)」

インストール前の要件

この章では Oracle9i for 64-bit Windows のインストールの要件を説明します。

この章の項目は次のとおりです。

- 単一 Oracle ホーム・コンポーネント
- 最上位コンポーネントのシステム要件
- 個々のコンポーネントの必須要件

単一 Oracle ホーム・コンポーネント

ほとんどの Oracle コンポーネントは、同じコンピュータに複数回インストールできます。ただし、次のコンポーネントは、各コンピュータに 1 回しかインストールできません。

- Oracle Counters for Windows Performance Monitor
- Oracle Provider for OLE DB

関連項目： 1-2 ページの「[Optimal Flexible Architecture の使用方法](#)」

これらのコンポーネントを 2 回目にインストールしようとする時、Oracle Universal Installer は、これらの製品が別の Oracle ホームにインストール済であることを検出し、これらの製品をインストール・プロセスから自動的に削除します。

c:\Program Files\Oracle\Inventory\logs ディレクトリの
installActionsdate_time.log ファイルに次の情報が記録されます。

```
# product_name is a single oracle home product. It is already installed in  
currently_installed_location.
```

インストールを実行しているときに、1 つ以上の単一 Oracle ホーム・コンポーネントが現行のセッションでインストールできないことに気づいた場合は、これらのコンポーネントのいずれか、またはこれらのコンポーネントの古いバージョンが、別の Oracle ホームにインストールされていないかをチェックします。これらのコンポーネントを現在選択している Oracle ホームにインストールする場合は、まず競合するバージョンを削除します。

関連項目： これらのコンポーネントのインストール・タイプは、[付録 A 「インストール可能な個々のコンポーネント」](#) を参照

最上位コンポーネントのシステム要件

ここでは、最上位コンポーネントごとのシステム要件を示します。個々の最上位コンポーネントには、いくつかのインストール・タイプが含まれており、各タイプには一連の個々のコンポーネントが含まれています。一部のコンポーネントには、インストール前に満たす必要のある要件もあります。これらの要件は、2-6 ページの「[個々のコンポーネントの必須要件](#)」で説明します。

- [NTFS ファイル・システムのシステム要件](#)
- [Oracle9i のシステム要件](#)
- [コンポーネントのサポート](#)

重要： Oracle9i の各最上位コンポーネントのハード・ディスク要件には、オペレーティング・システムがインストールされているパーティションに Java Runtime Environment (JRE) および Oracle Universal Installer をインストールするために必要な 32MB が含まれています。十分な領域が検出されないと、インストールは失敗し、エラー・メッセージが表示されます。

NTFS ファイル・システムのシステム要件

この項では、NTFS ファイル・システムのシステム要件を示します。NTFS パーティションにインストールすることをお勧めします。

注意： この項に記載されている NTFS システム要件を確認してください。これらの値は、Oracle Universal Installer の「Installation Summary」ウィンドウでレポートされるハード・ディスク値よりも正確です。このウィンドウには、ハード・ディスク・ドライブ上に展開される圧縮ファイルのサイズは含まれません。

Oracle9i のシステム要件

次の内容について説明します。

- [オペレーティング・システムの要件](#)
- [プロトコル・サポート](#)
- [プロセッサ要件](#)
- [ハードウェア要件](#)
- [領域要件](#)

関連項目：

- 2-6 ページの「[個々のコンポーネントの必須要件](#)」
- 各インストール・タイプでインストールされる個々のコンポーネントのリストは、A-2 ページの「[Oracle9i Database のコンポーネント](#)」を参照

オペレーティング・システムの要件

最上位の Oracle9i Database、Oracle9i Client および Oracle9i Management and Integration のコンポーネントは、Windows XP 64-bit Edition Version 2003 および Windows Server 2003 オペレーティング・システムでサポートされています。

- Windows Server 2003 Datacenter Edition (64-bit Itanium 2 システム用)
- Windows Server 2003 Enterprise Edition (64-bit Itanium 2 システム用)

関連項目： 2-5 ページの「[コンポーネントのサポート](#)」

プロトコル・サポート

Oracle Net Foundation レイヤーは、Oracle プロトコル・サポートを使用して、次の業界標準ネットワーク・プロトコルと通信します。

- TCP/IP
- Secure Sockets Layer (SSL) 付き TCP/IP
- Named Pipes

プロセッサ要件

全インストール・タイプで、Itanium 2 以上のプロセッサが必要です。

ハードウェア要件

最上位の Oracle9i Database および Oracle9i Management and Integration のコンポーネントには、次のハードウェア・コンポーネントが必要です。

- RAM: 1GB
- 仮想メモリー: 512MB 以上
- ビデオ・アダプタ: 256 色

最上位の Oracle9i Client コンポーネントに必要な RAM は 1GB です。

領域要件

「Custom」の場合の要件は、インストール時に選択されたコンポーネントに依存します。

表 2-1 に、NTFS の領域要件を示します。

表 2-1 NTFS のハード・ディスク領域要件

インストール・タイプ	システム・ドライブ	Oracle ホーム・ドライブ
Enterprise Edition	140MB	2.78GB
Standard Edition	140MB	2.72GB
Personal Edition	140MB	2.77GB
Administrator	90MB	394MB
Runtime	60MB	255MB
Oracle Internet Directory	60MB	2.73GB (データベースを含む)

コンポーネントのサポート

オラクル社では、様々なプラットフォームでのコンポーネントのサポート情報を提供し、互換性のあるクライアントとデータベースのバージョンをリストし、パッチと対処方法に関する情報を確認しています。

Windows Terminal Server

Oracle は、Windows XP 64-bit Edition および Windows Server 2003 で Terminal Services をサポートします。

次の製品および機能は、Windows Terminal Server または Windows XP 64-bit Edition Remote Desktop ではサポートされていません。

- リモートの Terminal Services Client から、Terminal Server Service を実行している 64 ビット Windows Server または Enterprise Server Terminal Server への Oracle9i Database コンポーネントのインストールは、サポートされていません。この方法で Oracle9i のインストールを試行すると、多数のデータベース構成ツールが応答を停止します。これには、Database Configuration Assistant および Oracle Internet Directory Configuration Assistant などが含まれます。すべての構成ツールは Terminal Server コントロールから開始し、Terminal Services Client からは開始しないでください。
- Oracle Object Link Manager
- Oracle Services for Microsoft Transaction Server
- Server Management (SRVM)

関連資料：

- Terminal Server の詳細は、<http://www.microsoft.com/japan/> の Microsoft 社の Web サイトを参照
- 最新の Terminal Server のサポート情報は、リリース・ノートを参照

個々のコンポーネントの必須要件

次のコンポーネントおよび機能には、インストール前の必須要件があります。

- [Oracle Advanced Security](#)
- [Oracle Internet Directory](#)
- [Oracle Managed Files](#)
- [Oracle Real Application Clusters](#)
- [Oracle Workflow](#)

Oracle Advanced Security

Oracle コンポーネントで認証サポートを使用するには、ハードウェア要件およびソフトウェア要件を満たします。また、Oracle Advanced Security を SSL および PKI とともに使用するには、コンポーネント CD で提供されている Oracle Internet Directory などの LDAP ディレクトリが事前にインストールされている必要があります。

関連資料：『Oracle Advanced Security 管理者ガイド』

Oracle Internet Directory

次の内容について説明します。

- [既存のデータベースへの Oracle Internet Directory のインストール](#)
- [Oracle Internet Directory リリース 9.2 のインストール](#)

既存のデータベースへの Oracle Internet Directory のインストール

Oracle9i リリース 2 (9.2.x) が、Oracle Internet Directory リリース 9.2 をインストールしようとしているコンピュータ上の同じ Oracle ホームにインストールされている場合は、データベースとリスナーの両方が稼働していることを確認します。

Oracle Internet Directory リリース 9.2 のインストール

Oracle Internet Directory リリース 9.2 をインストールする場合は、最上位の Oracle9i Management and Integration コンポーネントから「Oracle Internet Directory」インストール・タイプを選択します。このインストール・タイプでは、Oracle Internet Directory リリース 9.2 インストールの一環として基礎となる適切な Oracle9i データベースが作成されます。

Oracle Managed Files

Oracle Managed Files を使用可能にするには構成手順が必要です。

関連資料：『Oracle9i データベース管理者ガイド』の「Oracle Managed Files の使用」

Oracle Real Application Clusters

ハードウェア要件、ソフトウェア要件およびインストール前の要件は、[付録 B 「Oracle Real Application Clusters インストール前のタスク」](#) を参照してください。これらのタスクは、Oracle Universal Installer を使用する前に完了する必要があります。

Oracle Workflow

必要なハードウェアおよびソフトウェアが構成されていることを確認します。

データベース作成および Oracle Net Services 構成の方法の選択

この章では、インストール中に使用できる Oracle9i データベースの作成および Oracle Net Services の構成方法を説明します。作成とネットワーキングの方法について理解してから、インストールを実行することをお勧めします。

この章の項目は次のとおりです。

- [データベースの作成およびネットワークの構成方法](#)
- [データベース環境のタイプ](#)
- [データベースの作成方法の選択](#)
- [ネットワークの構成](#)

関連資料：

この章のネットワーキング概念の詳細は、『Oracle9i Net Services 管理者ガイド』を参照

データベースの作成およびネットワークの構成方法

Oracle Universal Installer は、インストール中に Oracle9i データベースの作成方法および Oracle Net Services ネットワーク環境の構成方法をいくつか提供しています。

インストール中に選択する方法は、次の条件に依存します。

- データベース作成とネットワーク構成に関するユーザー自身の知識
- データベースおよびネットワーク環境の要件

この章の情報に目を通すことで、必要に応じた最善のデータベースおよびネットワーク環境を最初から作成、構成することが可能です。

Oracle9i および Oracle Net Services コンポーネントは、いくつかのインストール・タイプでインストールされます。表 3-1 のインストール・タイプで、インストール中にデータベース作成およびネットワーク構成に関して入力が必要となるかについて確認してください。自動的に作成される情報および入力が必要な情報に関する詳細は、この章の後述の項を参照してください。

「Custom」インストール・タイプを選択すると、ユーザー入力を多量に必要とする完全カスタム作成から最小限のユーザー入力を必要とする作成まで、複数のデータベース作成選択肢が提供されます。詳細は、3-5 ページの「データベースの作成方法の選択」を参照してください。

表 3-1 各インストール・タイプに必要なユーザー入力

インストール・タイプ	データベースの作成に必要なユーザー入力	Oracle Net Services の構成に必要なユーザー入力
Oracle9i Database		
■ Enterprise Edition	最小	なし
■ Standard Edition	最小	なし
■ Personal Edition	最小	なし
■ Custom	-	-
Custom → Oracle Net Services または Custom → Oracle9i	該当せず 多量	なしまたは多量 該当せず

表 3-1 各インストール・タイプに必要なユーザー入力 (続き)

インストール・タイプ	データベースの作成に必要なユーザー入力	Oracle Net Services の構成に必要なユーザー入力
Oracle9i Client¹		
■ Administrator	該当せず	最小
■ Runtime	該当せず	最小
■ Custom	-	-
Custom → Oracle Net Services または Custom → Oracle9i	該当せず 多量	なしまたは多量 該当せず
Oracle9i Management and Integration		
■ Oracle Internet Directory	最小	最小
■ Custom	-	-
Custom → Oracle Net Services または Custom → Oracle Net Services	多量 該当せず	該当せず 最小または多量

¹ データベースは、最上位の Oracle9i Client コンポーネントからはインストールできません。

注意： 表 3-1 で説明した「Oracle Internet Directory」インストール・タイプを選択すると、Oracle9i データベースが同じ Oracle ホームに現在インストールされていない場合は、データベースが自動的にインストールされます。このデータベースは、Oracle Internet Directory 情報を格納する目的のみに使用してください。

データベース環境のタイプ

Oracle Universal Installer では、表 3-2 に示す環境のいずれかで稼働する Oracle9i データベースを作成できます。Oracle9i データベースに適した環境を確認してください。

表 3-2 データベース構成タイプ

環境	説明
General Purpose	ユーザーは、単純なトランザクションから複雑な問合せまで、様々なデータベース・タスクを実行します。このデータベース環境は、汎用的な用途に選択します。
Transaction Processing	ユーザーは、多数の同時トランザクションを実行します。各トランザクションは、少量のデータを処理する比較的単純な操作です。トランザクションは、データベース表のデータの読込み、書込みおよび削除から構成されています。 インターネット・コマース・サイトでよく見られるような請求データベースは、このデータベース構成の最も一般的な例です。これらのデータベースは、オンライン・トランザクション処理 (OLTP) データベースとも呼ばれます。
Data Warehouse	ユーザーは、大量のデータを処理する複雑な問合せを大量に実行します。応答時間、正確さおよび可用性が重要な問題となります。 これらの問合せ（通常は読取り専用）は、数レコードの単純なフェッチから、多数の異なる表の数千レコードをソートする複雑な問合せにまで及びます。データ・ウェアハウス環境は、意志決定支援システム (DSS) 環境としても知られています。
Customized	特殊な要件を満たす、カスタマイズされたデータベース構成または Oracle コンポーネントのカスタム・インストールを作成できます。 この構成方法は、詳細なコンポーネントおよびデータベース環境情報を提供する用意ができていない場合のみ選択します。このオプションを選択すると、事前構成データベースを選択する場合よりもインストール・セッションの時間が長くなります。
Software Only	データベースを作成せずに Oracle コンポーネントをインストールできます。 この構成方法は、データベースの作成時に詳細なデータベース構成情報を提供する用意ができていない場合のみ選択します。オラクル社では、データベース構成のテンプレートとして機能するシード・データベースを少なくとも 1 つはインストールすることをお勧めします。

関連資料： データベースの選択に影響される初期化ファイル・パラメータの詳細は、Database Configuration Assistant オンライン・ヘルプを参照

データベースの作成方法の選択

Database Configuration Assistant を使用して、[Transaction Processing](#)、[Data Warehouse](#) または [General Purpose](#) の環境用にデータベースを作成できます。Database Configuration Assistant は、インストール手順の一環としてデータベースを作成することを選択した場合に、Oracle Universal Installer により自動的に起動されます。インストール後にスタンドアロン・ツールとして実行することもできます。

Oracle Universal Installer を実行し、「Available Products」ウィンドウで「Oracle9i Database」を選択すると、「Installation Types」ウィンドウにインストール・タイプが表示されます。各インストール・タイプで、[表 3-2](#) に示すデータベース構成タイプを作成できます。

関連資料：

- スタンドアロン・モードでの Database Configuration Assistant の実行の詳細は、『Oracle9i Database for Windows プラットフォーム・ガイド』の「Windows でのインストール後のデータベース作成」を参照
- スタンドアロン・モードでのこのツールの起動手順は、『Oracle9i Database for Windows プラットフォーム・ガイド』の「Windows でのデータベース・ツール」を参照

「Enterprise Edition」、「Standard Edition」、「Personal Edition」および「Custom」インストール・タイプで作成されるデータベース構成タイプ（「General Purpose」、「Transaction Processing」、「Data Warehouse」、「Customized」および「Software Only」）と、必要なユーザー入力量を、[表 3-3](#)、[表 3-4](#) および [表 3-5](#) に示します。これらの選択肢を確認して、データベース要件やデータベース作成知識に最も適したデータベースを特定してください。

表 3-3 データベース構成 - 「Enterprise Edition」 および 「Personal Edition」

実行手順	結果
「Enterprise Edition」 または 「Personal Edition」 インストール・タイプを選択します。	<p>インストールの最後に Database Configuration Assistant が自動的に起動し、選択したデータベース構成タイプに従ってデータベースを構成します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ デフォルトの初期化パラメータ ■ Oracle JVM や Oracle Spatial コンポーネントなどの様々なデータベース・オプションの自動的なインストールおよび構成¹ ■ Advanced Replication 機能 ■ 専用サーバー・モードに構成されたデータベース² ■ NOARCHIVELOG に設定されたアーカイブ・モード <p>Database Configuration Assistant の起動前に入力を要求されるグローバル・データベース名と SID 以外は、ユーザーが入力する必要はありません。データベース作成プロセスの最後に、SYS および SYSTEM パスワードの変更を要求されます。</p> <p>注意： Personal Edition では、Oracle Real Application Clusters は提供されません。</p>

¹ Database Configuration Assistant は、Oracle Universal Installer でインストールされたコンポーネントのみを構成します。

² 専用サーバー・モードおよび共有サーバー・モードの説明は、『Oracle9i Database for Windows プラットフォーム・ガイド』の「Windows でのインストール後のデータベース作成」を参照してください。

注意： 「Enterprise Edition」 インストール・タイプで作成される Oracle9i データベースは、「Oracle Internet Directory」インストール・タイプを選択し、指定した Oracle ホームに Oracle9i データベースが現在インストールされていない場合にも作成されます。

表 3-4 データベース構成 - 「Standard Edition」

実行手順	結果
「Standard Edition」 インストール・タイプを選択します。	<p>インストールの最後に Database Configuration Assistant が自動的に起動し、選択したデータベース構成タイプに従ってデータベースを構成します。データベース作成プロセスの最後に、SYS および SYSTEM パスワードの変更を要求されます。</p> <p>「Standard Edition」 インストール・タイプの一部でないコンポーネントのリストは、付録 A 「インストール可能な個々のコンポーネント」を参照してください。</p>

表 3-5 データベース構成 - 「Custom」

実行手順	結果
<p>1. 「Custom」インストール・タイプを選択します。</p> <p>2. 「Available Product Components」ウィンドウで Oracle9i および追加の製品を選択します。</p> <p>3. 初期データベースを作成するかどうかを尋ねられたら「Yes」を選択します。</p> <p>Database Configuration Assistant により、データベース環境を選択するよう要求されます。</p> <p>Transaction Processing</p> <p>Data Warehouse</p> <p>General Purpose</p>	<p>Database Configuration Assistant は、選択した環境（「Transaction Processing」、「Data Warehouse」または「General Purpose」）および構成モード（専用サーバーまたは共有サーバー）に即し、カスタマイズされたデータベースの作成手順を示します。Oracle JVM、Oracle Spatial、Advanced Replication などのデータベース・オプション（インストールされている場合）が自動的に構成されます。このオプションは、次に示す設定のカスタマイズなどの高度なデータベース作成手順の経験がある場合にのみ、選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ データ、制御および UNDO ログ・ファイル設定 ■ 表領域およびエクステンツのサイズ ■ データベース・メモリー・パラメータ ■ アーカイブのモード、形式および宛先 ■ トレース・ファイルの宛先 ■ キャラクタ・セットの値 <p>データベース作成プロセスの最後に、SYS および SYSTEM パスワードの変更を要求されます。</p>

ネットワークの構成

Oracle Net Configuration Assistant を使用して、Oracle クライアントが Oracle9i データベースに接続できるような Oracle Net Services 環境を構成できます。Oracle Net Configuration Assistant は、ほとんどのインストール・タイプで Oracle Universal Installer から自動的に起動され、スタンドアロン・ツールとしても起動できます。

選択したインストール・タイプに応じて、Oracle Net Configuration Assistant は、次のいずれかの方法でネットワークを構成します。

- 最小限のユーザー入力で標準のデータベース接続用にネットワークを自動的に構成
- 多量のユーザー入力を要求して、カスタマイズされたネットワークを作成

構成は、デフォルトの %ORACLE_HOME%\network\admin ディレクトリにあるネットワーク構成ファイルを作成、変更します。

関連資料:

- スタンドアロン・モードでの Oracle Net Configuration Assistant の実行については、『Oracle9i Net Services 管理者ガイド』または Oracle Net Configuration Assistant オンライン・ヘルプを参照
- スタンドアロン・モードでの Oracle Net Configuration Assistant の起動手順は、『Oracle9i Database for Windows プラットフォーム・ガイド』の「Windows でのデータベース・ツール」を参照

サーバー・ネットワークの構成

次の表に、サーバーのインストール・タイプで作成されるネットワーク構成の種類と、必要とされるユーザー入力を示します。表 3-6 および表 3-7 を確認して、要件やネットワーク構成の知識に最も適したネットワーク構成を特定してください。

表 3-6 Net Services 構成 - 「Enterprise Edition」、「Standard Edition」または「Personal Edition」

実行手順	結果
1. 「Oracle9i Database」を選択します。	Oracle Net Configuration Assistant が次のファイル内に情報を構成して、Oracle Net Services 環境を自動的に作成します。
2. 「Enterprise Edition」、「Standard Edition」または「Personal Edition」インストール・タイプを選択します。	<ul style="list-style-type: none"> <li data-bbox="439 383 1315 574">■ listener.ora Oracle9i データベース用（オペレーティング・システムの推奨プロトコル、通常はポート 1521 上の TCP/IP を使用）と外部プロシージャ用（IPC プロトコルを使用）の両方のプロトコル・アドレスを持つ LISTENER という名前の リスナー を構成します。 外部プロシージャ用のサービス情報を構成します。 <li data-bbox="439 591 1315 939">■ sqlnet.ora オペレーティング・システム認証による接続（NTS アダプタを介して）受け入れるようデータベースを構成します。詳細は、『Oracle9i Database for Windows プラットフォーム・ガイド』の「Windows 認証の概要」を参照してください。 サーバーのネットワーク・ドメインを デフォルト・ドメイン（コンピュータが置かれている TCP/IP ドメイン）として構成します。このドメインは、接続文字列で指定される未修飾のネット・サービス名に自動的に付加されます。 サーバーが名前を 接続記述子 に解決するために使用するネーミング・メソッドを構成します。 <li data-bbox="439 956 1315 1060">■ tnsnames.ora 外部プロシージャ接続に使用する ネット・サービス名 のファイルを作成します。 注意： 「Enterprise Edition」、「Standard Edition」および「Personal Edition」インストール・タイプでは、LDAP 準拠の ディレクトリ・サーバー 構成は実行できません。ディレクトリ・サーバーの構成は、「Custom」インストール・タイプでしか実行できません。 <p data-bbox="439 1078 1315 1130">Oracle9i データベースの作成が正常に実行された場合、Database Configuration Assistant は追加の Oracle Net Services 情報を次のファイルに自動的に構成します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li data-bbox="439 1147 1315 1216">■ listener.ora Oracle9i データベース用のサービス情報を構成します。 <li data-bbox="439 1234 1315 1303">■ tnsnames.ora データベースが自身に接続するためのネット・サービス名を構成します。 <p data-bbox="439 1321 1315 1390">注意： Database Configuration Assistant は、Oracle Real Application Clusters インストール用の追加情報を構成します。『Oracle9i Real Application Clusters セットアップおよび構成』を参照してください。</p>

表 3-7 Net Services 構成 - 「Custom」

選択する インストール・タイプ	結果
1. 「Oracle9i Database」を選択します。	Oracle Net Configuration Assistant から、まず、Oracle9i データベースへの接続用の接続記述子に対するネーミング・メソッドの選択を要求されます。
2. 「Custom」を選択します。	<ul style="list-style-type: none"> ■ ディレクトリ・サーバーの使用構成を入力します。ディレクトリ・サーバーがある場合はそのタイプと場所を入力し、この Oracle ホームに対してデフォルトで使用される Oracle コンテキスト を指定する必要があります。この情報は、Oracle ホームのディレクトリ使用構成を設定していない場合に入力を要求されます。 ■ データベース接続に使用するリスナーを作成します。 ■ ローカル・データベースに接続する際に使用するネーミング・メソッドを選択します。デフォルトでは、ローカル・ネーミング・メソッドが選択されます。ほとんどの状況では、オラクル社はこのデフォルトを推奨します。ディレクトリ・ネーミング（ディレクトリ使用構成が完了している場合）、ローカル・ネーミング、ホスト・ネーミング、外部ネーミングのいずれかのネーミング・メソッドの使用を選択するオプションもあります。
3. 「Oracle Net Services」を選択します。	<p>続いて Oracle Net Configuration Assistant が次のファイル内に情報を構成して、Oracle Net Services 環境を自動的に作成します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ listener.ora <p>選択した名前とプロトコル・アドレスを持つリスナーを構成します。さらに、外部プロシージャ用のプロトコル・アドレスおよび静的サービス情報が構成されます。</p> ■ sqlnet.ora <p>オペレーティング・システム認証による接続を（NTS アダプタを介して）受け入れるようデータベースを構成します。詳細は、『Oracle9i Database for Windows プラットフォーム・ガイド』の「Windows 認証の概要」を参照してください。</p> <p>サーバーのネットワーク・ドメインをデフォルト・ドメイン（コンピュータが置かれている TCP/IP ドメイン）として構成します。このドメインは、接続文字列で指定される未修飾のネット・サービス名に自動的に付加されます。</p> <p>サーバーが名前を接続記述子に解決するために使用するネーミング・メソッドを構成します。</p> ■ tnsnames.ora <p>外部プロシージャ接続用のネット・サービス名エントリを作成します。</p> ■ ldap.ora <p>ディレクトリ・サーバーへのアクセスを構成します。</p>

表 3-7 Net Services 構成 - 「Custom」(続き)

選択する インストール・タイプ	結果
	Oracle9i データベースの作成が正常に実行された場合、Database Configuration Assistant は追加の Oracle Net Services 情報を次のファイルに自動的に構成します。
	<ul style="list-style-type: none"> ■ listener.ora Oracle9i データベース用のサービス情報を構成します。 ■ tnsnames.ora データベースが自身に接続するためのネット・サービス名を構成します。

クライアント・ネットワークの構成

次の表に、クライアントのインストール・タイプで作成されるネットワーク構成の種類と、必要とされるユーザー入力を示します。表 3-8 および表 3-9 を確認して、要件やネットワーク構成の知識に最も適したネットワーク構成を特定してください。

表 3-8 Net Services 構成 - 「Administrator」または「Runtime」

実行手順	結果
1. 「Oracle9i Client」を選択します。	Oracle Net Configuration Assistant は、ディレクトリ・サーバーを使用するかどうかの選択に基づいて、 ディレクトリ・ネーミング・メソッド または ローカル・ネーミング・メソッド を構成するよう要求します。
2. 「Administrator」または「Runtime」を選択します。	<p>ディレクトリ・サーバーの使用を選択する場合は、Oracle Net Configuration Assistant により、ディレクトリ・サーバーの使用構成を入力するよう要求されます。ディレクトリ・サーバーの使用を選択しない場合は、Oracle Net Configuration Assistant により、tnsnames.ora ファイルにネット・サービス名を構成するよう要求されます。</p> <p>続いて Oracle Net Configuration Assistant が次のファイル内に情報を構成して、クライアント環境を自動的に作成します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ sqlnet.ora ファイル クライアントのドメインをデフォルト・ドメイン（コンピュータが置かれている TCP/IP ドメイン）として構成します。このドメインは、接続文字列で指定される未修飾のネット・サービス名に自動的に付加されます。 クライアントが名前を接続記述子に解決するために使用するネーミング・メソッドを構成します。 ■ tnsnames.ora ファイル ローカル・ネーミング・メソッドが選択された場合は、データベースに接続するためのネット・サービス名を構成します。 ■ ldap.ora ファイル ディレクトリ・サーバーへのアクセスを構成します。

表 3-9 Net Services 構成 - 「Custom」

実行手順	結果
<ol style="list-style-type: none"> 1. 「Oracle9i Client」を選択します。 2. 「Custom」を選択します。 3. 「Oracle Net Services」を選択します。 	<p>Oracle Net Configuration Assistant により、名前を Oracle9i データベースへの接続用の接続記述子に解決するネーミング・メソッドの構成を要求されます。Oracle Net Configuration Assistant には、1 つ以上のネーミング・メソッド (ディレクトリ・ネーミング、ローカル・ネーミング、ホスト・ネーミング、外部ネーミング) を選択するオプションがあります。また、「Perform typical configuration」オプションを使用することもできます。</p> <p>「Perform typical configuration」オプションは、既存のディレクトリ使用構成に基づいて、ローカル・ネーミング・メソッドまたはディレクトリ・ネーミング・メソッドを自動的に選択します。</p> <p>選択内容に応じて、追加情報を入力するよう要求されます。ローカル・ネーミング・メソッドの場合は、使用するネット・サービス名、データベース・サービス名、ネットワーク・プロトコルの入力を要求されます。デフォルトでは、データベース・サービス名はグローバル・データベース名です。</p> <p>続いて Oracle Net Configuration Assistant が次のファイル内に情報を構成して、Oracle Net クライアント環境を自動的に作成します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ sqlnet.ora ファイル <p>オペレーティング・システム認証による接続を (NTS アダプタを介して) 要求するようクライアントを構成します。詳細は、『Oracle9i Database for Windows プラットフォーム・ガイド』の「Windows 認証の概要」を参照してください。</p> <p>クライアントのドメインをデフォルト・ドメイン (コンピュータが置かれている TCP/IP ドメイン) として構成します。このドメインは、接続文字列で指定される未修飾のネット・サービス名に自動的に付加されます。</p> <p>クライアントが名前を接続記述子に解決するために使用するネーミング・メソッドを構成します。</p> ■ tnsnames.ora ファイル <p>ローカル・ネーミング・メソッドが選択された場合は、データベースに接続するためのネット・サービス名を構成します。</p>

Oracle コンポーネントのインストール

この章では、コンポーネント CD またはハード・ディスク・ドライブから Oracle コンポーネントをインストールする方法を説明します。

この章の項目は次のとおりです。

- [Windows と UNIX でのインストールの相違](#)
- [Oracle9i をインストールする前に](#)
- [Oracle9i のインストールの開始](#)
- [インストール・タイプの選択](#)
- [インストール・セッション・ログの確認](#)
- [Oracle のコンポーネントとサービスの削除](#)

関連項目：

- [1-2 ページの「Optimal Flexible Architecture の使用方法」](#)
- [1-3 ページの「Oracle Universal Installer の制限事項」](#)
- レスポンス・ファイルの使用や、様々な言語での Oracle コンポーネントのインストールおよび使用などの詳細は、[付録 C 「拡張インストール」](#)を参照

Windows と UNIX でのインストールの相違

UNIX 環境で Oracle コンポーネントをインストールした経験のあるデータベース管理者は、UNIX で必要な手動セットアップ・タスクの多くが、Windows では必要ないことに注意する必要があります。表 4-1 に、UNIX と Windows でのインストールの主な相違点を示します。

表 4-1 UNIX と Windows でのインストールの主な相違点

対象	UNIX	Windows
PATH、ORACLE_BASE、ORACLE_HOME、ORACLE_SID などの環境変数	手動により設定	Oracle Universal Installer によりレジストリに設定。
データベース管理者の DBA アカウント	手動により作成	Oracle Universal Installer により作成。
Oracle Universal Installer を実行するためのアカウント	手動により作成	管理者権限でログイン。別のアカウントは不要。

関連資料：『Oracle9i Database for Windows プラットフォーム・ガイド』の「Oracle9i の Windows と UNIX での違い」

Oracle9i をインストールする前に

Oracle コンポーネントをインストールする前に、次のタスクを実行します。

1. 第 2 章「インストール前の要件」に示されている、該当のシステムおよびコンポーネント要件を確認し、満たしてから、インストールを開始してください。
2. Oracle Real Application Clusters をインストールする場合は、Oracle Universal Installer を実行する前に、付録 B「Oracle Real Application Clusters インストール前のタスク」を参照してください。
3. 「Administrators」グループのメンバーとして、Oracle コンポーネントをインストールするコンピュータにログオンします。プライマリ・ドメイン・コントローラ (PDC) またはバックアップ・ドメイン・コントローラ (BDC) 上にインストールする場合は、「Domain Admins」グループのメンバーとしてログオンします。
4. 環境変数 ORACLE_HOME が存在する場合は、これを削除します。環境変数の削除の詳細は、Microsoft オンライン・ヘルプを参照してください。

注意： 環境変数 ORACLE_HOME は、レジストリに自動的に設定されます。システム環境変数でこの変数を設定しないでください。インストールを正しく実行できなくなります。

5. 既存のリリース 2 (9.2.x) の Oracle ホームにインストールする場合は、すべての Oracle サービスを停止します。
 - a. 「Start」 → 「Settings」 → 「Control Panel」 → 「Administrative Tools」 → 「Services」 を選択します。
 - b. 「Started」 の状態の Oracle サービス（「Ora」 または 「Oracle」 で始まる名前）がある場合は、そのサービスを選択します。
 - c. 「Action」 → 「Stop」 を選択します。
 - d. 「Close」 をクリックして、「Services」 ウィンドウを閉じます。
6. 4-3 ページの [「Oracle9i のインストールの開始」](#) に進みます。

Oracle9i のインストールの開始

Oracle9i コンポーネントは、直接 CD からインストールするか、または CD をハード・ディスク・ドライブにコピーし、そこからインストールできます。

CD から Oracle コンポーネントをインストールするには、次のようにします。

1. 最初のコンポーネント CD を挿入します。

「Autorun」 ウィンドウが自動的に表示されます。「Autorun」 ウィンドウが表示されない場合は、次の操作を行います。

 - a. 「Start」 → 「Run」 をクリックします。
 - b. 次のコマンドを入力します。
< ドライブ文字 >:¥autorun¥autorun.exe

「Autorun」 ウィンドウが表示されます。
2. 「Autorun」 ウィンドウから **「Install/Deinstall Products」** をクリックします。

「Welcome」 ウィンドウが表示されます。
3. **「Next」** をクリックします。

Oracle Universal Installer がクラスタ上で実行されている場合は、「Cluster Node Selection」 ウィンドウが表示されます。Oracle ソフトウェアをインストールするノードを選択します。ローカル・ノードは常にデフォルトで選択されます。
4. そうでない場合、「File Locations」 ウィンドウが表示されます。「Source」 フィールド内のディレクトリ・パスは変更しないでください。このパスは、インストール・ファイルの場所を示します。

5. 「Destination」フィールドに、Oracle コンポーネントをインストールする Oracle ホーム名とディレクトリ・パスを入力します。

Oracle Real Application Clusters をインストールする場合は、クラスタ内のすべてのノードが同じ Oracle ホーム名を持つ必要があります。

Oracle ホーム名の長さは最大 16 文字で、英数字とアンダースコアのみ使用できます。空白を含めることはできません。Oracle Universal Installer では、数字で始まる文字を「Name」フィールドに入力できません。デフォルトのディレクトリ・パスは、< 空き領域が最大のドライブ >:\oracle\ora92 です。

注意：すでに Oracle9i リリース 2 (9.2.x) のクライアント・ソフトウェアが格納されている Oracle ホーム・ディレクトリに Oracle9i をインストールする場合、リスナーは作成されません。リスナーを作成するには、Oracle Net Configuration Assistant をインストールして実行します。管理者クライアントを Oracle9i より前にインストールした場合は、Oracle Net Configuration Assistant がすでにインストールされています。

6. 「Next」をクリックします。

「Available Products」ウィンドウが表示されます。4-5 ページの「インストール・タイプの選択」に進みます。

関連項目：

- 1-2 ページの「インストールの計画」
- 付録 B 「Oracle Real Application Clusters インストール前のタスク」
- 付録 C 「拡張インストール」

ハード・ディスク・ドライブから Oracle コンポーネントをインストールするには、次のようにします。

1. ハード・ディスクの同じレベルに、Disk1 および Disk2 という名前の 2 つのディレクトリを作成します。これらの名前を必ず使用してください。次に例を示します。

```
d:\install\Disk1
```

```
d:\install\Disk2
```

2. 各コンポーネント CD の内容を該当するディレクトリにコピーします。
3. Disk1\setup.exe を実行します。

「Welcome」ウィンドウが表示されます。

インストール・タイプの選択

ニーズを最もよく満たす最上位の Oracle コンポーネントおよびインストール・タイプを [表 4-2](#) から選択します。「Next」をクリックします。選択に基づいて、次の項のいずれかに進みます。

表 4-2 最上位コンポーネント

最上位コンポーネント	含まれるインストール・タイプ
Oracle9i Database	<ul style="list-style-type: none">■ 「Enterprise Edition」、「Standard Edition」または「Personal Edition」のインストール■ Oracle9i Database の「Custom」インストール
Oracle9i Client	<ul style="list-style-type: none">■ Oracle9i Client の「Administrator」または「Runtime」インストール■ Oracle9i Client の「Custom」インストール
Oracle9i Management and Integration	<ul style="list-style-type: none">■ Oracle Internet Directory のインストール■ Oracle9i Management and Integration の「Custom」インストール

関連項目：

- [1-2 ページの「インストールの計画」](#)
- 選択するインストール・タイプが不明な場合は、[付録 A 「インストール可能な個々のコンポーネント」](#) を参照

「Enterprise Edition」、「Standard Edition」または「Personal Edition」のインストール

「Enterprise Edition」、「Standard Edition」または「Personal Edition」を選択した場合に表示されるインストール・ウィンドウは、使用しているコンピュータの構成および現在インストールされている Oracle コンポーネントによって異なります。

1. 「Database Configuration Types」ウィンドウから、要求に合うデータベース構成を選択します。表 4-3 に、使用可能な構成環境を説明します。

表 4-3 データベース構成環境

選択したオプション	Oracle Universal Installer の動作
General Purpose Transaction Processing Data Warehouse	Database Configuration Assistant を自動的に起動し、選択した環境用に最適化した事前構成データベースをインストールします。データベース作成プロセスの最後に、SYS および SYSTEM パスワードの変更を要求されます。
Customized	Database Configuration Assistant を自動的に起動し、カスタマイズしたデータベースの作成を可能にします。データベース作成プロセスの最後に、SYS および SYSTEM パスワードの変更を要求されます。 このオプションは、事前構成オプションよりも時間が多くかかります。
Software Only	ソフトウェアのみをインストールし、構成ツールは実行しません。このオプションは、コンピュータがメモリー要件を最小で満たしている場合に選択します。 インストール後に Database Configuration Assistant および Oracle Net Configuration Assistant を手動で起動し、データベースおよび Oracle Net Services 環境をインストールおよび構成します。手順 9 に進みます。

2. サービスのポート番号を入力します。Microsoft Transaction Server が検出されると、Oracle サービスによってトランザクション・サーバー・サービスが作成されます。

3. 「Next」をクリックします。

「Database Identification」ウィンドウが表示されます。

4. **グローバル・データベース名**および **SID** を、表示されたフィールドに入力します。「Customized」データベース環境の構成を選択した場合は、手順 9 に進みます。

この情報は、インストール後に Database Configuration Assistant によってデータベースが作成される際に使用されます。

注意： Oracle Real Application Clusters では、入力した SID の末尾に識別子が自動的に追加されます。たとえば、入力値が DB の場合、クラスタの最初のインスタンスには DB1 という SID、2 番目のインスタンスには DB2 という SID が設定されます。

5. 「Next」をクリックします。
「Database File Location」ウィンドウが表示されます。
6. データベース・ファイルのディレクトリ位置を入力します。
7. 「Next」をクリックします。
「Database Character Set」ウィンドウが表示されます。
8. 使用可能なオプションから、データベース・キャラクタ・セットを選択します。デフォルトでは、データベース・キャラクタ・セットは、オペレーティング・システムのロケール設定に基づいて自動的に選択されます。
9. 「Next」をクリックします。
「Summary」ウィンドウが表示されます。
10. 領域要件を検討して十分なディスク領域があることを確認し、「Install」をクリックします。
11. CD からインストールしている場合は、後続のディスクを挿入してインストールを継続するよう要求されます。
12. 選択したコンポーネントがインストールされるのを待ちます。
インストールの最後に「Configuration Tools」ウィンドウが表示されます。

表 4-4 に、データベースおよび Oracle Net Services 環境の作成および構成を自動的に開始するアシスタントをリストします。

表 4-4 データベース・インストール・タイプでの構成アシスタント

ツール	起動する条件	動作
Oracle Cluster Configuration Assistant	Oracle Universal Installer がクラスタで起動した場合。「Software Only」オプションが選択されている場合は表示されません。	インストールで選択されたすべてのノードでグローバル・サービス・デーモン (GSD) を起動します。 関連項目： 付録 B 「Oracle Real Application Clusters インストール前のタスク」

表 4-4 データベース・インストール・タイプでの構成アシスタント (続き)

ツール	起動する条件	動作
Oracle Net Configuration Assistant	「Software Only」構成タイプが選択されている場合を除くすべての場合。 現在指定されている Oracle ホームに Oracle Net Services リリース 9.2 がインストールされていない場合。	Oracle Net Services 環境を自動的に構成します。 関連項目: 実行される構成手順の詳細は、3-8 ページの「サーバー・ネットワークの構成」を参照
Database Configuration Assistant	現在指定されている Oracle ホームに Oracle データベースがインストールされていない場合。 関連項目: パスワード管理の詳細は、6-2 ページの「ユーザー名およびパスワードの概要」を参照	Oracle9i リリース 2 (9.2.x) データベースを自動的に作成します。データベース作成プロセスの最後に、SYS および SYSTEM パスワードの変更を要求されます。 関連項目: 実行される構成手順の詳細は、3-5 ページの「データベースの作成方法の選択」を参照
Oracle HTTP Service の起動	「Software Only」構成タイプが選択されている場合を除くすべての場合。	HTTP リスナーを現在のセッションのスタンドアロン・プロセスとして非 SSL モードで作成し、起動します。ポート設定を確認し、「End of Installation」ウィンドウの URL にアクセスします。 OracleHOME_NAMEHTTPServer サービスは、コンピュータの再起動後に起動します。
Oracle Intelligent Agent	データベースおよび Intelligent Agent がインストールされている場合。	Agent サービスを自動的に開始します。

「Configuration Tools」ウィンドウには、これらのアシスタントの実行結果が表示されます。

13. 「Next」をクリックして操作を続行します。

「End of Installation」ウィンドウが表示されます。

14. 「Exit」をクリックして Oracle Universal Installer を終了するか、「Next Install」をクリックして別のコンポーネントをインストールします。

関連項目:

- インストール・セッションのサマリーは、4-19 ページの「インストール・セッション・ログの確認」を参照
- 第 5 章「インストール後の構成タスク」

Oracle9i Database の「Custom」インストール

Oracle9i Database の「Custom」インストール・タイプを選択した場合は、「Available Product Components」ウィンドウが表示されます。「Available Product Components」ウィンドウの「Install Status」列には、インストールに使用できるすべてのコンポーネントの状態が表示されます。

1. インストールする各コンポーネントを選択します。

注意： チェック・マークの付いたコンポーネントのみがインストールされます。

2. 「Next」をクリックします。

「Component Locations」ウィンドウが表示されます。ここで、Oracle ホーム以外に置くコンポーネントをインストールする場所を選択できます。

3. デフォルトの場所を受け入れるには、「Next」をクリックします。それ以外の場合は、リスト・ボックスからコンポーネントを選択し、デフォルトの場所を変更します。
4. 「Available Product Components」ウィンドウで次のコンポーネントのいずれかを選択した場合は、要求に応じて適切な応答を入力します。大部分のコンポーネントは、追加情報の入力を要求されることなくインストールされることに注意してください。

表 4-5 Oracle9i Database を「Custom」でインストールした場合のコンポーネントからの要求

選択したオプション	要求される内容
Oracle Net Services	ディレクトリ使用、リスナーおよびネーミング・メソッドなどの情報を入力します。 関連項目： 実行される構成手順の詳細は、3-8 ページの「 サーバー・ネットワークの構成 」を参照
Oracle Real Application Clusters	ソフトウェアをインストールするクラスター・ノードを選択します。 注意： このコンポーネントは、使用しているコンピュータがクラスターの一部として検出されている場合のみ選択項目として表示されます。
Oracle Services for Microsoft Transaction Server	Oracle MTS Recovery Service がリスニングするポートを入力します。

表 4-5 Oracle9i Database を「Custom」でインストールした場合のコンポーネントからの要求（続き）

選択したオプション	要求される内容
Oracle9i	<ul style="list-style-type: none"> ■ データベースを作成します。インストールの最後に Database Configuration Assistant が起動し、データベースの作成を順を追って指示します。データベース作成プロセスの最後に、SYS および SYSTEM パスワードの変更を要求されます。 ■ 作成するデータベースの グローバル・データベース名 および SID を入力します。 <p>関連項目： 実行できるデータベース構成手順の説明は、3-5 ページの「データベースの作成方法の選択」を参照</p>

「Summary」ウィンドウが表示されます。

5. 領域要件を検討して十分なディスク領域があることを確認し、「Install」をクリックします。
6. 選択したコンポーネントがインストールされ、構成ツールが実行を完了するまで待ちます。構成アシスタントが失敗した場合は、エラーの原因を修正して「Retry」をクリックします。

「End of Installation」ウィンドウが表示されます。

7. 「Exit」をクリックして Oracle Universal Installer を終了するか、「Next Install」をクリックして別のコンポーネントをインストールします。

関連項目：

- インストール・セッションのサマリーは、4-19 ページの「[インストール・セッション・ログの確認](#)」を参照
- 第 5 章「インストール後の構成タスク」

Oracle9i Client の「Administrator」または「Runtime」インストール

クライアントの「Administrator」または「Runtime」インストール・タイプを選択すると、「Summary」ウィンドウが表示されます。

1. 領域要件を検討して十分なディスク領域があることを確認し、「Install」をクリックします。
2. 選択したコンポーネントがインストールされるのを待ちます。

「Configuration Tools」ウィンドウが表示され、Oracle Net Configuration Assistant が起動します。現在指定されている Oracle ホームに Oracle Net Services リリース 9.2 がインストールされていない場合は、Oracle Net Configuration Assistant から Oracle9i データベースへのクライアント・アクセスの構成方法を選択するよう要求されます。

関連項目：

3-11 ページの「クライアント・ネットワークの構成」

3. Oracle9i データベースへのクライアント・アクセスの構成方法を選択します。選択の詳細は、オンライン・ヘルプと 3-11 ページの「クライアント・ネットワークの構成」を参照してください。

「End of Installation」ウィンドウが表示されます。

4. 「Exit」をクリックして Oracle Universal Installer を終了するか、「Next Install」をクリックして別のコンポーネントをインストールします。

関連項目：

- インストール・セッションのサマリーは、4-19 ページの「インストール・セッション・ログの確認」を参照
- 第 5 章「インストール後の構成タスク」
- Oracle9i Client の各インストール・タイプでインストールされるコンポーネントのリストは、A-6 ページの「Oracle9i Client のコンポーネント」を参照

Oracle9i Client の「Custom」インストール

Oracle9i Client の「Custom」インストール・タイプを選択した場合は、「Available Product Components」ウィンドウが表示されます。「Available Product Components」ウィンドウの「Install Status」列には、インストールに使用できるすべてのコンポーネントの状態が表示されます。

1. インストールする各コンポーネントを選択します。

注意： チェック・マークの付いたコンポーネントのみがインストールされます。

2. インストールするコンポーネントを選択し、「Next」をクリックします。

「Component Locations」ウィンドウが表示されます。ここで、コンポーネントをインストールする場所を選択できます。

3. デフォルトの場所を受け入れるには、「Next」をクリックします。それ以外の場合は、リスト・ボックスからコンポーネントを選択し、場所を変更します。

4. 表 4-6 に示されたコンポーネントのいずれかを選択した場合は、要求に応じて適切な応答を入力します。大部分のコンポーネントは、追加情報の入力を要求されることなくインストールされることに注意してください。

表 4-6 Oracle9i Client を「Custom」でインストールした場合のコンポーネントからの要求

選択したオプション	要求される内容
Oracle Net Services	現在指定されている Oracle ホームに Oracle Net Services がインストールされていない場合は、Oracle9i データベースにアクセスするようクライアントを構成します。 関連項目： 実行される構成手順の詳細は、3-11 ページの「 クライアント・ネットワークの構成 」を参照
Oracle Services for Microsoft Transaction Server	Oracle MTS Recovery Service がリスニングするポートを入力します。

「Summary」ウィンドウが表示されます。

5. 領域要件を検討して十分なディスク領域があることを確認し、「**Install**」をクリックします。
6. 選択したコンポーネントがインストールされ、構成ツールが実行を完了するまで待ちます。
- 「End of Installation」ウィンドウが表示されます。
7. 「**Exit**」をクリックして Oracle Universal Installer を終了するか、「**Next Install**」をクリックして別のコンポーネントをインストールします。

関連項目：

- インストール・セッションのサマリーは、4-19 ページの「[インストール・セッション・ログの確認](#)」を参照
- [第 5 章「インストール後の構成タスク」](#)
- Oracle9i Client の各インストール・タイプでインストールされるコンポーネントのリストは、A-6 ページの「[Oracle9i Client のコンポーネント](#)」を参照

Oracle Internet Directory のインストール

「Oracle Internet Directory」を選択した場合に表示されるインストール・ウィンドウは、使用しているコンピュータの構成および現在インストールされている Oracle コンポーネントによって異なります。表 4-7 に、Oracle Internet Directory をインストールするために実行する必要のある手順をまとめます。次の選択項目の 1 つに進みます。

表 4-7 Oracle Internet Directory のインストール・オプション

Oracle9i データベースが次のような場合	結果	次に進む手順
リリース 2 (9.2.x) が同じ Oracle ホームにインストールされているが、Oracle Internet Directory リリース 9.2 はインストールされていない場合	「Using an Existing Instance」ウィンドウが表示され、Oracle Internet Directory に使用する SID の入力を要求されます。	4-13 ページの「 Oracle Internet Directory の最初のインストール 」の手順 1
リリース 2 (9.2.x) および Oracle Internet Directory リリース 9.2 がコンピュータにインストールされていない場合	「Database Identification」ウィンドウが表示され、Oracle Internet Directory リリース 9.2 と同じ Oracle ホーム・ディレクトリに Oracle9i データベースが自動的にインストールされます。	4-13 ページの「 Oracle Internet Directory の最初のインストール 」の手順 3

Oracle Internet Directory の最初のインストール

「Installation Types」ウィンドウで「Oracle Internet Directory」を選択した後で、「Using an Existing Instance」ウィンドウが表示されます。Oracle Internet Directory をインストールするには、次のようにします。

- 次のオプションのどちらかを選択します。
 - Oracle Internet Directory インストールの現在の Oracle ホームから既存のデータベースを使用するには、「Yes」を選択します。
 - Oracle Internet Directory インストール用の新規データベースを作成するには、「No」を選択します。
- 「Next」をクリックします。
「Database Identification」ウィンドウが表示されます。
- 次のいずれかの処理を実行します。
 - 既存のデータベースを使用している場合は、既存のデータベースの SID を入力し、「Next」をクリックします。このデータベースは、現在の Oracle ホーム・ディレクトリに存在する必要があることに注意してください。
 - 新規データベースを作成する場合は、適切なフィールドに **グローバル・データベース名** および **SID** の値を入力します。「Next」をクリックします。

「Database File Location」ウィンドウが表示されます。

4. Oracle Internet Directory データベース・ファイルをインストールするディレクトリ位置を入力します。これらのデータベース・ファイルには、構成中に作成される Oracle Internet Directory に固有の表が含まれます。
5. 「Next」をクリックします。
Oracle9i リリース 2 (9.2.x) および Oracle Internet Directory リリース 9.2 がインストールされていない場合は、「Database Character Set」ウィンドウが表示されます。デフォルト値を受け入れます。
6. 「Next」をクリックします。
「Summary」ウィンドウが表示されます。サマリー情報を検討して、十分なディスク領域があることを確認します。
7. 「Install」をクリックします。
「Install」ウィンドウが表示されます。表 4-8 の値は、インストール中に自動的に設定されます。

表 4-8 インストール時に設定される Oracle Internet Directory の値

設定	値
暗号化パスワードの使用	Yes
暗号化スキーマ	MD4
Oracle Internet Directory に格納されるディレクトリのおおよそのエントリ数	10,000 未満
管理者識別名のパスワード (cn=orcladmin)	welcome

インストールの最後に「Configuration Tools」ウィンドウが表示されます。

表 4-9 に、Oracle Net Services および Oracle Internet Directory 環境の作成および構成を自動的に開始するアシスタントを示します。

表 4-9 「Oracle Internet Directory」インストール・タイプでの構成アシスタント

ツール	起動する条件	動作
Oracle Net Configuration Assistant	現在指定されている Oracle ホームに Oracle Net Services がインストールされていない場合	Oracle Net Services 環境を自動的に構成します。 関連項目： 実行される構成手順の詳細は、3-8 ページの「サーバー・ネットワークの構成」を参照

表 4-9 「Oracle Internet Directory」 インストール・タイプでの構成アシスタント (続き)

ツール	起動する条件	動作
Database Configuration Assistant	Oracle Internet Directory インストールで Oracle ホームの既存のデータベースを使用するケースを除くすべての場合	Enterprise Edition がインストールされていない新規 Oracle ホームに Oracle Internet Directory をインストールする場合は、Oracle9i リリース 2 (9.2.x) データベースに Oracle Internet Directory の表領域およびスキーマを作成します。 新規データベースがインストールされる場合は、Database Configuration Assistant が自動的に起動し、AL32UTF-8 キャラクタ・セットのデータベースを作成します。 データベース作成プロセスの最後に、SYS および SYSTEM パスワードの設定を要求されます。
OID Configuration Assistant	すべての場合	Oracle Internet Directory ディレクトリ・サーバーを自動的に起動し、デフォルト・スキーマおよびディレクトリ情報ツリー (DIT) を構成して様々な Oracle コンポーネントをサポートします。
Oracle Intelligent Agent	データベースおよび Intelligent Agent がインストールされている場合	Agent サービスを自動的に開始します。
Oracle HTTP Service の起動	すべての場合	HTTP リスナーを現在のセッションのスタンドアロン・プロセスとして非 SSL モードで作成し、起動します。ポート設定を確認し、「End of Installation」ウィンドウの URL にアクセスします。 OracleHOME_NAMEHTTPServer サービスは、コンピュータの再起動後に起動します。

「End of Installation」ウィンドウが表示されます。

8. 「Exit」をクリックして Oracle Universal Installer を終了するか、「Next Install」をクリックして別のコンポーネントをインストールします。

関連項目： インストール・セッションのサマリーは、4-19 ページの「[インストール・セッション・ログの確認](#)」を参照

Oracle9i Management and Integration の「Custom」インストール

Oracle9i Management and Integration の「Custom」インストール・タイプを選択した場合は、「Available Product Components」ウィンドウに、インストール可能なすべてのコンポーネントが表示されます。

1. インストールする各コンポーネントのチェックボックスを選択します。

注意： チェック・マークの付いたコンポーネントのみがインストールされます。

2. 「Next」をクリックします。

「Component Locations」ウィンドウが表示されます。ここで、コンポーネントをインストールする場所を選択できます。

3. デフォルトの場所を受け入れるには、「Next」をクリックします。それ以外の場合は、コンポーネントを選択して、デフォルトの場所を変更するテキスト・ボックスを使用可能にします。その後、「Next」をクリックします。

「Database Identification」ウィンドウが表示されます。

4. Oracle9i データベースの **グローバル・データベース名** および **SID** を入力します。

5. 「Next」をクリックします。

「OID User Password Encryption」ウィンドウが表示されます。

6. パスワードの暗号化を有効にするかどうかを選択し、「Next」をクリックします。

「User Password Hashing Algorithm」ウィンドウが表示されます。

7. 使用する暗号化スキーマを選択し、「Next」をクリックします。

「OID Administrator Password」ウィンドウが表示されます。

8. パスワードを入力します。

このパスワードを使用して、Oracle Internet Directory におけるすべての変更を行うことができます。

9. 同じパスワードを再度入力し、「Next」をクリックします。

「OID Size Configuration」ウィンドウが表示されます。

10. Oracle Internet Directory に格納するディレクトリのおおよそのエントリ数を選択し、「Next」を選択します。

「Create Database」ウィンドウが表示されます。

11. このインストール・セッション中に新規データベースを作成するかどうかを選択し、「Next」を選択します。
データベースの作成を選択した場合は、「Database File Locations」ウィンドウが表示されます。
12. 「Destination」フィールドに、Oracle コンポーネントをインストールする Oracle ホーム名とディレクトリ・パスを入力し、「Next」をクリックします。

注意： Oracle9i リリース 2 (9.2.x) ソフトウェアは、既存の Oracle ホームにはインストールしないでください。

「Database Character Set」ウィンドウが表示されます。

13. 使用可能なオプションから、データベース・キャラクタ・セットを選択します。デフォルトでは、データベース・キャラクタ・セットは、オペレーティング・システムのロケール設定に基づいて自動的に選択されます。
14. 「Next」をクリックします。
「Summary」ウィンドウが表示されます。
15. 領域要件を検討して十分なディスク領域があることを確認し、「Install」をクリックします。
インストールの最後に「Configuration Tools」ウィンドウが表示されます。

表 4-10 に、Oracle Internet Directory で使用する Oracle9i データベースの作成および構成を自動的に開始するアシスタントをリストします。

表 4-10 Oracle9i Management and Integration の「Custom」インストール・タイプでの構成アシスタント

ツール	起動する条件	動作
Oracle Net Configuration Assistant	現在指定されている Oracle ホームに Oracle Net Services がインストールされていない場合	Oracle Net Services 環境を自動的に構成します。 関連項目： 実行される構成手順の詳細は、3-8 ページの「サーバー・ネットワークの構成」を参照
Database Configuration Assistant	「Available Product Components」ウィンドウで「Oracle9i」を選択し、Oracle9i データベースをインストールするためのプロンプトで「Yes」を選択した場合	Database Configuration Assistant が自動的に起動し、「Custom」インストールを順を追って指示し、AL32UTF-8 キャラクタ・セットでデータベースを作成します。データベース作成プロセスの最後に、SYS および SYSTEM パスワードの変更を要求されます。
OID Configuration Assistant	「Available Product Components」ウィンドウで「Oracle Internet Directory」を選択した場合	Oracle Internet Directory Server を自動的に起動し、デフォルト・スキーマおよび DIT を構成して様々な Oracle コンポーネントをサポートします。

表 4-10 Oracle9i Management and Integration の「Custom」インストール・タイプでの構成アシスタント（続き）

ツール	起動する条件	動作
Oracle Intelligent Agent	データベースおよび Intelligent Agent がインストールされている場合	Agent サービスを自動的に開始します。
Oracle HTTP Service の起動	「Available Product Components」ウィンドウで「Oracle HTTP Server」を選択した場合	HTTP リスナーを非 SSL モードで起動します。ポート設定を確認し、「End of Installation」ウィンドウの URL にアクセスします。
Oracle Workflow Configuration Assistant	「Available Product Components」ウィンドウで Oracle Workflow のインストールを選択した場合	Oracle Workflow スキーマを Oracle9i データベースに構成します。 Workflow アカウント、Workflow パスワード、SYS パスワード、SYSTEM パスワード、インストール・オプション、言語の選択、接続方法および接続文字列の入力を要求されます。複数のコマンド・プロンプトが自動的に開いて閉じます。これらのウィンドウは手動で閉じないでください。手動で閉じると、構成プロセスが中断します。 関連資料： Oracle Workflow Configuration Assistant の使用方法は、『Oracle Workflow Server インストレーション・ノート』を参照

「End of Installation」ウィンドウが表示されます。

16. 「Exit」をクリックして Oracle Universal Installer を終了するか、「Next Install」をクリックして別のコンポーネントをインストールします。

関連項目：

- インストール・セッションのサマリーは、4-19 ページの「インストール・セッション・ログの確認」を参照
- 第 5 章「インストール後の構成タスク」

インストール・セッション・ログの確認

Oracle Universal Installer を初めて実行したときに、<システム・ドライブ>:\Program Files\Oracle\Inventory\logs ディレクトリが作成されます。インストールされたコンポーネントのインベントリと実行されたインストール・アクションは、このディレクトリに保存されます。

ログ・ファイル名の形式は `installActionsdate_time.log` (たとえば、`installActions2001-07-14_09-00-56AM.log` など) です。

Oracle Universal Installer の任意のウィンドウで「Installed Products」を選択すると、インストール済のコンポーネントのリストを表示できます。インストールされたプログラムのウィンドウが表示されます。

注意： Inventory ディレクトリやその内容を、削除または手動で変更しないでください。このような操作を行った場合、インストールする製品を Oracle Universal Installer が検出できなくなります。

Oracle のコンポーネントとサービスの削除

この項では、Oracle のコンポーネント、ユーティリティおよびサービスの削除方法を説明します。

注意： Oracle9i JVM を削除すると、Oracle Universal Installer は、Oracle9i JVM に依存しているデータベースおよびその他の製品をシステムから削除します。

次の内容について説明します。

- [Oracle サービスの停止](#)
- [Oracle Universal Installer によるコンポーネントの削除](#)
- [レジストリからの Oracle キーの削除](#)

注意： 手動によるコンポーネントの削除は、インストールの途中で Oracle Universal Installer を終了する場合のみ、行ってください。次に例を示します。

- 「Cancel」を選択した場合
- コンピュータの電源をオフにした場合
- インストールが完了していない場合（つまり、必要な構成ツールが最後まで実行されていない場合）

この場合、Oracle Universal Installer はインストールをインベントリに登録しません。ただし、ファイルは Oracle ホームにコピーされている可能性があります。ファイルを手動で削除して、インストールを再開します。

Oracle サービスの停止

まず Windows の Oracle サービスを停止してから、Oracle コンポーネントまたはレジストリ・エントリの削除を実行する必要があります。

Windows のサービスを停止するには、次のようにします。

1. 「Control Panel」の「Services」を開きます。
「Start」→「Settings」→「Control Panel」→「Administrative Tools」→「Services」を選択します。
2. 「Started」の状態の Oracle サービス（Oracle または Ora で始まる名前）を選択し、「Action」→「Stop」をクリックします。
3. 「Close」をクリックして、「Services」ウィンドウを閉じます。
4. 「Control Panel」を閉じます。

Oracle Internet Directory サービスの停止および削除

1. コマンド・プロンプトで Oracle Internet Directory Server を停止します。

```
C:¥> oidctl CONNECT=NET_SERVICE_NAME SERVER=OIDLDAPD  
INSTANCE=SERVER_INSTANCE_NUMBER STOP
```

NET_SERVICE_NAME は Oracle Internet Directory Server へのネットワーク接続、SERVER_INSTANCE_NUMBER はインスタンス番号です（この番号は Oracle Directory Manager の「Server List」タブに表示されます）。

2. コマンド・プロンプトで Oracle Internet Directory モニターを停止します。

```
C:¥> oidmon STOP
```

- レジストリから Oracle Internet Directory サービス OracleDirectoryService を削除します。

```
C:\> oidmon REMOVE
```
- 4-21 ページの「[Oracle Universal Installer によるコンポーネントの削除](#)」の手順に従って、Oracle Internet Directory で構成されている Oracle9i データベースを削除します。

Oracle Universal Installer によるコンポーネントの削除

ここでは、Oracle コンポーネントを手動で削除するかわりに、Oracle Universal Installer を使用して削除（インストーラ・インベントリから削除）する方法を説明します。

手動で（たとえば、Windows エクスプローラやコマンド・プロンプトでディレクトリ構造を削除して）Oracle ホームを削除しないでください。Oracle ホームのコンポーネントが、Oracle Universal Installer インベントリに登録されたままになります。その後、同じ Oracle ホームにインストールしようとする、すでにインストールされていると判断されるため、選択された一部またはすべてのコンポーネントはインストールされません。

Oracle Universal Installer は、インストール中に Oracle コンポーネント用の Windows サービスを作成します。ただしインストーラは、Oracle Net Configuration Assistant、Oracle Internet Directory Configuration Assistant および Database Configuration Assistant で作成されたサービスは削除しません。

Oracle Universal Installer でコンポーネントを削除するには、次のようにします。

- 4-20 ページの「[Oracle サービスの停止](#)」に示されている手順に従ってください。
- 「Start」→「Programs」→「Oracle Installation Products」→「Universal Installer」を選択します。

Oracle Universal Installer の「Welcome」ウィンドウが表示されます。

- 「Deinstall Products」をクリックします。
「Inventory」ウィンドウが表示されます。
- 削除するコンポーネントが見つかるまで、インストール済のコンポーネントのツリーを展開します。
- 削除する各コンポーネントを選択します。
- 「Remove」をクリックします。
「Confirmation」ウィンドウが表示されます。
- 「Yes」をクリックして、選択したコンポーネントを削除します。

注意： コンポーネントによっては、削除すると他のコンポーネントが正しく機能しなくなる可能性があることを示すメッセージが表示されます。

コンポーネントがコンピュータから削除されます。「Inventory」ウィンドウが表示されます。このウィンドウには、削除されたコンポーネントは表示されていません。

8. 「Close」をクリックして、「Inventory」ウィンドウを閉じます。
9. 「Exit」を選択して、Oracle Universal Installer を終了します。

レジストリからの Oracle キーの削除

まれに、Oracle コンポーネントを完全にコンピュータから削除することで、深刻なシステム上の問題を修正する必要がある場合があります。

コンピュータからの Oracle コンポーネントの全削除は最後の手段として、またシステムから Oracle コンポーネントをすべて削除する場合にのみ行ってください。

Oracle Universal Installer は、Oracle Net Configuration Assistant、Oracle Internet Directory Configuration Assistant および Database Configuration Assistant で作成されたサービスは削除しません。また、いくつかのレジストリ・キーは削除されません。

注意： ORADIM ユーティリティを使用して、インスタンスおよびサービスを手動で削除できます。『Oracle9i Database for Windows プラットフォーム・ガイド』の「Windows でのインストール後のデータベース作成」を参照してください。

注意： Microsoft レジストリ エディタは、自己責任において使用してください。レジストリ エディタの使用を誤ると、重大な問題につながる可能性があります。オペレーティング・システムの再インストールが必要になる場合があります。

Oracle Net Service レジストリ・エントリを削除するには、次のようにします。

1. 「Administrators」グループのメンバーとしてログオンします。
2. 4-20 ページの「Oracle サービスの停止」に示されている手順に従ってください。
3. コマンド・プロンプトからレジストリ エディタを起動します。
C:¥> regedt32
4. HKEY_LOCAL_MACHINE¥SYSTEM¥CurrentControlSet¥Services に移動して OracleHOME_NAME¥TNSListener レジストリ・エントリを削除します。Oracle Universal Installer が自動的にその他すべての Oracle Net Services を削除します。
5. レジストリ エディタを終了します。

コンピュータから Oracle コンポーネントをすべて削除するには、次のようにします。

注意： この手順では、コンピュータからすべての Oracle コンポーネント、サービスおよびレジストリ・エントリが削除されます。さらに、`%ORACLE_BASE%\oradata\%DB_NAME` の下のデータベース・ファイルもすべて削除されます。レジストリ・エントリを削除する際は、特に気を付けてください。間違ったエントリを削除すると、システムに不具合が生じる場合があります。

1. 「Administrators」グループのメンバーとしてログオンします。
2. 4-20 ページの「Oracle サービスの停止」に示されている手順に従ってください。
3. コマンド・プロンプトからレジストリ エディタを起動します。
C:\> regedt32
4. HKEY_CLASSES_ROOT に移動します。
5. Oracle、ORA または ORCL で始まるキーを削除します。
6. HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE に移動します。
7. ORACLE および Apache Group キーを削除します。
8. HKEY_LOCAL_MACHINE\SYSTEM\CurrentControlSet\Services に移動します。
9. ORACLE で始まるすべてのキーを削除します。
10. HKEY_LOCAL_MACHINE\SYSTEM\CurrentControlSet\Services\Eventlog\Application に移動します。
11. ORACLE で始まるすべてのキーを削除します。
12. HKEY_CURRENT_USER に移動します。
13. ORACLE を削除します。
14. HKEY_CURRENT_USER\SOFTWARE\ORACLE に移動します。
15. Oracle または ORCL で始まるキーがある場合は削除します。
16. Oracle キーがある場合は削除します。
17. レジストリ エディタを終了します。
18. コンピュータを再起動します。

システム変数パスの更新

1. 「Start」 → 「Settings」 → 「Control Panel」 → 「System」 → 「Advanced」 タブ → 「Environment Variables」 を選択します。
2. システム環境変数パスを選択し、Path 変数を変更します。
3. すべての Oracle エントリをパスから削除します。たとえば、Oracle によって JRE がインストールされている場合は、%ORACLE_HOME%\bin パスおよび JRE パスを削除します。次のようなパスがある可能性があります。

```
C:\oracle\ora92\bin;C:\program files\oracle\jre\1.4.1\bin
```

4. 「Control Panel」 を閉じます。

「Start」メニューからの Oracle の削除

1. <システム・ドライブ>:\Documents and Settings\All Users\Start Menu\Programs に移動します。
2. 次のアイコンを削除します。
 - Oracle - HOME_NAME
 - Oracle Installation ProductsHOME_NAME は削除した Oracle ホーム名です。
3. Windows エクスプローラから <システム・ドライブ>:\Program Files\Oracle を削除します。
4. ハード・ディスク・ドライブ上のすべての ORACLE_BASE ディレクトリを削除します。
5. コンピュータを再起動します。

インストール後の構成タスク

この章では、インストール後の構成タスクを説明します。この章では適宜、構成タスクの実行手順に関するその他の参考資料も示しています。

この章の項目は次のとおりです。

- [パッチ・セット情報](#)
- [無効な PL/SQL モジュールの妥当性チェック](#)
- [コンポーネント別インストール後の構成タスク](#)

パッチ・セット情報

ベース・リリースのインストールが正常に終了した後で、最新のパッチ・セット・リリースをインストールすることをお勧めします。

無効な PL/SQL モジュールの妥当性チェック

Oracle9i データベースが作成されると、`utlrlp.sql` スクリプトが自動的に実行されます。ただし、「Custom」インストール・タイプで Oracle9i データベースが作成されると、このスクリプトは自動的に実行されません。データベースの作成、アップグレードおよび移行後は、`utlrlp.sql` スクリプトを実行することをお勧めします。このスクリプトは、INVALID な状態にある可能性のある PL/SQL モジュール（パッケージ、プロシージャ、型などを含む）をすべて再コンパイルします。この手順はオプションですが、インストール後ではなくインストール中に再コンパイルが行われるようにするために、お勧めします。

注意： スクリプトの実行中は、データベースで他の DDL 文を実行しないでください。また STANDARD および DBMS_STANDARD パッケージを有効にしておく必要があります。

1. SQL*Plus を起動します。

```
C:¥> sqlplus
```

2. データベースに sys アカウントで接続します。

```
SQL> CONNECT sys/password as SYSDBA
```

`password` は、インストール後に変更しないかぎり、デフォルトでは `change_on_install` になります。

3. データベースを開始します（必要な場合）。

```
SQL> STARTUP
```

4. `utlrlp.sql` スクリプトを実行します。

```
SQL> @%ORACLE_HOME%¥rdbms¥admin¥utlrlp.sql
```

コンポーネント別インストール後の構成タスク

コンポーネントによっては、個別にインストール後の構成タスクが必要です。次の項に、構成要件および固有の構成手順に関する項またはドキュメントを示します。

- [Oracle Advanced Security](#)
- [Oracle HTTP Server](#)
- [Oracle interMedia および Oracle Spatial](#)
- [UNIX エミュレーション・ユーティリティ](#)
- [Oracle Net Services](#)
- [Oracle OLAP API](#)
- [Oracle Counters for Windows Performance Monitor](#)
- [Oracle Real Application Clusters](#)
- [Oracle Services for Microsoft Transaction Server](#)
- [Oracle Workflow](#)
- [Oracle XML DB](#)
- [PL/SQL 外部プロシージャ](#)

Oracle Advanced Security

認証、暗号化、整合性のサポートおよびエンタープライズ・ユーザー・セキュリティを構成する必要があります。

関連資料：『Oracle Advanced Security 管理者ガイド』

Oracle HTTP Server

Oracle HTTP Server の起動、停止および状態確認ができます。

関連資料：『Oracle Enterprise Manager 構成ガイド』、『Oracle Enterprise Manager 管理者ガイド』の「HTTP サーバーの管理」

Oracle *interMedia* および Oracle Spatial

これらのコンポーネントは、Oracle9i データベースと同時にインストールされる際に自動的に構成されます。

Oracle9i データベースとは別のインストールでこれらのコンポーネントをインストールした場合、構成タスクを手動で実行する必要があります。

関連資料： 手順は、『Oracle9i Database for Windows プラットフォーム・ガイド』の「Windows でのインストール後の構成タスク」を参照

UNIX エミュレーション・ユーティリティ

Oracle Internet Directory のシェル・スクリプト・ツール (bulkload.sh、bulkdelete.sh、bulkmodify.sh、catalog.sh および ldaprep1.sh) を Windows で実行するには、Windows 用の UNIX エミュレーション・ユーティリティをダウンロードする必要があります。2 つのサード・パーティ・ソフトウェア・ベンダーがこのユーティリティを提供しています。

- Cygnus
<http://sources.redhat.com/cygwin/>
- MKS Toolkit
<http://www.datafocus.com/products/>

関連資料： 『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』

Oracle Net Services

Oracle Net Configuration Assistant は、Oracle ネットワークの構成を補助します。

Oracle Net Services をインストールした場合、Oracle Net Configuration Assistant は、クライアント・コンピュータおよびデータベース・サーバーのネットワーク構成を自動的に順を追って指示します。

インストール後に、Oracle Net Configuration Assistant および Oracle Net Manager などのツールを使用しても Oracle ネットワークを構成できます。

関連資料：

- 『Oracle9i Net Services 管理者ガイド』 および両方のツールで使用可能なオンライン・ヘルプを参照
- 使用可能な構成の選択に関する説明は、3-8 ページの「[ネットワークの構成](#)」を参照

Oracle OLAP API

OLAP API を使用する Java プログラムを作成する前に、ファイルを Java 開発環境でアクセスできるようにする必要があります。

関連資料：『Oracle9i OLAP 開発者ガイド - Oracle OLAP API』の「開発環境のセットアップ」

Oracle Counters for Windows Performance Monitor

Oracle Counters for Windows Performance Monitor を使用して Oracle 固有のカウンタを表示する前に、%ORACLE_HOME%\bin ディレクトリにある operfcfg.exe を使用して SYSTEM パスワードを指定する必要があります。

SYSTEM パスワードを設定するには、次のように入力します。

```
C:¥> operfcfg.exe -U system -P password [-D database_name]
```

関連資料： Oracle Counters for Windows Performance Monitor の追加情報は、『Oracle9i Database for Windows プラットフォーム・ガイド』を参照

Oracle Real Application Clusters

高可用性と Oracle Enterprise Manager の機能を使用可能にするには、インストール後の構成手順を実行する必要があります。

注意： Oracle Enterprise Manager の 64 ビット・バージョンは、今回のリリースに含まれていません。64 ビット・コンピュータ・ノードのクラスタをリモートで管理するには、32 ビット・コンピュータの Oracle Enterprise Manager を使用してください。詳細は、『Oracle Enterprise Manager 構成ガイド』を参照してください。

Oracle Services for Microsoft Transaction Server

次のタスクを実行すると、Oracle Services for Microsoft Transaction Server を使用できます。

- Microsoft Transaction Server 管理者アカウントの作成
- データベース・サーバー・レベルのトランザクション・リカバリ・ジョブのスケジュール

Oracle Workflow

次のような、いくつかの構成タスクを実行する必要があります。

- `init.ora` パラメータ・ファイルの編集
- Web サーバーのインストールおよび構成
- ベース URL の確認
- Oracle Workflow Monitor および HTML ヘルプの設定

Oracle XML DB

次のタスクの詳細は、『Oracle9i XML データベース開発者ガイド - Oracle XML DB』の付録 A を参照してください。

- Oracle XML DB の再インストール
- Oracle XML DB 表領域の構成またはカスタマイズ
- FTP、HTTP/WebDAV ポート番号の構成

PL/SQL 外部プロシージャ

構成は、使用するネットワーク構成ファイルに依存します。ほとんどすべての場合に、構成は自動です。

関連資料：『Oracle9i Database for Windows プラットフォーム・ガイド』の「Windows 用アプリケーションの開発」

インストールされた初期データベースの内容の表示

この章では、「Enterprise Edition」、「Standard Edition」、「Personal Edition」または「Oracle Internet Directory」インストール・タイプに対して Database Configuration Assistant で作成されるデフォルトの初期データベースの内容の概要を説明します。可能な場合には、カスタム・データベース作成方法に関する情報の参照先も示します。

この章の項目は次のとおりです。

- ユーザー名およびパスワードの概要
- データベースの識別の概要
- 64 ビット Windows での Oracle9i サービスの概要
- 表領域とデータ・ファイルの概要
- 初期化パラメータ・ファイルの概要
- REDO ログ・ファイルの概要
- 制御ファイルの概要
- ロールバック・セグメントの概要
- データ・ディクショナリの概要

ユーザー名およびパスワードの概要

Oracle9i は、いくつかのデフォルト・データベース・アカウントとともにインストールされます。Database Configuration Assistant は、インストールが正常に完了すると、次を除くすべてのデフォルト・データベース・アカウントをロックし、無効にします。

- SYS
- SYSTEM
- DBSNMP
- SCOTT

他のアカウントはすべて、使用する前にロックを解除する必要があります。オラクル社では、すべてのユーザー・パスワードをインストール後すぐに変更することをお勧めします。

Database Configuration Assistant は、最低でも SYS、SYSTEM および DBSNMP アカウントをすべてのデータベースに作成します。データベース作成プロセスの最後に、SYS および SYSTEM パスワードの変更を要求されます。インストールされているコンポーネントに応じて、追加のアカウントが作成されます。これらのアカウントを使用する前に、アカウントのロックを解除し、パスワードを変更します。表 6-2 では、アカウントおよびパスワードを説明します。

関連資料：

- Oracle Performance Monitor for Windows でのパスワードの変更方法は、『Oracle9i Database for Windows プラットフォーム・ガイド』の「Oracle Counters for Windows Performance Monitor パラメータの変更」を参照
- Oracle セキュリティ手順およびセキュリティ最優良事例の詳細は、『Oracle9i データベース管理者ガイド』を参照

パスワードのロック解除および変更

インストールの最後に、複数の構成アシスタントが自動的に起動して、データベース環境と Oracle Net Services 環境を作成および構成します。このようなアシスタントの 1 つが Database Configuration Assistant です。Database Configuration Assistant は、データベース構成を終了する際に、データベース情報および「Password Management」ボタンのある画面を表示します。この画面で SYS パスワードおよび SYSTEM パスワードの変更を要求されます。「Password Management」ボタンを使用して、使用するユーザー名のみロック解除します。ユーザー名のロックを解除した後すぐにデフォルト・パスワードを変更することを強くお勧めします。

データベースのインストールおよび構成プロセス中にパスワードを変更するには、次のようにします。

1. 「Database Configuration Assistant」 ウィンドウで、「Password Management」をクリックします。
2. ユーザー名を選択し、チェック・マークを外します。
3. 各ユーザー名に対して新規パスワードを入力し、パスワードを確認します。

注意： パスワードのロックを解除しても、新規パスワードを指定していない場合は、次にそのアカウントにアクセスするまでパスワードは無効になります。

または、インストール・プロセス後の任意の時点で、SQL*Plus を使用してアカウントのロックを解除し、パスワードを変更します。

インストール後にパスワードを変更するには、次のようにします。

1. SQL*Plus を起動します。

```
C:¥> sqlplus /NOLOG
```
2. SYSDBA で接続します。

```
SQL> CONNECT / AS SYSDBA
```
3. 表 6-1 に示す SQL コマンドに従ってパスワードを変更します。

表 6-1 アカウントおよびパスワードを管理するための SQL コマンド

処理	SQL 文
パスワードのロック解除	ALTER USER <i>username</i> ACCOUNT UNLOCK;
パスワードのロック	ALTER USER <i>username</i> ACCOUNT LOCK;
ロック解除されたアカウントのパスワードの変更	ALTER USER <i>username</i> IDENTIFIED BY <i>password</i> ;
ロックされたアカウントのパスワードの変更	ALTER USER <i>username</i> IDENTIFIED BY <i>password</i> ACCOUNT UNLOCK;

ユーザー名およびパスワードの確認

表 6-2 では、管理ユーザー名およびパスワードを説明します。

表 6-2 管理ユーザー名およびパスワード

ユーザー名	パスワード	説明	関連資料
SYSTEM	ユーザー設定 ¹ または MANAGER	データベース管理タスクの実行に使用されます。SYSTEM には、AQ_ADMINISTRATOR_ROLE、DBA および SALES_HISTORY_ROLE データベース・ロールが含まれています。	『Oracle9i データベース管理者ガイド』
SYS	ユーザー設定 ^{1,2} または CHANGE_ON_INSTALL ²	データベース管理タスクの実行に使用されます。 ³	『Oracle9i データベース管理者ガイド』
ANONYMOUS	ANONYMOUS	Oracle XML DB への HTTP アクセスを可能にします。	なし
CTXSYS	CTXSYS	CONNECT、DBA および RESOURCE データベース・ロールを持つ Oracle Text ユーザー名。	『Oracle Text リファレンス』
DBSNMP	DBSNMP	CONNECT および SELECT ANY DICTIONARY データベース・ロールを含みます。このロールおよびユーザーを削除する場合は、catnsnmp.sql を実行します。	『Oracle Intelligent Agent ユーザーズ・ガイド』
LBACSYS	LBACSYS	Oracle Label Security 管理者ユーザー名。	『Oracle Label Security 管理者ガイド』
MDSYS	MDSYS	Oracle Spatial および Oracle Locator 管理者ユーザー名。	『Oracle Spatial ユーザーズ・ガイドおよびリファレンス』
ODM	ODM	ODM は、データ・マイニング操作を実行します。AQ_USER_ROLE、AQ_ADMINISTRATOR_ROLE および SELECT_CATALOG_ROLE ロールが含まれます。	<ul style="list-style-type: none"> ■ 『Oracle9i Data Mining Administrator's Guide』 ■ 『Oracle9i Data Mining Concepts』
ODM_MTR	MTRPW	ODM_MTR は、データ・マイニング・サンプル・プログラムに対してデータ・リポジトリに関連付けられているアカウントです。SELECT_CATALOG_ROLE ロールが含まれます。	<ul style="list-style-type: none"> ■ 『Oracle9i Data Mining Administrator's Guide』 ■ 『Oracle9i Data Mining Concepts』

表 6-2 管理ユーザー名およびパスワード (続き)

ユーザー名	パスワード	説明	関連資料
OLAPSYS	MANAGER	OLAPSYS は、OLAP メタデータ構造の作成に使用する識別子です。 OLAPSYS には、OLAP_DBA、CONNECT および RESOURCE データベース・ロールが含まれます。	『Oracle9i OLAP 開発者ガイド - Oracle OLAP API』
ORDPLUGINS	ORDPLUGINS	CONNECT および RESOURCE データベース・ロールを持つ Oracle <i>interMedia</i> Audio および Video ユーザー名。1 つのセッションで、システム固有でないプラグイン形式を複数使用できます。	『Oracle <i>interMedia</i> Java Classes ユーザーズ・ガイドおよびリファレンス』
ORDSYS	ORDSYS	CONNECT、JAVAUSERPRIV および RESOURCE データベース・ロールを持つ Oracle <i>interMedia</i> Audio、Video、Locator および Image 管理者ユーザー名。	『Oracle <i>interMedia</i> Java Classes ユーザーズ・ガイドおよびリファレンス』
SCOTT	TIGER	CONNECT および RESOURCE データベース・ロールを含みます。	『Oracle9i Database for Windows プラットフォーム・ガイド』
WKSYS	WKSYS	Ultra Search システム・ディクショナリおよび PL/SQL パッケージの格納に使用されます。 WKSYS には、CONNECT、CTXAPP、DBA、JAVASYSPRIV、JAVAUSERPRIV および RESOURCE データベース・ロールが含まれます。	Oracle Ultra Search のオンライン・ドキュメント
WMSYS	WMSYS	WMSYS スキーマは、Oracle Workspace Manager のすべてのメタデータ情報の格納に使用されます。 WMSYS には、CONNECT、RESOURCE および WM_ADMIN_ROLE データベース・ロールが含まれます。	『Oracle9i アプリケーション開発者ガイド - Workspace Manager』
XDB	CHANGE_ON_INSTALL	Oracle XML DB データおよびメタデータの格納に使用されます。 CONNECT および RESOURCE データベース・ロールを含みます。	なし

¹ Database Configuration Assistant を使用してデータベースを作成する場合は、構成プロセスの最後に SYS パスワードと SYSTEM パスワードの変更を要求されます。

² SQL 文には、権限 AS SYSDBA または AS SYSOPER が含まれている必要があります。

³ SYS には、AQ_ADMINISTRATOR_ROLE、AQ_USER_ROLE、CONNECT、CTXAPP、DBA、DELETE_CATALOG_ROLE、EXECUTE_CATALOG_ROLE、EXP_FULL_DATABASE、GATHER_SYSTEM_STATISTICS、HS_ADMIN_ROLE、IMP_FULL_DATABASE、JAVA_ADMIN、JAVADEBUGPRIV、JAVA_DEPLOY、JAVAIDPRIV、JAVAUSERPRIV、JAVASYSPRIV、LOGSTDBY_ADMINISTRATOR、OEM_MONITOR、OLAP_DBA、RECOVERY_CATALOG_OWNER、RESOURCE、SELECT_CATALOG_ROLE および WKUSER のデータベース・ロールが含まれています。

関連資料:

- 『Oracle9i データベース概要』の「権限、ロールおよびセキュリティ・ポリシー」
- 『Oracle9i データベース管理者ガイド』の「Oracle データベース管理者」
- 『Oracle9i Database for Windows プラットフォーム・ガイド』の「Windows での外部ユーザーおよびロールの管理」

データベースの識別の概要

Oracle9i データベースはグローバル・データベース名で識別されます。グローバル・データベース名は、データベース名と、データベースのあるネットワーク・ドメインで構成されます。グローバル・データベース名は、データベースを他のデータベースから一意に区別します。グローバル・データベース名は、データベースのインストール中に、Oracle Universal Installer の「Database Identification」ウィンドウで要求された際に作成します。グローバル・データベース名の形式は、次のようになります。

```
database_name.database_domain
```

次に例を示します。

```
sales.us.acme.com
```

sales はデータベース名で、us.acme.com はデータベースが置かれているネットワーク・ドメインです。データベース名部分は、英数字その他の文字を含む 8 文字以内の文字列です。データベース名は、init.ora ファイルの DB_NAME パラメータにも割り当てられます。

ドメイン部分は、英数字、ピリオド (.) その他の文字を含む 128 文字以内の文字列です。ドメイン名は、init.ora ファイルの DB_DOMAIN パラメータにも割り当てられます。

DB_NAME パラメータ (値 sales) と DB_DOMAIN 名パラメータ (値 us.acme.com) が結合して、SERVICE_NAMES パラメータに割り当てられるグローバル・データベース名値 (値 sales.us.acme.com) を形成します。

システム識別子 (SID) により、データベースを参照する固有の Oracle9i インスタンスが特定されます。SID は、同一コンピュータ上の他のデータベース・インスタンスからデータベース・インスタンスを一意に識別します。複数の Oracle ホームを使用すると、1 台のコンピュータに複数のアクティブな Oracle データベースを持つことができます。各データベースには一意のグローバル・データベース名が必要であり、同一コンピュータ上の各データベース・インスタンスには一意の SID が必要です。

SID 名は、「Database Identification」ウィンドウでデータベース名として入力した値 (入力後の変更も可能) から導出されます。SID には最大 8 文字の英数字を使用できます。

たとえば、Oracle データベースの SID とデータベース名が ORCL の場合、各データベース・ファイルは %ORACLE_BASE%\oradata\orcl ディレクトリにあり、初期化パラメータ・

ファイルは %ORACLE_BASE%\admin\orcl\pfile ディレクトリにあります。ディレクトリ名 orcl は、DB_NAME パラメータの値で決まります。

64 ビット Windows での Oracle9i サービスの概要

データベースを作成すると、インストール後に 2 つの主な Oracle サービスが自動的に開始されます。

- OracleServiceSID (Oracle9i データベース・サービス)
- OracleHOME_NAME_TNSListener (Oracle9i データベース・リスナー・サービス)

Oracle Enterprise Manager コンポーネントをインストールした場合は、さらに次のサービスが自動的に開始されます。

- OracleHOME_NAME_Agent
- OracleHOME_NAME_HTTPServer

ただし、ネットワーク用の他のサービスや他の個々のコンポーネントは自動的に起動できません。

関連資料:

- 5-3 ページの「コンポーネント別インストール後の構成タスク」
- サービスの全リストおよび Windows の「Control Panel」で Oracle サービスを起動する手順は、『Oracle9i Database for Windows プラットフォーム・ガイド』の「Windows で使用可能な Oracle9i サービス」を参照

表領域とデータ・ファイルの概要

Oracle9i データベースは、表領域と呼ばれる、小さな論理領域に分割できます。各表領域は、1 つ以上の物理的なデータ・ファイルに対応します。データ・ファイルには、表領域や索引などの論理データベース構造体の内容が含まれます。データ・ファイルは、1 つの表領域と 1 つのデータベースにのみ対応付けることができます。

表 6-3 に、Oracle9i データベースの表領域およびデータ・ファイルをリストします。データ・ファイルは、%ORACLE_BASE%\oradata\DB_NAME ディレクトリにあります。

注意: Database Configuration Assistant で別の名前を指定しないかぎり、次の表で説明する表領域とデータ・ファイルはカスタム・データベースにも自動的に含まれています。

表 6-3 表領域とデータ・ファイル

表領域	データ・ファイル	内容
CWMLITE	CWMLITE01.DBF	OLAP 表領域。
DRSYS	Drsys01.dbf	Oracle Text 関連のスキーマ・オブジェクト。
EXAMPLE	EXAMPLE01.DBF	サンプル・スキーマ。
INDX	indx01.dbf	USERS 表領域のデータに対応付けられている索引。
ODM	ODM01.DBF	ODM および ODM_MTR スキーマ・オブジェクト。
TEMP	Temp01.dbf	SQL 文の処理中に作成された一時表と索引。GROUP BY、ORDER BY、DISTINCT など、多くのソートを含む SQL 文を実行する場合、この表領域の拡張が必要になることがあります。
TOOLS	Tools01.dbf	なし。このデータ・ファイルは、ユーザーがサード・パーティまたは Oracle のツールやコンポーネントをインストールする場合に使用するために作成されます。
SYSTEM	System01.dbf	Oracle9i データベースに必要な表、ビューおよびストアド・プロシージャの定義が含まれるデータ・ディクショナリ。この領域の情報は自動的に保守されます。SYSTEM 表領域は、すべての Oracle データベースにあります。
UNDOTBS	UNDOTBS01.DBF	データベースを 自動 UNDO 管理モード で実行しているときに UNDO 情報のみを格納する専用表領域。UNDO 表領域には、1 つ以上の UNDO セグメントが含まれます。UNDO セグメントは、データベースのロールバック、UNDO または変更で使用されるトランザクション履歴をメンテナンスします。 すべての初期データベースは、自動 UNDO 管理モードで実行するように構成されています。
USERS	Users01.dbf	アプリケーション・データ。データを作成して表に入力すると、この領域にデータが入れられます。
XDB	xdb01.dbf	Oracle XML DB データおよびメタデータの格納に使用されます。

関連資料：

- 『Oracle9i データベース概要』の「表領域、データ・ファイルおよび制御ファイル」
- 『Oracle9i データベース管理者ガイド』の「表領域の管理」および「データ・ファイルの管理」
- 『Oracle9i データベース管理者ガイド』の「UNDO 領域の管理」

初期化パラメータ・ファイルの概要

初期データベースには、1つのデータベース初期化パラメータ・ファイルが含まれます。このファイルは `%ORACLE_BASE%\admin\%DB_NAME%\pfile` ディレクトリにあります。

初期化パラメータ・ファイル `init.ora` は、インスタンスの開始に必要です。パラメータ・ファイルは、インスタンス構成パラメータのリストを含むテキスト・ファイルです。初期データベースの `init.ora` ファイルには、事前に構成されたパラメータがあります。初期データベースを使用するためにこのファイルを編集する必要はありません。

REDO ログ・ファイルの概要

初期データベースには、次の3つの REDO ログ・ファイルが含まれます。これらのファイルは `%ORACLE_BASE%\oradata\%DB_NAME` ディレクトリにあります。

REDO ログは、オンライン REDO ログまたはアーカイブ REDO ログのいずれかです。オンライン REDO ログは、Oracle データ・ファイルおよび制御ファイルに対して行われたすべての変更を記録する2つ以上の REDO ログ・グループのセットです。アーカイブ REDO ログは、オフラインの宛先にコピーされたオンライン REDO ログのコピーです。データベースが ARCHIVELOG モードで、自動アーカイブが使用可能になっている場合は、1つまたは複数のアーカイブ・プロセスが、満杯になった各オンライン REDO ログを1つ以上のアーカイブ・ログの宛先にコピーします。

注意： カスタム・データベースには、REDO ログ・ファイル `redo01.log`、`redo02.log` および `redo03.log` も自動的に含まれます。

関連資料：

- 『Oracle9i ユーザー管理バックアップおよびリカバリ・ガイド』
- 『Oracle9i データベース管理者ガイド』の「オンライン REDO ログの管理」

制御ファイルの概要

初期データベースには、次の3つの制御ファイルが含まれます。これらのファイルは `%ORACLE_BASE%\oradata\%DB_NAME` ディレクトリにあります。

制御ファイルは、データベースを起動および実行するときに必要な管理ファイルです。制御ファイルは、データベースの物理構造を記録します。たとえば、制御ファイルには、データベース名、データベースのデータ・ファイルと REDO ログ・ファイルの名前および場所が含まれます。

注意：

- カスタム・データベースには `control01.ctl`、`control02.ctl` および `control03.ctl` の各ファイルも自動的に含まれています。
 - 各データベースに対して最低3つの制御ファイルを（別個の物理ドライブに）保持し、`CONTROL_FILES` 初期化パラメータに各制御ファイルのリストを設定することをお薦めします。
-
-

関連資料： この初期化パラメータの値の設定方法は、『Oracle9i データベース管理者ガイド』の「制御ファイルの管理」を参照

ロールバック・セグメントの概要

Oracle9i データベースには、自身の UNDO（ロールバック）セグメントを管理する機能があります。管理者は、ロールバック・セグメントの数やサイズを慎重に計画および調整したり、特定のロールバック・セグメントにトランザクションを戦略的に割り当てる方法を決定したりする必要はなくなりました。Oracle9i では、管理者は、UNDO ブロックの競合、読込み一貫性の保持、領域使用量などの問題を考慮しながら、単一の UNDO 表領域内の UNDO 領域をデータベースに割り当てることもできます。

関連資料：

- 『Oracle9i データベース管理者ガイド』
- 『Oracle9i ユーザー管理バックアップおよびリカバリ・ガイド』

データ・ディクショナリの概要

データ・ディクショナリは、データベースとその構造およびユーザーに関する参照情報を含む表とビューの集合体であり、保護されています。このディクショナリに格納されるデータには、次のものが含まれます。

- Oracle データベースのユーザー名
- 各ユーザーに与えられる権限およびロール
- スキーマ・オブジェクトの名前と定義（表、ビュー、スナップショット、索引、クラスタ、シノニム、順序、プロシージャ、ファンクションおよびパッケージなど）
- 整合性制約
- データベース・オブジェクトに対する領域の割当て
- 監査情報（様々なオブジェクトに誰がアクセスまたは更新したかなど）

関連資料：

- 『Oracle9i データベース概要』の「データ・ディクショナリ」
- 『Oracle9i データベース・リファレンス』の「静的データ・ディクショナリ・ビュー」

インストール可能な個々のコンポーネント

この付録では、各インストール・タイプで使用可能なコンポーネントについて説明します。「Custom」インストール・タイプは、現在のカテゴリに含まれるすべてのコンポーネントのインストールで使用可能であるため、3種類の最上位コンポーネントでは、「Custom」インストール・タイプは記載されていません。

この章の項目は次のとおりです。

- [Oracle9i Database](#) のコンポーネント
- [Oracle9i Client](#) のコンポーネント
- [Oracle9i Management and Integration](#) のコンポーネント
- [コンポーネントの説明](#)

注意：一部のコンポーネントは、「Custom」インストールでのみインストールされます。そのようなコンポーネントの場合、この付録の表では他のインストール・タイプに「×」と示されます。

関連項目：インストールされたすべてのコンポーネントおよび機能 (Required Support Files や Common Files などのコンポーネントを含む) のログ・ファイルに関する情報は、4-19 ページの「[インストール・セッション・ログの確認](#)」を参照

Oracle9i Database のコンポーネント

表 A-1 には、最上位の Oracle9i Database コンポーネントの各インストール・タイプで使用可能なコンポーネントがアルファベット順に示されています。

表 A-1 Oracle9i Database の使用可能なコンポーネント

コンポーネント	Enterprise Edition	Standard Edition	Personal Edition
Advanced Queueing API	○	○	○
Advanced Replication ¹	○ ²	○	○
Database Configuration Assistant	○	○	○
iSQL*Plus	○	○	○
Oracle Administration Assistant for Windows	○	○	○
Oracle Advanced Security。次のコンポーネントを含む。	○	○	○
■ 認証サポート。次のコンポーネントを含む。	○	×	○
Kerberos (SSO サポートあり)	○	×	○
RADIUS (スマート・カード、トークン・カードおよびバイオメトリック用)	○	×	○
■ 暗号化と整合性のサポート。次のコンポーネントを含む。	○	×	○
DES40 Encryption	○	×	○
DES56 Encryption	○	×	○
3DES_112 Encryption (2 キー・オプション)	○	×	○
3DES_168 Integrity (3 キー・オプション)	○	×	○
MD5 Integrity	○	×	○
RC4_40 Encryption	○	×	○
RC4_56 Encryption	○	×	○
RC4_128 Encryption	○	×	○
RC4_256 Encryption	○	×	○
SHA-1 Integrity	○	×	○

表 A-1 Oracle9i Database の使用可能なコンポーネント (続き)

コンポーネント	Enterprise Edition	Standard Edition	Personal Edition
■ エンタープライズ・ユーザー・セキュリティ。次のコンポーネントを含む。	○	×	○
Oracle Enterprise Security Manager (Oracle Enterprise Manager Integrated Applications として使用可能)	○	×	○
Oracle Wallet Manager	○	×	○
■ Thin JDBC Java ベースの暗号化サポート	○	×	○
Oracle C++ Call Interface	○	○	○
Oracle Call Interface	○	○	○
Oracle COM Automation	○	○	○
Oracle Counters for Windows Performance Monitor	×	×	×
Oracle Data Mining	○	×	○
Oracle Database Utilities	○	○	○
Oracle Enterprise Manager Web Site	○	○	○
Oracle Intelligent Agent (Data Collection Services を含む)	○	○	○
Oracle Management Server	○	○	○
Oracle HTTP Server。次のコンポーネントを含む。	○	○	○
■ Apache Configuration for Oracle Java Server Pages	○	○	○
■ Apache Configuration for Oracle XML Developer's Kit	○	○	○
■ Apache JServ。次のコンポーネントを含む。	○	○	○
JSDK	○	○	○
Sun JDK	○	○	○
■ Apache Web Server Files	○	○	○
■ Oracle Mod PL/SQL Gateway	○	○	○
■ Oracle Perl Interpreter	○	○	○
Oracle <i>interMedia</i> 。次のコンポーネントを含む。	○	○	○
■ Oracle <i>interMedia</i> Annotator	○	○	○
■ Oracle <i>interMedia</i> Audio	○	○	○
■ Oracle <i>interMedia</i> Client Compatibility Files	○	○	○
■ Oracle <i>interMedia</i> Client Demos	○	○	○

表 A-1 Oracle9i Database の使用可能なコンポーネント (続き)

コンポーネント	Enterprise Edition	Standard Edition	Personal Edition
■ Oracle <i>interMedia</i> Client Option	○	○	○
■ Oracle <i>interMedia</i> Java Advanced Imaging	○	○	○
■ Oracle <i>interMedia</i> Java Client	○	○	○
■ Oracle <i>interMedia</i> Java Media Framework Client	○	○	○
■ Oracle <i>interMedia</i> Image	○	○	○
■ Oracle <i>interMedia</i> Locator	○	○	○
■ Oracle <i>interMedia</i> Video	○	○	○
■ Oracle <i>interMedia</i> Web Client	○	○	○
Oracle JDBC ドライバ	○	○	○
Oracle JVM。次のコンポーネントを含む。	○	○	○
■ JVM	○	○	○
■ Oracle Java Tools	○	○	○
■ Oracle JVM Accelerator	○	○	○
Oracle Label Security	×	×	×
Oracle Net Services	○	○	○
Oracle ODBC ドライバ	○	○	○
Oracle OLAP	○	×	×
Oracle OLAP API	○	×	○
Oracle Partitioning	○	×	○
Oracle Programmer	○	○	○
Oracle Provider for OLE DB	○	○	○
Oracle Real Application Clusters ³	○	×	×
Oracle Remote Configuration Agent	○	○	○
Oracle Services for Microsoft Transaction Server	○	○	○
Oracle SNMP Agent	○	○	○
Oracle SOAP Client	○	○	○
Oracle SOAP for JServ	○	○	○
Oracle SOAP Server	○	○	○
Oracle Spatial	○	○	○

表 A-1 Oracle9i Database の使用可能なコンポーネント (続き)

コンポーネント	Enterprise Edition	Standard Edition	Personal Edition
Oracle SQLJ	○	○	○
Oracle Text	○	○	○
Oracle Trace	○	○	○
Object Type Translator	○	○	○
Oracle Universal Installer	○	○	○
Oracle Ultra Search Middle Tier	○	○	○
Oracle Ultra Search Server	○	○	○
Oracle Workflow Manager	○	○	○
Oracle Workspace Manager	○	○	○
Oracle XML Developer's Kit	○	○	○
Oracle XML SQL Utility	○	○	○
Oracle9i Development Kit	○	○	○
Oracle9i Globalization Support	○	○	○
Oracle9i (Oracle9i データベース)。次のコンポーネントを含む。	○	○	○
■ Oracle Database Demos	○	○	○
■ PL/SQL Embedded Gateway	○	○	○
Oracle9i Windows Documentation (インストール・ガイド、リリース・ノートなどのリリース・ドキュメント)	○	○	○
PL/SQL	○	○	○
Pro*C/C++	○	×	○
Sample Schema Demos	○	○	○
SQL*Plus	○	○	○

¹ すべてのデータベース・エディションで更新可能なマテリアライズド・ビューを作成できます。

² マルチマスター・レプリケーションは Enterprise Edition でのみ使用できます。

³ Oracle Real Application Clusters は、クラスタが検出された場合にのみインストールされます。

関連項目： これらのコンポーネントの説明とリリース番号の情報は、A-10 ページの「[コンポーネントの説明](#)」を参照

Oracle9i Client のコンポーネント

表 A-2 には、最上位の Oracle9i Client コンポーネントの各インストール・タイプで使用可能なコンポーネントがアルファベット順に示されています。

表 A-2 Oracle9i Client の使用可能なコンポーネント

コンポーネント	Administrator	Runtime
Advanced Queueing API	○	×
Oracle Call Interface	○	×
Oracle C++ Call Interface	○	×
Oracle Database Utilities	○	×
Oracle HTTP Server ¹	×	×
Oracle INTYPE File Assistant	○	×
Oracle <i>interMedia</i> Annotator	○	×
Oracle <i>interMedia</i> Client Option	○	×
Oracle <i>interMedia</i> Java Client	○	×
Oracle <i>interMedia</i> Web Client	○	×
Oracle Internet Directory Tools	○	×
Oracle Internet Directory Client	○	×
Oracle Java Utilities	○	○
Oracle JDBC ドライバ	○	○
Oracle Net Services	○	×
Oracle ODBC ドライバ	○	×
Oracle Programmer	○	×
Oracle Replication Management API	○	×
Oracle Services for Microsoft Transaction Server	○	×
Oracle Ultra Search Middle Tier	○	×
Oracle Universal Installer	○	×
Oracle XML Developer's Kit	○	×
Oracle XML SQL Utility	○	×
Oracle9i Globalization Support	○	○

表 A-2 Oracle9i Client の使用可能なコンポーネント (続き)

コンポーネント	Administrator	Runtime
Oracle9i Windows Documentation (インストレーション・ガイド、リリース・ノートなどのリリース・ドキュメント)	○	×
PL/SQL	○	×
Pro*C/C++	○	×
Remote Configuration Agent	○	○
SQL*Plus	○	○

¹ Oracle HTTP Server とともに自動的にインストールされるサブコンポーネントのリストは、A-14 ページの「[Oracle HTTP Server](#)」を参照してください。

関連項目： これらのコンポーネントの説明とリリース番号の情報は、A-10 ページの「[コンポーネントの説明](#)」を参照

Oracle9i Management and Integration のコンポーネント

表 A-3 には、最上位の Oracle9i Management and Integration コンポーネントの各インストール・タイプで使用可能なコンポーネントがアルファベット順に示されています。

注意： この表には、Oracle9i データベースが現在インストールされていない場合に、「Oracle Internet Directory」インストール・タイプでインストールされるすべてのコンポーネントを示します。

表 A-3 Oracle9i Management and Integration の使用可能なコンポーネント

コンポーネント	Oracle Internet Directory
Advanced Queuing API	○
Advanced Replication Management API	○
Common Schema Demos	○
Database Configuration Assistant	○
Oracle Advanced Security。次のコンポーネントを含む。	○
■ Oracle Wallet Manager	○
Oracle Call Interface	○
Oracle Database Utilities	○

表 A-3 Oracle9i Management and Integration の使用可能なコンポーネント (続き)

コンポーネント	Oracle Internet Directory
■ Oracle Intelligent Agent	○
Oracle HTTP Server ¹	○
■ Apache Configuration for Oracle Java Server Pages	○
■ Apache Configuration for Oracle XML Developer's Kit	○
■ Apache JServ。次のコンポーネントを含む。	○
JSDK	○
Sun JDK	○
■ Apache Web Server Files	○
■ Oracle Mod PL/SQL Gateway	○
■ Oracle Perl Interpreter	○
Oracle <i>interMedia</i> 。次のコンポーネントを含む。	○
■ <i>interMedia</i> Audio	○
■ <i>interMedia</i> Annotator	○
■ <i>interMedia</i> Client Option	○
■ <i>interMedia</i> Client Demos	○
■ <i>interMedia</i> Image	○
■ <i>interMedia</i> Java Client	○
■ <i>interMedia</i> Java Media Client	○
■ <i>interMedia</i> Java Advanced Imaging	○
■ <i>interMedia</i> Locator	○
■ <i>interMedia</i> Video	○
Oracle Internet Intelligent Agent Config Tool	○
Oracle Internet Intelligent Agent	○
Oracle Internet Directory Client	○
Oracle Internet Directory Client Tools	○
Oracle Internet Directory Configuration Assistant	○
Oracle Internet Directory Server	○
Oracle JDBC ドライバ	○
Oracle JVM。次のコンポーネントを含む。	○

表 A-3 Oracle9i Management and Integration の使用可能なコンポーネント (続き)

コンポーネント	Oracle Internet Directory
■ JVM	○
■ Oracle JVM Accelerator	○
■ Oracle Java Tools	○
Oracle Net Services	○
Oracle ODBC ドライバ	×
Oracle Partitioning	×
Oracle Remote Configuration Agent	○
Oracle SNMP Agent	×
Oracle SOAP Client	○
Oracle SOAP for JServ	○
Oracle SOAP Server	○
Oracle SQLJ。次のコンポーネントを含む。	×
■ SQLJ Runtime	×
■ SQLJ Translator	×
Oracle Text	×
Oracle Trace	○
Object Type Translator	○
Oracle Ultra Search Middle Tier	○
Oracle Universal Installer	○
Oracle Workflow	×
Oracle Workflow Manager	×
Oracle Workspace Manager	○
Oracle XML Developer's Kit ²	○
Oracle XML SQL Utility	○
Oracle9i Globalization Support	○
Oracle9i (Oracle9i データベース)。次のコンポーネントを含む。	○
■ Oracle Database Demos	○
■ PL/SQL	○
■ PL/SQL Embedded Gateway	○

表 A-3 Oracle9i Management and Integration の使用可能なコンポーネント (続き)

コンポーネント	Oracle Internet Directory
Oracle9i Windows Documentation (インストレーション・ガイド、リリース・ノートなどのリリース・ドキュメント)	○
Pro*C/C++	×
Sample Schema Demos	○
SQL*Plus	○

¹ Oracle HTTP Server とともに自動的にインストールされるサブコンポーネントのリストは、A-14 ページの「Oracle HTTP Server」を参照してください。

² Oracle XML Developer's Kit のサブセットが Oracle Internet Directory とともにインストールされます。特定のリストは、<システム・ドライブ>:\Program Files\Oracle\Inventory\logs ディレクトリのインストール・ログを参照してください。

コンポーネントの説明

表 A-4 では、3 種類の最上位コンポーネントでインストール可能な個々のコンポーネントの説明とリリース番号を示します。該当するコンポーネントを詳細に説明しているドキュメントの参照先も示します。表 A-1 で説明するコンポーネントの中には、他のコンポーネントとともに自動的にインストールされるものもあります。

表 A-4 コンポーネントの説明

コンポーネント	リリース	説明	関連資料
Advanced Queueing API	9.2.0.2.1	Advanced Queueing の API をサポートする機能を提供するコンポーネントです。	『Oracle9i アプリケーション開発者ガイド - アドバンスト・キューイング』
Advanced Replication	9.2.0.2.1	Advanced Replication Management API をサポートする機能を提供するコンポーネントです。 この API は、レプリケーション管理にカスタマイズされたスクリプトを作成できるツールです。	<ul style="list-style-type: none"> ■ 『Oracle9i アドバンスト・レプリケーション』 ■ 『Oracle9i レプリケーション・マネージメント API リファレンス』

表 A-4 コンポーネントの説明 (続き)

コンポーネント	リリース	説明	関連資料
Assistant Common Files (Database Configuration Assistant や Oracle Net Configuration Assistant などの Oracle アシスタント製品とともにインストールされる)	9.2.0.2.1	Oracle のアシスタントが必要とする、自動的にインストールされる一連のファイルです。次のファイルがあります。 <ul style="list-style-type: none"> ■ BaliShare 1.1.17 (圧縮) ■ DBUI 2.2.11 ■ EWT 3.4.13 (圧縮) ■ ICE Browser 5.06.8 (圧縮) ■ Java Swing Components 1.1.1 (圧縮) ■ JEW 4.1.10 ■ JLE 2.0.1 ■ Kodiak 1.2.1 ■ Oracle Help for Java 3.2.14 - EWT (圧縮) ■ Oracle Help for Java 4.1.14 - JEW (圧縮) 	なし
Database Configuration Assistant	9.2.0.2.1	Oracle9i データベースを作成、変更および削除するプロセスを自動化するツールです。環境の要件にカスタマイズされた Oracle9i データベースを作成できます。	<ul style="list-style-type: none"> ■ 『Oracle9i データベース管理者ガイド』 ■ 『Oracle9i Database for Windows プラットフォーム・ガイド』の「Windows でのインストール後のデータベース作成」
iSQL*Plus	9.2.0.2.1	iSQL*Plus は、SQL*Plus へのブラウザベースのインタフェースです。このインタフェースにより、SQL、PL/SQL および SQL*Plus のコマンドを、Web ブラウザを介して実行できます。	<ul style="list-style-type: none"> ■ 『SQL*Plus for Windows スタート・ガイド』 ■ iSQL*Plus オンライン・ヘルプ
Java Runtime Environment (Oracle で使用されるバージョン)	1.4.1	Java Runtime Environment (JRE) は、Oracle Universal Installer などの Java アプリケーションの実行に必要です。	なし

表 A-4 コンポーネントの説明（続き）

コンポーネント	リリース	説明	関連資料
Object Type Translator (OTT)	9.2.0.2.1	OTT は、すでに作成されて Oracle データベースに格納されている抽象データ型を表現する C 構造体を作成するために使用されます。オブジェクトを利用するには、データベースに対して OTT を実行します。これにより、C 構造体を含むヘッダー・ファイルが生成されます。 Oracle INTYPE File Assistant を含みます。	『Oracle Call Interface プログラマーズ・ガイド』
Oracle Administration Assistant for Windows	9.2.0.2.1	データベース・サービスの起動と停止、Oracle サービスの自動起動、Oracle バックグラウンド・プロセス情報の表示を行い、データベース・ユーザーを Windows で認証するように構成できるツールです。	『Oracle9i for Windows セキュリティおよびネットワーク統合ガイド』の「Windows 環境におけるデータベース・ユーザーの認証」
Oracle Advanced Security	9.2.0.2.1	Oracle Advanced Security は、Oracle9i に次の一連の包括的なセキュリティ・サービスを提供します。すべてのデータベース・エディションに、SSL (X.509バージョン 3 および SSO サポート) が含まれます。	『Oracle Advanced Security 管理者ガイド』
■ 認証サポート		厳密認証サポートが提供されます。	『Oracle Advanced Security 管理者ガイド』
■ 暗号化と整合性のサポート		データの機密性は、暗号化とデータ整合性のタイプを使用して確保されます。 注意： 米国輸出管理規定 (EAR) が変更され、オラクル社は、Oracle Advanced Security の全世界版を出荷できるようになりました。Oracle Advanced Security は、以前は米国およびカナダの市場でのみ入手可能だった強力なプロトコル暗号化を Oracle9i データベースに組み込みます。	『Oracle Advanced Security 管理者ガイド』
■ エンタープライズ・ユーザー・セキュリティ・サポート		エンタープライズ・ユーザーの集中管理、エンタープライズ・ロール管理およびシングル・サインオンのために、Oracle Internet Directory などの LDAP v3 準拠のディレクトリ・サービスとの統合が提供されています。	『Oracle Advanced Security 管理者ガイド』
■ シングル・サインオン・サポート		シングル・サインオン (1 回のユーザー認証) が提供されます。その後の接続では、厳密認証が透過的に行われます。Kerberos および SSL ベースのシングル・サインオンがサポートされます。	『Oracle Advanced Security 管理者ガイド』

表 A-4 コンポーネントの説明（続き）

コンポーネント	リリース	説明	関連資料
Oracle Call Interface (OCI)	9.2.0.2.1	C または C++ プログラムから Oracle データベースにアクセスするための API です。C または C++ プログラムから直接 OCI 関数をコールし、SQL 文を実行させます。	<ul style="list-style-type: none"> ■ 『Oracle Call Interface プログラマーズ・ガイド』 ■ 『Oracle Call Interface for Windows スタート・ガイド』
Oracle Cluster Configuration Assistant	9.2.0.2.1	Oracle Cluster Configuration Assistant は、Oracle Universal Installer がクラスタで起動したときに起動します。このアシスタントは、インストールで選択されたすべてのノードで GSD を起動します。Oracle Cluster Configuration Assistant は、「Software Only」オプションが選択されている場合は起動しません。	なし
Oracle COM Automation	9.2.0.2.1	PL/SQL 開発者が OLE オートメーション・インタフェース (IDispatch) を通して COM オブジェクトをプログラマ的に操作できるようにする機能です。	『Oracle COM Automation 機能開発者ガイド』
Oracle Counters for Windows Performance Monitor	9.2.0.2.1	データベース管理者が、Windows パフォーマンス・モニタを使用して、ローカル・データベースとリモート・データベースのパフォーマンスを監視できるようにするツールです。	『Oracle9i Database for Windows 管理者ガイド』の「データベースの監視」
Oracle Database Demos	9.2.0.2.1	Oracle9i の重要な機能を示すデモのコレクションです。	なし
Oracle Database Utilities	9.2.0.2.1	データベース管理に使用される一連のコンポーネントです。Oracle Database Utilities には、次のコンポーネントが含まれます。 <ul style="list-style-type: none"> ■ Character Set Migration Utility ■ エクスポート / インポート・ユーティリティ ■ SQL*Loader ■ Database Verify Utility (「Client」インストール・タイプでは使用不可) ■ Migration Utility (「Client」インストール・タイプでは使用不可) ■ Recovery Manager 	『Oracle9i データベース・ユーティリティ』

表 A-4 コンポーネントの説明（続き）

コンポーネント	リリース	説明	関連資料
Oracle Fail Safe	3.2.1	Windows Server で構成されたすべての Microsoft Cluster Server クラスタ上に配置されている Oracle データベースおよびアプリケーションの可用性を高めるコンポーネントです。	Oracle Fail Safe が収録されている CD の『Oracle Fail Safe for Windows NT and Windows 2000 概要および管理ガイド』
Oracle HTTP Server	1.3.22.0.0a	Oracle Ultra Search および iSQL*Plus で使用される、すぐに使用可能な構成済リスナーを提供するコンポーネント。	<ul style="list-style-type: none"> ■ 『Oracle Enterprise Manager 構成ガイド』 ■ 「スタート」メニューから参照可能なオンライン・ドキュメント
Oracle Intelligent Agent	9.2.0.2.1	Oracle Intelligent Agent は、管理対象ノードのターゲットで発生する登録済のイベントおよび Oracle Enterprise Manager コンソールから送られたスケジュール済のジョブを監視します。 また、Oracle Intelligent Agent は、Oracle Diagnostics Pack のデータ収集アプリケーションである Capacity Planner および Performance Manager 用の統計データも収集します。	『Oracle Intelligent Agent ユーザーズ・ガイド』
Oracle <i>interMedia</i>	9.2.0.2.1	Oracle <i>interMedia</i> を使用すると、Oracle9i データベースで、他のエンタープライズ情報と統合した形式のイメージ、オーディオおよびビデオ・データを格納、管理および取出しできます。	<ul style="list-style-type: none"> ■ 『Oracle <i>interMedia</i> Java Classes ユーザーズ・ガイドおよびリファレンス』 ■ %ORACLE_HOME%\ordim\admin\README.txt にある Oracle <i>interMedia</i> の README
Oracle <i>interMedia</i> Audio (Oracle <i>interMedia</i> とともにインストールされる)	9.2.0.2.1	Oracle データベース内のデジタル・オーディオ・データの格納、取出しおよび管理を行うコンポーネントです。	<ul style="list-style-type: none"> ■ 『Oracle <i>interMedia</i> Java Classes ユーザーズ・ガイドおよびリファレンス』 ■ %ORACLE_HOME%\ordim\admin\README.txt にある Oracle <i>interMedia</i> の README

表 A-4 コンポーネントの説明 (続き)

コンポーネント	リリース	説明	関連資料
Oracle <i>interMedia</i> Client Option (Oracle <i>interMedia</i> の一部)	9.2.0.2.1	クライアント側アプリケーションを使用して、ネットワーク・アクセスが可能なサーバー上のデータベースに保存されたマルチメディア・データを、操作および変更できる Oracle <i>interMedia</i> Audio、Image、Video の Java インタフェースを提供するコンポーネントです。	<ul style="list-style-type: none"> ■ 『Oracle <i>interMedia</i> Java Classes ユーザーズ・ガイドおよびリファレンス』 ■ %ORACLE_HOME%\ord\im\admin\README.txt にある Oracle <i>interMedia</i> の README
Oracle <i>interMedia</i> Image (Oracle <i>interMedia</i> とともにインストールされる)	9.2.0.2.1	2次元の静的ビットマップ・イメージの格納、取出し、処理を行うコンポーネントです。業界標準のデスクトップ・パブリッシング画像交換形式の一般的な圧縮方式を使用して、イメージが効率的に格納されます。	<ul style="list-style-type: none"> ■ 『Oracle <i>interMedia</i> Java Classes ユーザーズ・ガイドおよびリファレンス』 ■ %ORACLE_HOME%\ord\im\admin\README.txt にある Oracle <i>interMedia</i> の README
Oracle <i>interMedia</i> Locator (Oracle <i>interMedia</i> とともにインストールされる)	9.2.0.2.1	Oracle9i が、ロケータ・アプリケーションと周辺検索においてオンライン・インターネット・ベースのジオコーディング機能をサポートできるようにするコンポーネントです。	<ul style="list-style-type: none"> ■ 『Oracle Spatial ユーザーズ・ガイドおよびリファレンス』 ■ %ORACLE_HOME%\md\doc\README_LOCATOR.doc にある Oracle <i>interMedia</i> の README
Oracle <i>interMedia</i> Video (Oracle <i>interMedia</i> とともにインストールされる)	9.2.0.2.1	Oracle データベース内のデジタル・ビデオ・データの格納、取出しおよび管理を行うコンポーネントです。	<ul style="list-style-type: none"> ■ 『Oracle <i>interMedia</i> Java Classes ユーザーズ・ガイドおよびリファレンス』 ■ %ORACLE_HOME%\ord\im\admin\README.txt にある Oracle <i>interMedia</i> の README

表 A-4 コンポーネントの説明（続き）

コンポーネント	リリース	説明	関連資料
Oracle Internet Directory	9.2.0.2.1	Oracle9i データベースをベースとした LDAP v3 ディレクトリ・サーバーは、データベース・ユーザーの集中化、Oracle Net ネットワーク・コネクタ、データベース・リスナー、Oracle Advanced Security、および汎用 LDAP の用途に使用される場合、サーバーのインストール前に構成できます（個別に購入した場合）。 「Custom」インストール・タイプで Oracle9i データベースをインストールすると、ユーザーはこれらの属性を格納するために使用する LDAP ディレクトリ・サーバーを指定できます。標準的なインストールでは、Oracle Internet Directory を専用サーバーにインストールします（特定の Oracle9i データベース・インストールでは、ターゲット・リソースにインストールされます）。	『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』
Oracle Internet Directory Client	9.2.0.2.1	Oracle9i データベースの様々なコンポーネントが記憶域の集中化（A-16 ページの「Oracle Internet Directory」で説明）のために Oracle Internet Directory を使用できるようにするコンポーネントです。	『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』
Oracle Internet Directory Configuration Assistant	9.2.0.2.1	Oracle Internet Directory がインストールされているときに Oracle9i データベースに Oracle Internet Directory 表領域およびスキーマを作成するツールです。	『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』
Oracle Internet Directory Server	9.2.0.2.1	人員やリソースに関する情報についての LDAP クライアント要求およびその情報の更新に応答するコンポーネントです。	『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』
Oracle INTYPE File Assistant (OTT とともにインストールされる)	9.2.0.2.1	OTT により変換されるタイプのリストを提供する INTYPE ファイルの作成を補助します。このコンポーネントは、OTT とともに自動的にインストールされます。	『Oracle Call Interface for Windows スタート・ガイド』
Oracle JDBC (Java Database Connectivity) ドライバ	9.2.0.2.1	JavaSoft によって指定された Java クラスの標準セットで、Java からリレーショナル・データに対するベンダーに依存しないアクセスを実現します。次のコンポーネントを含みます。 <ul style="list-style-type: none"> ■ Oracle JDBC Thin Driver for JDK 1.4.1 ■ Oracle JDBC/OCI Driver for JDK 1.4.1 	『Oracle9i JDBC 開発者ガイドおよびリファレンス』
Oracle Java Tools	9.2.0.2.1	Java スタアド・プロシージャおよび Oracle JVM を備えた EJB を構築および配布するための Java ツールを提供します。	『Oracle9i SQLJ 開発者ガイドおよびリファレンス』

表 A-4 コンポーネントの説明 (続き)

コンポーネント	リリース	説明	関連資料
Oracle JVM	9.2.0.2.1	JDK 1.4.1 準拠の JVM、組込み JDBC ドライバ、SQLJ Translator および Enterprise JavaBeans トランザクション・サーバーを提供するコンポーネントです。	『Oracle9i Java Developer's Guide』
Oracle JVM Accelerator (Oracle JVM の一部)	9.2.0.2.1	このコンポーネントは、Oracle JVM の現在の機能を拡張し、Java コードのネイティブ・コンパイルを提供してパフォーマンスを改善します。	『Oracle9i Java Stored Procedures Developer's Guide』
Oracle JVM Servlet Container (JSC)	9.2.0.2.1	Oracle JVM Servlet Container は、データベース内で実行されるビルトイン Web サーバーです。このコンテナは、Oracle HTTP Server および Oracle JVM とともに動作するサーブレット・コンテナで、JSP の配布とデータベースでのサーブレットの直接実行を可能にします。	『Oracle9i Java Developer's Guide』
Oracle Label Security	9.2.0.2.1	ラベルベースのアクセス制御を含む、高度なファイナグレイン・アクセス・コントロールを提供します。	『Oracle Label Security 管理者ガイド』
Oracle Net Configuration Assistant	9.2.0.2.1	インストール後にこのツールを使用して、Oracle Net Services コンポーネントを構成できます。このマニュアルで説明しているとおり、Oracle Net Configuration Assistant はインストール後に自動的に実行されます。クライアントまたはサーバーで使用します。また、スタンドアロン・モードで実行して、ネーミング・メソッドの使用法、リスナー、およびディレクトリ・サーバーの使用構成を設定できます。	『Oracle9i Net Services 管理者ガイド』
Oracle Net リスナー	9.2.0.2.1	クライアントからの接続要求のリスニング、およびデータベース・サーバーへの通信量の管理を行うサーバーに常駐するプロセス。	『Oracle9i Net Services 管理者ガイド』

表 A-4 コンポーネントの説明（続き）

コンポーネント	リリース	説明	関連資料
Oracle Net Manager	9.2.0.2.1	<p>構成機能とコンポーネント制御を組み合せ、Oracle Net Services を構成および管理するための統合化環境を実現する Oracle Net Services ツールです。このツールは、クライアントでもサーバーでも使用可能です。</p> <p>Oracle Net Manager を使用して、次のネットワーク・コンポーネントを構成します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ ネーミング・メソッド <p>接続識別子を解決して接続記述子を得るための様々な方法を構成します。</p> ■ ネーミング <p>単純な名前と接続識別子を定義して、ネットワーク位置およびサービスの ID を識別するために定義した接続記述子へマップします。Oracle Net Manager は、ローカルの tnsnames.ora ファイルまたは集中化されたディレクトリ・サーバーの接続記述子の構成をサポートします。</p> ■ リスナー <p>クライアント接続を受け入れるために、リスナーを作成し構成します。</p> 	『Oracle9i Net Services 管理者ガイド』
Oracle Net Protocol Support	9.2.0.2.1	<p>Named Pipes プロトコル、TCP/IP プロトコルまたは SSL 付き TCP/IP プロトコルを使用して、クライアント / サーバーがネットワークで対話できるようにサポートします。Oracle コンポーネントのこの組合せによって、クライアントの Oracle アプリケーションは、Named Pipes または TCP/IP を介してリモートの Oracle データベースと通信できるようになります (Oracle データベースを実行しているホスト・システムが、Named Pipes または TCP/IP を使用したネットワーク通信をサポートしている場合)。</p>	『Oracle9i Net Services 管理者ガイド』
Oracle Net Services	9.2.0.2.1	<p>異機種間の分散コンピューティング環境における企業全体の接続性に関するソリューションを提供する、一連のネットワーキング・コンポーネントです。Oracle Net Services は、Oracle Net Listener、Oracle Net Configuration Assistant、Oracle Net Manager で構成されています。</p>	『Oracle9i Net Services 管理者ガイド』
Oracle ODBC (Open Database Connectivity) ドライバ	9.2.0.2.1	<p>Windows 64 ビット・クライアント・システムから Oracle9i データベースへの ODBC 接続をサポートするコンポーネントです。Oracle ODBC ドライバは Microsoft ODBC 仕様のバージョン 3.51 に準拠しています。</p>	「Start」メニューから参照可能なオンライン・ヘルプ

表 A-4 コンポーネントの説明（続き）

コンポーネント	リリース	説明	関連資料
Oracle OLAP	9.2.0.2.1	<p>Oracle OLAP は、Java OLAP API および分析エンジンを提供します。開発者は、Oracle OLAP を使用して、予測、モデル化、統合、割当て、シナリオ管理などの予測的分析機能とともに複雑な統計、数学および財務の計算をサポートする分析アプリケーションを構築できます。OLAP API はすべて Java であるため、Oracle OLAP を使用すると、幅広い地域に分散する多数のユーザーにインターネットで分析アプリケーションを配布できます。</p> <p>Oracle OLAP は、Enterprise Edition でインストールされます。</p>	『Oracle9i OLAP 開発者ガイド - Oracle OLAP API』
Oracle Partitioning	9.2.0.2.1	<p>表や索引の名前に対してではなく、個々のパーティションに対してすべてのメンテナンス操作を実行することで、表や索引の管理を強化する機能です。</p>	『Oracle9i データベース概要』
Oracle Programmer	9.2.0.2.1	<p>アプリケーション開発者が、データおよびスキーマにアクセスして操作するアプリケーションを構築できるようにする一連のインタフェースとツールです。</p> <p>Oracle Precompilers、Oracle Call Interface、Oracle ODBC ドライバ、SQL*Module および Object Type Translator を含みます。</p>	なし
Oracle Provider for OLE DB	9.2.0.2.1	<p>アプリケーション、コンパイラおよびその他のデータベース・コンポーネントによる高いパフォーマンスと Oracle データへの効果的なアクセスを提供するインタフェースです。</p>	『Oracle Provider for OLE DB 開発者ガイド』
Oracle Real Application Clusters	9.2.0.2.1	<p>複数の Oracle インスタンスで単一の Oracle データベースを共有できるようにするコンポーネントです。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ■ 付録 B 「Oracle Real Application Clusters インストール前のタスク」 ■ 『Oracle9i Real Application Clusters セットアップおよび構成』

表 A-4 コンポーネントの説明（続き）

コンポーネント	リリース	説明	関連資料
Oracle Real Application Clusters Guard	3.2	<p>Oracle Real Application Clusters データベースを、Windows Server 2003 に配置されている Microsoft Cluster Server クラスタと統合するコンポーネントです。このコンポーネントは、次の追加機能を提供することにより、Oracle Real Application Clusters の高可用性機能を強化します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ クラスタ内で障害が発生したインスタンスおよびリスナーの自動再起動（必要な場合） ■ ハングアップしたインスタンスの問題の検出および解決 ■ 新規接続要求の接続時フェイルオーバー TCP/IP タイムアウト遅延の解消 ■ クラスタ・データベースがオンラインまたはオフラインになった後のユーザー作成スクリプトの実行（オブション） 	Oracle Real Application Clusters Guard が収録されている CD の『Oracle Real Application Clusters Guard 管理およびリファレンス・ガイド』
Oracle Remote Configuration Agent	9.2.0.2.1	Oracle Administration Assistant for Windows からのリモート構成および監視を使用可能にするコンポーネントです。	なし
Oracle Services for Microsoft Transaction Server	9.2.0.2.1	リリース 8.0.6、リリース 8.1.x およびリリース 2 (9.2.x) のデータベースと Microsoft Transaction Server を完全に統合するコンポーネントです。このコンポーネントによって、Microsoft Transaction Server を使用する COM ベースのアプリケーションの開発および配置が可能になります。Microsoft Transaction Server は、COM+（COM+ のトランザクション・サービス）の一部で、これは Windows XP 64-bit Edition の基本オペレーティング・システムの一部です。	『Oracle Services for Microsoft Transaction Server 開発者ガイド』
Oracle SNMP Agent	9.2.0.2.1	SNMP ベースの任意のネットワーク管理システムによって Oracle コンポーネントの識別、監視および位置の特定を行えるようにするコンポーネントです。	『Oracle SNMP サポート・リファレンス・ガイド』
Oracle Spatial	9.2.0.2.1	ユーザーが、より簡単かつ直観的に空間データの格納、取出しおよび操作を実行できるようにするコンポーネントです。	『Oracle Spatial ユーザーズ・ガイドおよびリファレンス』
Oracle SQLJ	9.2.0.2.1	埋込み SQL 文を伴う Java プログラムに対するプリプロセッサです。JDBC コールを伴う Java プログラムを生成します。	『Oracle9i SQLJ 開発者ガイドおよびリファレンス』

表 A-4 コンポーネントの説明（続き）

コンポーネント	リリース	説明	関連資料
Oracle Streams	9.2.0.2.1	Oracle Streams は、Oracle9i Enterprise Edition リリース 2 (9.2.0.2.0) で利用できる新しいテクノロジーであり、データベース内またはデータベース間のデータ・ストリームでのデータ、トランザクションおよびイベントの伝播および管理を可能にします。ストリームは、パブリッシュされた情報をサブスクライブされた宛先にルーティングします。その結果、イベントのキャプチャおよび管理用の従来のソリューションよりも高い機能性と柔軟性を提供する新機能がもたらされ、他のデータベースおよびアプリケーションとイベントを共有できます。ユーザーのニーズが変化した場合、ユーザーは、既存の機能を犠牲にすることなく、Oracle Streams の新機能を実装できます。	『Oracle9i Streams』
Oracle Text	9.2.0.2.1	データベース内のテキストを、他の型のデータと同じようにすばやく簡単に検索し管理するコンポーネントです。Oracle Text の検索手法では、テキストは作成、変更および削除可能な Oracle9i データベースの標準データ型になります。さらに、Oracle Text では、新規のテキストベースでの開発または既存アプリケーションの機能拡張を、標準 SQL ツールによって簡単かつ経済的に実行できます。Oracle Text によって、テキストを使用する任意の Oracle データベース・アプリケーション内のデータを検索できます。これは、既存のアプリケーションの検索可能なコメント・フィールドから、複数のドキュメント形式と複合検索基準を処理する大規模なドキュメント管理システムの実装まで対応できます。Oracle Text は、Oracle9i データベースがサポートする多数の言語での基本的な全文検索もサポートします。	『Oracle Text リファレンス』
Oracle Trace	9.2.0.2.1	SQL 解析、実行、フェッチの統計および待機状況統計といった、パフォーマンスおよびリソース使用率データを収集するコンポーネントです。 注意： Oracle Trace は、今後のリリースでサポートされなくなります。オラクル社では、かわりに SQL トレースおよび TKPROF を使用することを強くお勧めします。	『Oracle9i データベース・パフォーマンス・チューニング・ガイドおよびリファレンス』
Oracle Universal Installer	2.2.0.1.7.0	Oracle コンポーネントのインストール、更新、削除を短時間で実行できる GUI アプリケーションです。Oracle Universal Installer には、Java Runtime Environment (Oracle で使用されるバージョン) および Oracle Home Selector が含まれます。	『Oracle Universal Installer Concepts Guide』

表 A-4 コンポーネントの説明（続き）

コンポーネント	リリース	説明	関連資料
Oracle Wallet Manager	9.2.0.2.1	1 対の公開鍵と秘密鍵を生成して認証局に発行する証明書要求の作成、認証のための証明書のインストール、認証のための信頼できる認証局の構成を行うツールです。	『Oracle Advanced Security 管理者ガイド』
Oracle Workflow	2.6.2	Oracle Workflow は、ビジネス・プロセスの定義および自動化をサポートする完全なワークフロー管理システムです。このテクノロジーにより、ビジネス・プロセスの自動化と継続的な改善が可能になり、ユーザー定義のビジネス・ルールに従って任意のタイプの情報をルーティングできます。	『Oracle Workflow Server インストレーション・ノート』
Oracle Workflow Builder	2.6.2	Oracle Workflow Builder は、ワークフロー・プロセス定義を作成、表示および変更するための GUI ツールです。Oracle Workflow Builder には、ビジネス・プロセスのアクティビティとコンポーネントを定義するナビゲータ・ウィンドウがあります。	『Oracle Workflow Client インストレーション・ノート』
Oracle Workspace Manager	9.2.0.2.1	Oracle Workspace Manager は、作業領域管理システムに基づく長いトランザクション用のフレームワークを提供します。Workspace Manager は、一連の短時間トランザクションと複数のデータ・バージョンを使用して、原子性および同時実行性をメンテナンスする完全な長時間トランザクション・イベントを実装します。変更は、異なる作業領域としてデータベースに格納されます。ユーザーは、更新する新しいデータ・バージョンを作成する一方で、古いデータのコピーをメンテナンスできます。長時間トランザクションの継続中の結果は永続的に格納され、同時実行性および一貫性が確保されます。	『Oracle9i アプリケーション開発者ガイド - Workspace Manager』

表 A-4 コンポーネントの説明（続き）

コンポーネント	リリース	説明	関連資料
Oracle XML Developer's Kit	9.2.0.2.1	<p>このキットは、XML データの解析と生成を行う API セットから構成されます。これらのインタフェースは、Java、C、C++ および PL/SQL 用に作成されています。このキットは、次のコンポーネントから構成されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ XML Parser for Java ■ XML Parser for C ■ XML Parser for C++ ■ XML Parser for Oracle JVM（「Client」インストール・タイプではインストールされない） ■ XML Parser for PL/SQL ■ XML Class Generator for Java ■ XML Class Generator for C++ ■ XML Transviewer Beans ■ XML Transx ■ XSQL Servlet 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 『Oracle9i XML Developer's Kit ガイド - XDK』 ■ 『Oracle9i XML API リファレンス - XDK および Oracle XML DB』
Oracle XML SQL Utility	9.2.0.2.1	<p>このユーティリティは、問合せが結果セットまたは XML にラップされているオブジェクトを返せるようにする Java クラスおよび PL/SQL ラッパーのセットです。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ■ 『Oracle9i XML Developer's Kit ガイド - XDK』 ■ 『Oracle9i XML API リファレンス - XDK および Oracle XML DB』
Oracle9i Advanced Analytic Services - Data Mining	9.2.0.2.1	<p>データベースに組み込まれた Oracle9i Advanced Analytic Services - Data Mining により、パワフルでスケラブルなモデリングおよびリアルタイム・スコアリングを行うデータ・マイニング機能を完全にプログラマ的に制御できる、総合的なビジネス・インテリジェント・アプリケーションを作成できます。すべてのモデル作成およびスコアリング機能には、Java ベース API からアクセスできます。データ・マイニングにより、E-Business 企業は、顧客とのすべてのやりとりおよびビジネス・プロセスに予測と分類を取り込むことができます。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ■ 『Oracle9i Data Mining Administrator's Guide』 ■ 『Oracle9i Data Mining Concepts』
Oracle9i	9.2.0.2.1	<p>Enterprise Edition、Standard Edition または Personal Edition ソフトウェアのデータベース・コンポーネントです。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ■ 『Oracle9i データベース新機能』 ■ 『Oracle9i データベース概要』

表 A-4 コンポーネントの説明 (続き)

コンポーネント	リリース	説明	関連資料
Oracle9i Windows Documentation (インストール・ガイド、リリース・ノートなどのリリース・ドキュメント)	9.2.0.2.1	インストール・ガイド (このマニュアル) では、Oracle コンポーネントのインストール方法を説明します。『Oracle9i Database for Windows リリース・ノート』には、最新情報が記載されています。	<ul style="list-style-type: none"> ■ このインストール・ガイド ■ 『Oracle9i Database for Windows リリース・ノート』
PL/SQL	9.2.0.2.1	Oracle による SQL のプロシージャ拡張である PL/SQL は、高度な第 4 世代プログラミング言語 (4GL) です。PL/SQL には、カプセル化、オーバーロード、コレクション型、例外処理、情報隠蔽などの最新機能が用意されています。PL/SQL では、透過的な SQL アクセス、Oracle データベースとツールの緊密な統合、移植性およびセキュリティも提供されます。	『PL/SQL ユーザーズ・ガイドおよびリファレンス』
PL/SQL Embedded Gateway	9.2.0.2.1	このコンポーネントは、PL/SQL Gateway の汎用機能を Oracle9i データベースに直接組み込みます。このコンポーネントを使用すると、ユーザーは、ブラウザを使用して、Oracle9i データベースに格納されている PL/SQL プロシージャを起動できます。ストアード・プロシージャは、データベース内の表からデータを検索し、データを含む HTTP 応答 (たとえば、HTML ページなど) を生成して、クライアントのブラウザに返すことができます。	
Pro*C/C++	9.2.0.2.1	Pro*C/C++ プリコンパイラは、C および C++ プログラムに埋め込まれている SQL 文を受け取り、標準 C コードに変換します。このコードをプリコンパイルすると、C または C++ プログラムになります。このプログラムをコンパイルして、Oracle9i データベースにアクセスするアプリケーションを構築します。	<ul style="list-style-type: none"> ■ 『Pro*C/C++ Precompiler プログラマーズ・ガイド』 ■ 『Pro*C/C++ for Windows プリコンパイラ・スタート・ガイド』
Server Management (SRVM)	9.2.0.2.1	Oracle Real Application Clusters 構成を管理するための管理ツールおよびユーティリティを提供するコンポーネントです。このコンポーネントは、Oracle Real Application Clusters とともに自動的にサーバーにインストールされます。	■ 『Oracle9i Real Application Clusters セットアップおよび構成』
SQL*Plus	9.2.0.2.1	SQL、PL/SQL および SQL*Plus データベース言語を使用できるようにするツールです。SQL*Plus には、コマンドライン・インタフェース、グラフィカル・インタフェースおよびブラウザベースのインタフェースがあります。	<ul style="list-style-type: none"> ■ 『SQL*Plus for Windows スタート・ガイド』 ■ iSQL*Plus オンライン・ヘルプ

表 A-4 コンポーネントの説明（続き）

コンポーネント	リリース	説明	関連資料
SQLJ Runtime (Oracle SQLJ とともにインストールされる)	9.2.0.2.1	JDBC ドライバ上で実行する Pure Java コードの Thin レイヤーです。Oracle SQLJ によって SQLJ ソース・コードが変換されるときに、Java アプリケーションに埋め込まれた SQL コマンドは SQLJ Runtime コールに置換されます。	『Oracle9i SQLJ 開発者ガイドおよびリファレンス』
SQLJ Translator (Oracle SQLJ とともにインストールされる)	9.2.0.2.1	埋込み SQL 文が含まれている Java プログラムに対するプリプロセッサです。SQLJ Translator は、SQL 文を JDBC コールに変換します。	『Oracle9i SQLJ 開発者ガイドおよびリファレンス』

Oracle Real Application Clusters インストール前のタスク

この付録では、Windows Server 2003 に Oracle9i クラスタ・ソフトウェアをインストールする前に必要なタスクについて説明します。Windows に固有の情報は、この項で説明します。

この付録の項目は次のとおりです。

- [Real Application Clusters のインストール要件](#)
- [Real Application Clusters インストール前のタスク](#)
- [投票ディスクのインストール前のタスク](#)
- [共有ディスクの構成](#)
- [Oracle Cluster Setup Wizard の使用](#)
- [データ・ファイルの RAW パーティション](#)
- [バックアップ目的の RAW パーティションの内容の標準ファイル・システムへの移行](#)
- [Oracle オペレーティング・システム固有クラスタウェアの削除](#)
- [Real Application Clusters インストールのトラブルシューティング](#)

関連資料： 32 ビット・ドキュメント・ライブラリに収録されている
Oracle9i Real Application Clusters のドキュメント・セット

- 『Oracle9i Real Application Clusters Documentation Online Roadmap』
- 『Oracle9i Real Application Clusters 概要』
- 『Oracle9i Real Application Clusters セットアップおよび構成』
- 『Oracle9i Real Application Clusters 管理』
- 『Oracle9i Real Application Clusters 配置およびパフォーマンス』

Real Application Clusters のインストール要件

第2章「インストール前の要件」で説明したシステム要件に加えて、次の要件を満たしている必要があります。

ハードウェア

クラスタの各ノードには、次のハードウェアが必要です。

- 外部共有ハード・ディスク
- 認定済ハードウェア構成

ハードウェアおよびネットワーク構成

次のハードウェアおよびネットワーク構成情報が使用可能です。

- 各ノードのパブリック・ネットワーク名（ホストまたは TCP/IP 名）。
- 高速プライベート相互接続の有無。ある場合は、各ノードのプライベート・ネットワーク名。
- **仮想インタフェース・アーキテクチャ**（VIA）ハードウェアを使用しているかどうか。使用している場合は、使用可能なネットワーク・インタフェース・カード（NIC）名。

ソフトウェア

クラスタの各ノードには、次のソフトウェア・タイプのいずれかが必要です。

- 認定済のベンダー提供オペレーティング・システム固有クラスタウェア・レイヤー
- Oracle オペレーティング・システム固有クラスタウェア・レイヤー

RAM

インスタンスごとに 512MB

Real Application Clusters インストール時の考慮点

オラクル社では、次のことをお勧めします。

- Real Application Clusters を Windows ワークグループまたは Windows ドメインにインストールすること。ドメインに関しては、各ノードが同じドメインのメンバーであるか、信頼関係のドメイン内に置かれている必要があります。
- 最適な **Oracle Cluster File System (OCFS)** のパフォーマンスのために、Oracle ホームおよび Oracle データベース・ファイルを同じパーティションまたは論理ドライブに格納しないこと。

- 適切な割当て単位サイズを設定すること。Oracle データ・ファイルを格納するボリュームの割当て単位サイズは 1024KB 以上に設定します。Oracle ホームを作成するボリュームの割当て単位サイズは 4KB ～ 8KB に設定します。Windows ディスク管理ツールを使用して、ファイル・アクセスのタイプに対して適切なファイル割当て単位サイズを設定します。Windows ファイル割当て単位サイズのデフォルト値は 4KB です。

表 B-1 推奨割当て単位サイズ

ファイル・タイプ	推奨割当て単位サイズ
Cluster File System for Oracle Home Only	4KB ～ 8KB
Cluster File System for Oracle Datafiles	1024KB 以上

- 不要なトラブルシューティング、停止時間およびパフォーマンスの問題に対する備え。Real Application Clusters パーティションを、ドメイン・コントローラ上、あるいは DHCP、WINS または DNS サーバー上に作成しないでください。
- アグレッシブにキャッシュするファイル・システムを必要とするサード・パーティ製品は、OCFS とともに使用しないことをお勧めします。使用した場合、OCFS で使用されているキャッシング・メカニズムとの間で競合が発生する可能性があります。OCFS は、Oracle データベース・ファイルのデータをキャッシュしません。メタデータ、およびデータベース・ファイル以外のファイルのキャッシュを実行します。

ネットワークの考慮点

クラスター・データベースにパブリック・インターコネクトを使用しないでください。パブリック・インターコネクトではネットワーク通信量が高くなります。クラスター・データベースを実行しているノードに、IP アドレスを動的に割り当てる DHCP を使用しないでください。DHCP は、IP アドレスの貸借りや取消しによってネットワーク通信量を増加させます。

ノード間キャッシュ・フェージョン通信用のプライベート・インターコネクトを提供し、予想されるネットワーク・カード障害から保護するため、各ノードにつき 2 つ以上のネットワーク・インタフェース・カード (NIC) を用意してください。プライベート・インターコネクトは、キャッシュ・フェージョンによって得られるパフォーマンスの向上を活用します。NIC には、最適化帯域幅のため、専用 IP アドレスを使用します。または、複数の物理 NIC を 1 つの論理 NIC として構成し、複数の IP アドレスを 1 つの論理 NIC に割り当てます。複数の NIC の使用は、予想されるネットワーク・カード障害からの保護手段となります。

Real Application Clusters インストール前のタスク

Cluster Setup Wizard を開始する前に、この項の手順で説明されているインストール前の手順を実行してください。Windows では RAW パーティションを論理ドライブとして指します。

Oracle Cluster File System のインストール前のタスク

Oracle Cluster File System は、Oracle9i 用に設計された共有ファイル・システムです。OCFS を使用すると、Oracle データ・ファイルを論理ドライブにリンクする必要がなくなり、各ノードがそれぞれのローカル・コピーを持つのではなく全ノードで 1 つの Oracle ホームを共有することが可能になります。

OCFS で使用するパーティション数は、パフォーマンスに影響を与えます。このため、選択した OCFS オプションに必要な最低数のパーティションを作成するようにしてください。

- OCFS を Oracle ホームおよび Oracle データ・ファイルの両方に対してインストールする場合、2 つのパーティションを作成します。
- OCFS を Oracle ホームまたは Oracle データ・ファイルのいずれか一方のみに対してインストールする場合、1 つのパーティションを作成します。Real Application Clusters で使用されているパーティションにドライブ文字を割り当てないでください。Cluster Setup Wizard により、構成時にドライブ文字が割り当てられます。
- Oracle データ・ファイル用の OCFS が使用されていない場合、投票ディスクに論理パーティションを作成し、投票ディスクにシンボリック・リンク名を割り当てます。
- パーティションが全ノードで表示され、Oracle パーティションにドライブ文字が割り当てられていないことを、クラスタ内の各ノードで確認します。Oracle パーティションにドライブ文字が割り当てられている場合は、削除します。
- Cluster Setup Wizard を実行して、OCFS および Oracle9i クラスタウェアをインストールし、ドライブ文字を OCFS パーティションに割り当てます。

推奨する最小サイズは次のとおりです。

- Oracle ホーム用 OCFS: 10GB
- Oracle データ・ファイル用 OCFS: 20GB

論理ドライブのインストール前のタスク

- 投票ディスクの論理ドライブを作成します。B-9 ページの「パーティションの作成」を参照してください。
- Database Configuration Assistant を使用して事前定義済みの初期データベースをインストールした場合、表 B-3 「Database Configuration Assistant の論理ドライブのディスク・サイズ」内の各コンポーネントに対して論理ドライブを作成します。
- Cluster Setup Wizard を実行して Oracle9i クラスタウェアをインストールし、シンボリック・リンク名の割当て、投票ディスクの割当ておよびクラスタの作成を行います。

- パーティションが全ノードで表示され、Oracle パーティションにドライブ文字が割り当てられていないことを、クラスタ内の各ノードで確認します。Oracle パーティションにドライブ文字が割り当てられている場合は、削除します。

投票ディスクのインストール前のタスク

データ・ファイルが RAW パーティションに格納されている場合、投票ディスクが、共有ディスク上の論理パーティションとして存在する必要があり、Cluster Setup Wizard によって必要となります。

投票ディスクは、Server Management (SRVM) の構成データを格納し、Oracle オペレーティング・システム固有クラスタウェアによって使用されます。

関連項目： 投票ディスクの論理ドライブを作成するための詳細な手順は、B-9 ページの「[パーティションの作成](#)」を参照してください。投票ディスクのサイズは、100MB 以上である必要があります。

シンボリック・リンク名の割当て

Oracle データ・ファイルにクラスタ・ファイル・システムを使用していない場合、事前定義済初期データベースを論理ドライブにインストールする際、Database Configuration Assistant を使用するためには、シンボリック・リンク名が必要です。

次のいずれかの方法を使用して、シンボリック・リンク名を割り当てます。

- [Oracle Cluster Setup Wizard](#)
- [ImportSYMLinks ユーティリティ](#)
- [Object Link Manager](#)

Oracle Cluster Setup Wizard

[Oracle Cluster Setup Wizard](#) に従い、クラスタの作成および既存クラスタへのノードの追加を実行します。論理ドライブへのシンボリック・リンク名の割当ても可能です。

ImportSYMLinks ユーティリティ

ImportSYMLinks は、シンボリック・リンク名の割当てまたは既存のシンボリック・リンク名の変更を行うためのコマンドライン・ツールです。

関連項目： Cluster Setup Wizard を実行しなかった場合、B-18 ページの「RAW デバイス管理ユーティリティの手動インストール」を参照

1. TBL ファイルを作成します。

目的	操作
既存のシンボリック・リンク名の変更	<ol style="list-style-type: none"> 1. 次のコマンドを使用して、既存のリンクを TBL ファイルへエクスポートします。 <pre>ExportSYMLinks.exe [/f:filename]</pre> /f:filename を指定しない場合、現在の作業ディレクトリにデフォルトのファイル名 symmap.tbl が作成されます。 注意： 重複するリンクは、symmap.tbl ファイルでインデントされます。マップされていない有効なデバイス名もすべてエクスポートされます。
TBL ファイルの作成	<ol style="list-style-type: none"> 1 枚目のコンポーネント CD の次のディレクトリに、サンプルの ASCII ファイルがあります。¹ <pre>¥preinstall_rac¥olm¥sample.tbl</pre> 1. TBL ファイルを作成します。 2. ファイルを保存します。

¹ このサンプル・ファイルには、2 ノード・クラスター・データベース用の RAW パーティションに関連付けられたシンボリック・リンク名が含まれています。

2. 次のコマンドを使用して、シンボリック・リンク・マッピングをインポートします。

```
ImportSYMLinks.exe [/f:filename]
```

たとえば、ImportSYMLinks.exe /f:c:¥temp¥mysymlinks.tbl となります。

ここで、temp は B-18 ページの手順 1 で定義した一時ディレクトリ、filename は有効な TBL ファイルのフルパスとファイル名です。

Object Link Manager

Object Link Manager は、シンボリック・リンク名の割当てまたは既存のシンボリック・リンク名の変更を行うための GUI ツールです。

関連項目： Oracle Object Link Manager のインストール方法は、B-18 ページの「[RAW デバイス管理ユーティリティの手動インストール](#)」を参照

1. `c:\temp\GUIOracleOBJManager.exe` を選択します。`temp` は、B-18 ページの手順 1 で定義した一時ディレクトリです。
「Oracle Object Manager」ウィンドウが表示されます。
2. 更新する行を選択し、ハイライト表示された行の任意の場所をクリックします。
「New Link Name」列に、編集ウィンドウとアクティブな点滅カーソルが表示されます。
3. 新しいリンク名を入力し「Enter」を選択します。
4. 手順 2 と 3 を繰り返して、その他のシンボリック・リンク名を作成します。

注意： 編集ウィンドウをアクティブにしたまま、手順 5 に進まないでください。変更が適用されません。

5. 「Options」 → 「Commit」を選択します。

共有ディスクの構成

Cluster Setup Wizard を実行する前に、共有ディスクの構成方法を決定する必要があります。選択した内容により、共有ディスクのインストール前の作業手順が示されます。OCFS を Oracle ホームおよび Oracle データ・ファイルの両方に使用する場合は、B-4 ページの「[Real Application Clusters インストール前のタスク](#)」を参照してください。

OCFS を Oracle ホーム、または Oracle データ・ファイルの RAW パーティションに使用する場合は、B-4 ページの「[Real Application Clusters インストール前のタスク](#)」、および B-5 ページの「[投票ディスクのインストール前のタスク](#)」を参照してください。

OCFS を Oracle データ・ファイルのみに使用する場合は、B-4 ページの「[Real Application Clusters インストール前のタスク](#)」を参照してください。

OCFS を使用しない場合は、B-5 ページの「[投票ディスクのインストール前のタスク](#)」を参照してください。

Cluster Setup Wizard を使用して、Windows Server 2003 に Oracle オペレーティング・システム固有のクラスタウェア・レイヤーをインストールします。Cluster Setup Wizard を使用して、新規クラスタの作成または既存のクラスタへのノードの追加を実行できます。また、Cluster Setup Wizard によって共有ディスクを構成できます。表 B-2 に、共有ディスクの構成オプションを示します。詳細は、B-19 ページの「[クラスタ・ファイル・システムによってインストールされるコンポーネントおよびサービス](#)」を参照してください。

表 B-2 共有ディスクの構成オプション

オプション	Oracle ホーム	Oracle データ・ファイル	処理
No Cluster File System	各ノードに別々のコピー	RAW パーティション	Cluster Setup Wizard は、Oracle データ・ファイルに RAW パーティションを使用し、投票ディスクをサポートするために、共有ディスクに 1 つ以上の拡張パーティションを作成する必要があります。投票ディスクは、ウィザードによって構成されます。
Cluster File System for Oracle Home Only	クラスタ・ファイル・システム	RAW パーティション	Cluster Setup Wizard は、Oracle データ・ファイルに RAW パーティションを使用し、投票ディスクをサポートするために、共有ディスクに 1 つ以上の拡張パーティションを作成する必要があります。投票ディスクは、ウィザードによって構成されます。 クラスタ・ファイル・システムは各ノードにインストールされます。
Cluster File System for Oracle Datafiles	各ノードに別々のコピー	クラスタ・ファイル・システム	投票ディスクは、クラスタ・ファイル・システムの管理ファイルとして作成されます。 クラスタ・ファイル・システムは各ノードにインストールされます。
Cluster File System for Both Oracle Home and Oracle Datafiles	クラスタ・ファイル・システム	クラスタ・ファイル・システム	投票ディスクは、クラスタ・ファイル・システムの管理ファイルとして作成されます。 クラスタ・ファイル・システムは各ノードにインストールされます。
Cluster File System for Oracle Home Only、Cluster File System for Oracle Datafiles または Cluster File System for Both Oracle Home and Oracle Datafiles	各ノードに別々のコピー	クラスタ・ファイル・システム	Cluster Setup Wizard により、クラスタ・ファイル・システムが各ノードにインストールされ、構成されます。

パーティションの作成

Real Application Clusters で使用される各共有ディスクは、マスター・ブート・レコード (MBR) パーティション・スタイルの基本ディスクとして構成する必要があります。Real Application Clusters では、ダイナミック・ディスクまたは GUID パーティション・テーブル (GPT) パーティション・スタイルをサポートしていません。

この作業では、パーティションへのドライブ文字の割当てに Windows のディスク管理ツールを使用しないでください。ドライブ文字は、クラスタの作成時に Cluster Setup Wizard によって OCFS パーティションに割り当てられます。

ディスク管理ツールを開く

「Computer Management」ウィンドウでは、ディスクおよびボリュームがグラフィカル・ビューおよびリスト・ビューで表示されます。ディスクまたはボリュームの状態は、リスト・ビューの「Status」列で表示できます。

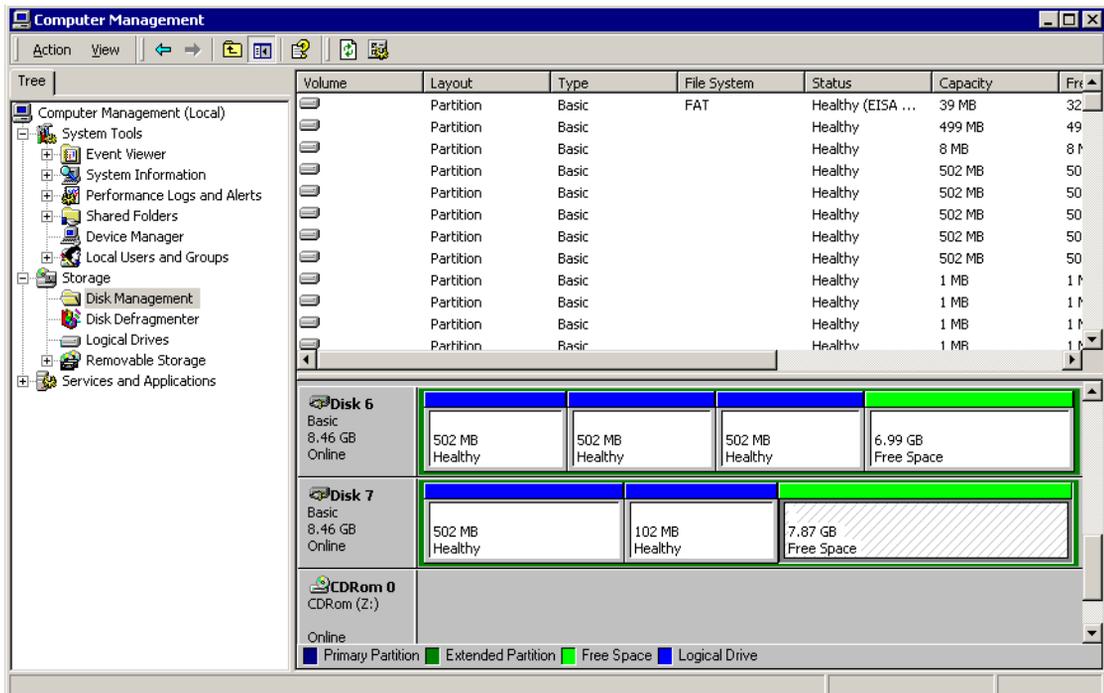
1. 「Start」 → 「Settings」 → 「Control Panel」 → 「Administrative Tools」 → 「Computer Management」を選択します。

「Computer Management」ウィンドウが表示されます。

2. 「Storage」フォルダを開き、「Disk Management」を選択します。

「Disk Management」ウィンドウが表示されます。

図 B-1 「Computer Management」 ウィンドウ



ディスクに論理パーティションを作成する前に、ディスクに次のプロパティが設定されていることを検証します。

- Disk type: Basic
- Partition style: Master Boot Record (MBR)

ディスクのプロパティを表示するには、次の手順を実行します。

1. 「Start」 → 「Settings」 → 「Control Panel」 → 「Administrative Tools」 → 「Computer Management」 を選択します。
2. 左ペインで「Disk Management」を選択します。
3. 下ペインでディスクを選択し、右クリックします。
4. 「Properties」を選択します。
5. 「Properties Disk」ダイアログ・ボックスで、「Volumes」タブを選択します。

プロパティが正しくない場合、Windows の「Disk Management」を使用して、ディスクを再構成します。

ディスク管理ツールからの拡張パーティションの作成

論理ドライブを作成する前に、まず、ディスク上の RAW 領域を指す拡張パーティションを作成します。必要なパーティションの数は、共有ディスクの構成方法によって異なります。パーティションの作成に関する詳細は、ディスク管理ツールから、Windows のオンラインヘルプを参照してください。

1. ベーシック・ディスクの未割当て領域を右クリックし、「**New Partition**」を選択します。
2. 「**Next**」をクリックします。
3. 「**Select Partition Type**」ページで「**Extended partition**」を選択します。
4. 「**Next**」をクリックします。
5. 「**Specify Partition Size**」ページで、拡張パーティションのサイズを入力します。オラクル社では、最大値の使用をお勧めします。
6. 「**Next**」をクリックします。
7. 「**Finish**」をクリックします。

ディスク管理ツールからの論理ドライブの作成

ディスクに論理ドライブを作成する前に、ディスクがベーシック・ディスクであり、マスター・ブート・レコード (MBR) パーティション・スタイルであることを検証します。

注意： Oracle ファイルを未フォーマットの論理ドライブに格納する場合は、1 つの拡張パーティションに 120 を超える論理ドライブを作成しないことをお勧めします。120 を超える論理ドライブを作成すると、コンピュータの再起動およびディスク管理ツールの起動に必要な時間が大幅に増加します。

B-16 ページの表 B-3 で必要な各データ・ファイルについて、手順 2 ～ 11 を実行する必要があります。

1. 拡張パーティションの空き領域を右クリックし、「**New Logical Drive**」を選択します。
2. 「**Next**」をクリックします。
3. 「**Select Partition Type**」ページで「**Logical Drive**」オプションを選択します。
4. 「**Next**」をクリックします。
5. 現在実行中のインストール前作業手順で定義されているサイズに対応するよう、パーティション・サイズを設定します。
6. 「**Next**」をクリックします。

7. 「Assign Drive Letter or Path」 ページで、「Do not assign a drive letter or drive path」 オプションを選択します。
8. 「Next」 をクリックします。
9. 「Format Partition」 ページで 「Do not format this partition」 オプションを選択します。
10. 「Next」 をクリックします。
11. 「Finish」 をクリックします。

注意： シンボリック・リンクの作成や論理パーティションの追加などのディスク管理の変更中に「Disk Management」のウィンドウが開いている場合、適用した変更を表示するには、ウィンドウを一度閉じてから開きます。

Oracle Cluster Setup Wizard の使用

この項では、Cluster Setup Wizard の使用方法を説明します。

1. クラスタの1つのノードで、Oracle9i データベース製品 CD を挿入し、
¥preinstall_rac¥clustersetup ディレクトリに移動して、clustersetup.exe をダブルクリックします。Oracle Cluster Setup Wizard の「Welcome」ページが表示されます。「Next」 をクリックします。
2. 「Create a cluster」 を選択し、「Next」 をクリックします。「Network Selection」 ページが表示されます。
3. インターコネクで「Use Private Network」を選択し、「Next」 をクリックします。「Private Network Configuration」 ページが表示されます。
 - ノードが高速のプライベート・ネットワークで接続されている場合、これをクラスタ・インターコネクに使用します。それ以外の場合、パブリック・ネットワークを選択します。
 - インターコネクに「Use Private Network」を選択した場合、「Public Network Configuration」 ページが表示されます。
4. 作成しているクラスタの名前、およびノードの名前を入力します。手順 3 でプライベート・ネットワークを選択した場合は、ノードのパブリック名およびプライベート名を入力します。それ以外の場合はパブリック名を入力し、「Next」を選択します。「Cluster File System Options」 ページが表示されます。

「Cluster File System Options」 ページで、次のオプションが表示されます。

 - Cluster File System for Both Oracle Home and Oracle Datafiles
 - Cluster File System for Oracle Home Only
 - Cluster File System for Oracle Datafiles

- No Cluster File System

最初の3つのオプションのいずれかを選択した場合、まず B-4 ページの「[Real Application Clusters インストール前のタスク](#)」の手順を実行する必要があります。

最初の3つのオプションのいずれかを選択すると、Cluster Setup Wizard により、クラスタ・ファイル・システム・ドライバ、およびこれをサポートするアプリケーションが、選択した全ノードにインストールされます。

5. 「OCFS Options」 ページでオプションを選択し、「Next」をクリックします。
 - 「No OCFS」を選択した場合、Oracle ホームおよび Oracle データ・ファイルは、未フォーマットの論理ドライブに格納されます。手順 8 に進みます。
 - Oracle ホームおよび Oracle データ・ファイルの両方でのクラスタ・ファイル・システムを選択すると、「OCFS for Oracle Home Only」および「OCFS for Oracle Datafiles」の2つのページが順番に表示されます。
 - 「OCFS for Oracle Home Only」を選択すると、「OCFS for Oracle Home Only」ページが表示され、続いて投票ディスクを構成するための「Disk Configuration」ページが表示されます。
 - 「OCFS for Oracle Datafiles」を選択すると、「OCFS for Oracle Datafiles」ページが表示されます。
6. 使用可能なパーティションのリストから必要なサイズのパーティションを選択し、次に、「Drive Letter」リストからドライブ文字を選択します。手順 5 で選択した OCFS オプションに対し、このパーティションおよびドライブ文字の組合せが、クラスタ内の全ボリュームの OCFS ドライブ文字に割り当てられます。

たとえば、投票ディスクは、次の形式で作成されます。

```
Oracle_datafile_drive_letter:¥voting_filename
```

7. 各 OCFS ボリュームについて手順 6 を繰り返し、「Next」をクリックします。
 - 手順 5 で「OCFS for Oracle Home and Datafiles」または「OCFS for Datafiles」を選択した場合、手順 9 にスキップします。
 - 手順 5 で「OCFS for Oracle Home」または「No OCFS」を選択した場合、Oracle データベース・ファイルが OCFS を使用しないため、投票ディスクを構成するための「Disk Configuration」ページが表示されます。

8. 「Disk Configuration」画面から、対応する行をハイライト表示して、SRVCFG というレベルの投票ディスクを割り当てます。オプションで次のいずれかのタスクを実行し、シンボリック・リンク名を変更するか、シンボリック・リンクを追加します。

目的	操作
シンボリック・リンク名の変更	<ol style="list-style-type: none"> 1. 「Create Oracle Symbolic Links」をクリックします。「Oracle Object Link Manager」ウィンドウが表示されます。 2. 「Symbolic Link」列から、更新する行を選択します。 3. 新しいリンク名を入力します。 4. 手順 2 と 3 を繰り返して、その他のシンボリック・リンク名を変更します。 5. 「Apply」をクリックします。 6. 画面下部の進行状況を示すバーが停止したら、「Close」をクリックします。
シンボリック・リンクの作成	<ol style="list-style-type: none"> 1. 「Create Oracle Symbolic Links」をクリックします。「Object Link Manager」ウィンドウが表示されます。 2. 「Symbolic Link」列から、空白行を選択します。リンク名を入力します。 3. 手順 2 を繰り返して、その他のシンボリック・リンク名を割り当てます。 4. 画面下部の進行状況を示すバーが停止したら、「Close」をクリックします。

9. 「Next」を選択します。仮想インタフェース・アーキテクチャ (VIA) ハードウェアが検出されたかどうか、ウィザードによってクラスタ・インターコネクがチェックされます。
- VIA が検出されなかった場合、「VIA Detection」ページが表示され、VIA が検出されなかったため、クラスタウェアのインターコネクに TCP が使用されることが示されます。「Next」を選択し、手順 12 にスキップします。
 - VIA が検出された場合は、「VIA Selection」ページが表示されます。手順 10 に進みます。
10. インターコネクに VIA を使用するには「Yes」を選択し、「Next」を選択します。「VIA Configuration」ページが表示されます。「No」を選択すると、TCP が使用されます。
11. VIA 接続の名前を入力し、「Next」を選択します。

- 最後に、「Install Location」ページが表示されます。デフォルトの場所は `SYSTEM_DRIVE¥system32¥osd9i` です。別の場所を選択するには、「Browse」を選択します。
- 「Finish」を選択します。進行状況ページに、実行中のアクションが表示されます。

データ・ファイルの RAW パーティション

投票ディスクには、Server Management (SRVM) および Oracle オペレーティング・システム固有クラスタウェアの構成データが格納されます。ベンダーのオペレーティング・システム固有クラスタウェアにも、Real Application Clusters 構成情報用の投票ディスクが必要です。

Real Application Clusters は、フォーマットされていない拡張パーティション内の論理ドライブを使用して、制御ファイル、データ・ファイルおよび REDO ログ・ファイルを格納します。各ディスクに作成される拡張パーティションは 1 つのみです。拡張パーティションは、パーティション化されていないディスクに作成し、ディスク全体を拡張パーティションに使用するようお勧めします。

各インスタンスは、データ・ファイル用に共有ディスク・サブシステム上のフォーマットされていないデバイス・セットを共有します。必要な RAW デバイスの数とタイプは、いくつかの要因によって決まります。

General Purpose、Transaction Processing、Data Warehouse のいずれかのデータベース構成タイプを使用する場合は、特定の数の論理パーティションを作成し、それらにシンボリック名を割り当てる必要があります。Cluster Setup Wizard のインストール・タスクではこれらのパーティションは必要ありませんが、パーティションにシンボリック・リンク名を作成し、割り当てるために使用できます。いずれかの事前定義済のデータベース構成タイプを使用する場合、詳細は、B-15 ページの「データ・ファイルの RAW パーティション」および「Oracle Cluster Setup Wizard の使用」を参照してください。

また、B-16 ページの表 B-3 にリストされている最小サイズを使用して、特定の表領域を作成する必要があります。ディスクのサイズ要件を検討する場合は、各ディスクに、拡張パーティションとして使用できない 1MB または 2MB の初期署名用領域を計上する必要があります。これらの要件は、ベンダー提供クラスタウェア・レイヤーと Oracle 提供クラスタウェア・レイヤーの両方で同じです。

関連資料：

ツールの使用法は、readme ファイルを参照してください。ディスク管理ツールおよび readme ファイルは、`directory¥olm` ディレクトリにあります。ここで `directory` は、Oracle Cluster Setup Wizard を使用して Oracle オペレーティング・システム固有クラスタウェアをインストールしたディレクトリです。

RAW パーティションおよびサイズ

データ・ファイル、制御ファイルおよび REDO ログ・ファイルは、論理ドライブ上の未フォーマット RAW デバイスに常駐している必要があります。この論理ドライブは、拡張パーティション内に常駐する必要があります。拡張パーティションは、ディスク上の RAW 領域を指します。論理ドライブを構成するには、Windows の「Disk Management」を使用して複数の論理パーティションを作成します。詳細は、Windows の「Disk Management」のオンライン・ヘルプを参照してください。

注意： 必要なパーティション数の合計は、クラスタ内のインスタンス数によって決まります。Database Configuration Assistant により、各ノードに 1 つずつインスタンスが作成されます。

表 B-3 Database Configuration Assistant の論理ドライブのディスク・サイズ

パーティションの用途	ファイル・サイズ
SYSTEM 表領域	420MB
サーバー・パラメータ・ファイル	5MB
USERS 表領域	120MB
TEMP 表領域	120MB
UNDOTBS 表領域	320MB
EXAMPLE 表領域	160MB
CWMLITE 表領域	100MB
XDB 表領域	50MB
ODM 表領域	280MB
INDX 表領域	70MB
TOOLS 表領域	12MB
DRSYS 表領域	250MB
最初の制御ファイル	110MB
2 番目の制御ファイル	110MB
各インスタンスに 2 つの REDO ログ・ファイル	120MB (各ファイル)
svrcfg (クラスタウェア用の投票ディスク)	100MB

Database Configuration Assistant は、デフォルトでは自動 UNDO 管理を使用します。各インスタンスに 1 つの UNDO 表領域を作成します。すべての構成済データベース・テンプレートの UNDO 表領域用の論理ドライブは、320MB 以上になります。手動 UNDO 管理を使用する場合は、625MB 以上の RBS 論理ドライブを作成します。

サーバー・パラメータ・ファイル

Database Configuration Assistant により、サーバー・パラメータの格納に、デフォルトで論理パーティションが使用されます。このオプションを使用する場合、サーバー・パラメータを保持するための論理パーティションを 1 つ作成する必要があります。サイズは 5MB 以上で、シンボリック・リンク形式は `db_name_SPFILE` にします。このオプションを使用しない場合、各インスタンスにパラメータ・ファイルのローカル・コピーが用意されるため、サーバー・パラメータ・パーティションを作成する必要はありません。

UNDO 管理

Database Configuration Assistant は、デフォルトで自動 UNDO 管理を使用します。各インスタンスに 1 つの UNDO 表領域を作成します。すべての構成済データベース・テンプレートの UNDO 表領域用の論理ドライブは、サイズが 320MB 以上で、シンボリック・リンク形式は `db_name_UNDOTBSinstance_number` になります。手動 UNDO 管理を使用する場合は、サイズが 625MB 以上で、シンボリック・リンク形式が `db_name_RBS` の RBS 論理ドライブを作成します。

REDO ログ

Database Configuration Assistant ではデフォルトで、各インスタンスにつき 2 つのログ・ファイルが必要です。各インスタンスの各 REDO ログ・ファイルは、ファイル・サイズが 120MB で、シンボリック・リンク形式が `db_name_REDOinstance_number_thread_number` になります。

関連資料：

- 『Oracle9i Real Application Clusters セットアップおよび構成』の「RAW デバイスの作成方法の計画」
- 『Oracle9i Real Application Clusters セットアップおよび構成』の「DBCA データベースの構成オプション」
- 3-4 ページの「データベース環境のタイプ」
- B-5 ページの「シンボリック・リンク名の割当て」

Real Application Clusters 管理ユーティリティの概要

ユーティリティには2セット用意されています。RAW デバイス用ユーティリティとクラスタ・ファイル・システム用の追加ディスク管理ユーティリティは、Oracle Cluster Setup Wizard によって全ノードにインストールされます。Oracle Cluster Setup Wizard を使用しない場合、これらのツールはインストールされません。表 B-4 は、ディスク管理ユーティリティの説明です。

表 B-4 RAW デバイス・ディスク管理ユーティリティ

ユーティリティ	目的
Object Link Manager	論理ドライブへのシンボリック・リンクを作成または変更する GUI。このユーティリティは、Oracle Cluster Setup Wizard の一部として、または個別に使用できます。
DeleteDisk	ディスク全体を再フォーマットし、内容を削除します。
LetterDelete	Oracle RAW パーティションからすべてのドライブ文字を削除し、ディスク・キー・レジストリを更新して、コンピュータの再起動時のマッピングを無効化します。
LogPartFormat	論理パーティションのすべての領域をゼロに初期化し、シンボリック・リンク名を削除します。
crlogdr	プライマリ・パーティションがなく、拡張パーティションが1つあるディスク上の論理ドライブとその関連シンボリック名を作成および削除します。このツールを使用して、ディスク・レイアウトを確認します。
ExportSYMLinks	対応するディスク・ドライブから永続シンボリック・リンクを読み取り、リストの TBL ファイルを生成します (デフォルト名は symmap.tbl)。
ImportSYMLinks	TBL ファイルを読み取り、クラスタのディスク上およびすべてのノード上に永続シンボリック・リンクを作成します。

RAW デバイス管理ユーティリティの手動インストール

Oracle Cluster Setup Wizard を使用して Oracle9i オペレーティング・システム固有クラスタウェアをインストールしなかった場合、RAW デバイス管理ユーティリティを手動でインストールします。

ディスク管理ユーティリティを手動でインストールするには、クラスタの各ノードで次の作業を実行します。

1. 一時ディレクトリを作成します。
2. 1 枚目のコンポーネント CD から、作成した一時ディレクトリに `¥preinstall_rac¥olm` ディレクトリの内容をコピーします。
3. 作成した一時ディレクトリから次のコマンドを入力して、Oracle Object Service をインストールします。

```
C:¥temp> OracleOBJService /INSTALL
```

注意： Oracle Cluster Setup Wizard を使用すると、このサービスは自動的に作成および起動されます。

4. クラスタの各ノードの Oracle Object Service を「automatic」に設定します。サービスの構成、開始および停止の詳細は、Microsoft オンライン・ヘルプを参照してください。

Database Configuration Assistant を使用してデータベースを作成しない場合、作成する論理ドライブの数は、作成する予定のデータ・ファイル、REDO ログ・ファイルおよび制御ファイルの数によって決まります。ただし、この場合も、投票ディスク用に 100MB の論理ドライブを作成する必要があります。

クラスタ・ファイル・システムによってインストールされるコンポーネントおよびサービス

クラスタ・ファイル・システムがインストールされている場合、Cluster Setup Wizard により、次のコンポーネントおよびサービスがインストールされます。表 B-5 で、これらのコンポーネントについて説明します。

表 B-5 クラスタ・ファイル・システムによってインストールされるコンポーネント

コンポーネント	機能
Ocfs.sys	Windows Server 2003 のファイル・システム・ドライバ。
OracleClusterVolumeService	クラスタ内でのマウント・ポイントの一貫性を確保し、ファイル・システム・ドライバの構成サポートを提供する OCFS サービス。インストール後、Windows の「Services」パネルに表示されます。OracleClusterVolumeService は、ocfsFindVol.exe のサービス名です。
OcfsFormat.exe	クラスタ・ファイル・システムにおけるボリュームの使用を準備するユーティリティ。ボリュームを OCFS で使用するには、このユーティリティをクラスタ内のノードの 1 つから実行し、ボリュームをフォーマットする必要があります。B-22 ページの「OCFS に追加するパーティションのフォーマット」を参照。
OcfsUtil.exe	指定したボリュームのクラスタ名の変更、ボリューム上で構成されたノード・リストの管理、およびノード固有ファイルとディレクトリの作成に使用されるユーティリティ。B-20 ページの「OcfsUtil コマンドの概要」を参照。
OcfsOui.bat	OCFS に Oracle ホームをインストールする際に、Oracle Universal Installer によって自動的に実行されるバッチ・ファイル。OracleClusterVolumeService によってコールされ、Oracle ホーム用に必要なノード固有ディレクトリとファイルを OCFS に作成します。

OcfsUtil コマンドの概要

OcfsUtil は、コマンドライン・ユーティリティで、次の作業に使用されます。

- 指定したボリュームのクラスタ名の変更
- ボリューム上で構成されたノード・リストの管理
- ノード固有ファイルとディレクトリの作成、削除および取消

表 B-6 に、OcfsUtil によって実行される作業を示します。

表 B-6 OcfsUtil コマンドの概要

コマンド	説明と構文
ChangeClusterName	<p>マウント・ポイント VolumeMountPoint を持つボリュームのクラスタ名を変更できます。たとえば、指定した NewClusterName に変更します。</p> <p>NewClusterName を指定しない場合、クラスタ名が NULL クラスタ名にリセットされ、VolumeMountPoint で指定されたボリュームが、ハードウェア接続性を持つ全ノードから表示可能になります。</p> <p>構文</p> <pre>OcfsUtil /c ChangeClusterName /m VolumeMountPoint /n NewClusterName</pre>
ChangeVolConfig	<p>マウント・ポイント VolumeMountPoint で指定されたボリュームの構成マップを出力します。たとえば、次のようになります。</p> <p>/d NodeName を指定した場合、NodeName が構成マップから削除されます。</p> <p>構成マップは、この OCFS にアクセスしたことのあるノードのリストです。</p> <p>構文</p> <pre>OcfsUtil /c ChangeVolConfig /p /m VolumeMountPoint /d NodeName</pre>

表 B-6 OcfsUtil コマンドの概要 (続き)

コマンド	説明と構文
NodeSpecificFile (作成)	<p>VolumeMountPoint の FullPath で指定されたファイルまたはディレクトリ (/d) を、たとえば、ノード固有ファイルにします。ファイルまたはディレクトリの名前は、全ノードで同じですが、内容が異なり、ローカル・ファイルまたはディレクトリとして扱われます。</p> <p>/s 引数は、指定したディレクトリ (/d) を共有ノード固有ディレクトリにし、そのディレクトリ内に作成されたサブディレクトリおよびファイルは、ノード固有になります。/s 引数は、/d が指定されているときのみ使用可能で、create オプションでのみ有効です。</p> <p>構文</p> <pre>OcfsUtil /c NodeSpecificFile /o create/delete/revert /m MountPoint /p Path /d</pre> <p>および</p> <pre>OcfsUtil /c NodeSpecificFile /o create /m VolumeMountPoint /p FullPath /d</pre> <p>または</p> <pre>OcfsUtil /c NodeSpecificFile /o create /m MountPoint /p Path /d /s</pre>
NodeSpecificFile (削除)	<p>VolumeMountPoint の FullPath で指定されたノード固有ファイルまたはディレクトリを削除します。</p> <p>構文</p> <pre>OcfsUtil /c NodeSpecifiFile /o delete /m VolumeMountPoint /p FullPath</pre>
NodeSpecificFile (取消)	<p>VolumeMountPoint の FullPath で指定されたノード固有ファイルまたはディレクトリを取り消します。たとえば、O: を共有ファイルに戻し、ファイル / ディレクトリを NodeName のノード固有ファイルの内容にポイントします。</p> <p>NodeName が指定されない場合、取り消された共有ファイル・ディレクトリの内容は、コマンドが実行されたノードの内容となります。</p> <p>構文</p> <pre>OcfsUtil /c NodeSpecificFile /o revert /m VolumeMountPoint /p FullPath /n NodeName</pre>

OCFS に追加するパーティションのフォーマット

既存の OCFS に新規パーティションを追加するには、OcfsFormat を使用してパーティションをフォーマットします。

コマンド・プロンプトから、次のコマンドを実行します。

```
OcfsFormat /l <driver letter:> /c <Allocation Unit Size>
```

たとえば、ボリュームのドライブ文字が O:、割当て単位サイズが 4KB の場合、コマンドは次のようになります。

```
OcfsFormat /l O: /c 4
```

割当て単位サイズは、ファイル・システムがファイルに割り当てる最小サイズを反映します。たとえば、4KB のファイルの場合、例で示されたファイル・システムは、ファイルに 4KB のディスク領域を割り当てます。ファイルが 4KB を超えると、ファイル・システムは、ディスクからさらに 4KB をファイルに割り当てます。このような小さなサイズは、Oracle ホーム、パラメータ・ファイルおよびログ・ファイルの場合は、最適なサイズです。データ・ファイル用に選択する OCFS ドライブの場合、割当て単位サイズは 1024KB 以上に設定してください。

バックアップ目的の RAW パーティションの内容の標準ファイル・システムへの移行

物理パーティションおよび論理ドライブではともに、RAW パーティションとの間でデータのコピーを行うには、Oracle ユーティリティ OCOPIY を使用します。

物理 RAW 規則では余分なブロックがスキップされるため、物理パーティションと論理ドライブの規則は、互いに互換性がありません。また、これらのパーティションの内容は互換性がないため、物理ディスクから論理ドライブへの OCOPIY コマンドを実行するだけでは不十分です。

データベースで論理ドライブに物理ディスク規則を使用している場合、次の手順で論理ドライブ規則に変換することをお勧めします。

1. (ローカル) ファイル・システムにデータベースを完全にエクスポートします。
2. 論理ドライブを作成し、これらのパーティションに論理名を定義します。
3. 新しい論理ドライブで Database Configuration Assistant を使用してデータベースを再作成します。
4. 新しく作成したデータベースにデータベースを完全にインポートします。

関連資料:

詳細は『Oracle9i Database for Windows プラットフォーム・ガイド』を参照

Oracle オペレーティング・システム固有クラスタウェアの削除

Oracle オペレーティング・システム固有クラスタウェアの旧バージョンを削除する場合は、次の手順を使用して手動で削除します。

1. Oracle データベースをシャットダウンします。
2. オペレーティング・システム固有クラスタウェア・サービス OracleCMService9i を停止します。
3. コマンド・プロンプトからレジストリ エディタを起動します。
C:¥> regedit
「レジストリ エディタ」ウィンドウが表示されます。
4. HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥ORACLE¥OSD9i に移動します。
5. OSD サブキーを削除します。
6. HKEY_LOCAL_MACHINE¥¥SYSTEM¥CurrentControlSet¥Services に移動します。
7. OracleCMService9i のサービス・エントリを削除します。
8. C:¥ の下の osd9i ディレクトリを削除します。
9. クラスタ内のすべてのノードで手順を繰り返します。
10. キーを削除したコンピュータを再起動します。

Real Application Clusters インストールのトラブルシューティング

次の内容について説明します。

- エラー・メッセージ
- クラスタ診断の実行
- [Windows Server 2003 の Terminal Services Client](#)
- 既存の Oracle サービスの停止
- マッピングが表示されない
- 専用サーバー・プロセスを起動できない
- ディスクの管理で論理ドライブを作成できない
- 物理パーティションと論理ドライブの互換性の問題

エラー・メッセージ

Real Application Clusters 管理ユーティリティのエラー・メッセージは、『Oracle9i Real Application Clusters 管理』の付録 C にあります。

クラスタ診断の実行

Oracle Universal Installer で「Node Selection」ページが表示されない場合、`lsnodes -v` コマンドを実行し、その出力を検討して、クラスタウェアを診断します。

¥preinstall_rac ディレクトリから、次のコマンドを実行します。

```
lsnodes -v
```

詳細な出力により、クラスタウェアが実行されていないことがわかった場合は、クラスタウェアのドキュメントを参照してください。

Windows Server 2003 の Terminal Services Client

どのディスク管理ツールでも、Terminal Services Client は使用しないでください。変更が適用されない場合があります。

既存の Oracle サービスの停止

作成中のクラスタのノードで `OracleGSDService` または `OracleServiceSID` を実行している場合、Oracle Cluster Setup Wizard の使用中に次の警告メッセージが表示されることがあります。

```
The nodes that we are trying to install the software on could not be cleaned completely
```

すべてのノードでこれらのサービスを停止し、Oracle Cluster Setup Wizard を再度実行してください。

マッピングが表示されない

Object Link Manager にマッピングが表示されない場合、クラスタ内のすべてのノードで Oracle Object Service が起動されていることを確認してください。

専用サーバー・プロセスを起動できない

`OracleServiceSID` と `OracleHOME_NAME_TNSListener` が、同じ Windows アカウントで、同じユーザー ID を使用して実行されていることを確認してください。

ディスクの管理で論理ドライブを作成できない

拡張パーティションが作成されていない場合がほとんどです。拡張パーティションを作成し、拡張パーティション内に複数の論理ドライブを作成します。

物理パーティションと論理ドライブの互換性の問題

物理ディスク規則名が定義されている論理ドライブ

Oracle データベースは、データ・ファイルが実際には論理ドライブの場合も、物理ディスク規則を使用してデータ・ファイルを扱います。物理ディスク・ネーミング規則を使用するかわり、データの破損や消失は発生しません。早めに論理ドライブに変換することをお勧めします。

Partition0 を表す論理名の使用

重大な問題が発生します。通常、ディスク アドミニストレータは各ディスクの最初のブロックに署名を書き込むため、結果的に Oracle データベースのデータ・ファイル・ヘッダーによって署名の部分が上書きされる可能性があります。

注意： データが失われる可能性もあります。Partition0 に論理パーティション規則を使用しないでください。

拡張インストール

この付録では、拡張インストールについて説明します。

この付録の項目は次のとおりです。

- 非対話形式モードでの Oracle コンポーネントのインストール
- 異なる言語の Oracle コンポーネント

非対話形式モードでの Oracle コンポーネントのインストール

通常、Oracle Universal Installer は対話形式モードで実行されます。つまり、ウィンドウに情報を指定するように要求されます。一方、経験豊富なユーザーは、レスポンス・ファイルを使用して、Oracle Universal Installer を非対話形式モード（サイレント・モード）で実行することもできます。レスポンス・ファイルとは、インストール・プロセス中に Oracle Universal Installer で使用される変数および値を含むテキスト・ファイルです。

ユーザーとの対話がない場合、またはグラフィカルな端末が使用されない場合は、サイレント・インストールをお勧めします。ユーザーは、まずレスポンス・ファイルを編集して、インストールするコンポーネントを指定する必要があります。

サイレント・インストールを使用すると、Oracle Universal Installer の対話形式モードの GUI を回避できます。表 C-1 に、1 枚目のコンポーネント CD の Response ディレクトリにある使用可能なレスポンス・ファイルを示します。

表 C-1 レスポンス・ファイル

レスポンス・ファイル名	サイレント・モードで実行する対象
enterprise.rsp	Oracle9i Database の「Enterprise Edition」インストール・タイプ
standard.rsp	Oracle9i Database の「Standard Edition」インストール・タイプ
personal.rsp	Oracle9i Database の「Personal Edition」インストール・タイプ
custom.rsp	Oracle9i Database の「Custom」インストール・タイプ
clientadmin.rsp	Oracle9i Client の「Administrator」インストール・タイプ
clientruntime.rsp	Oracle9i Client の「Runtime」インストール・タイプ
clientcustom.rsp	Oracle9i Client の「Custom」インストール・タイプ
oms.rsp	Oracle9i Management and Integration の「Oracle Management Server」インストール・タイプ
oid.rsp	Oracle9i Management and Integration の「Oracle Internet Directory」インストール・タイプ
omicustom.rsp	Oracle9i Management and Integration の「Custom」インストール・タイプ
dbca.rsp	Database Configuration Assistant
netca.rsp	Oracle Net Configuration Assistant により「Enterprise Edition」、「Standard Edition」、「Personal Edition」、「Administrator」、「Runtime」、「Oracle Management Server」または「Oracle Internet Directory」インストール・タイプで行われる構成を実行します。

レスポンス・ファイルのコピーおよび変更

レスポンス・ファイルをコピーおよび変更するには、次のようにします。

1. 1 枚目のコンポーネント CD の Response ディレクトリからハード・ディスク・ドライブに適切なファイルをコピーします。
2. 「Start」 → 「Programs」 → 「Oracle Installation Products」 → 「Universal Installer Concepts Guide」を選択します。
『Oracle Universal Installer Concepts Guide』が HTML 形式で表示されます。
3. レスポンス・ファイルおよび『Oracle Universal Installer Concepts Guide』の指示に従って、テキスト・エディタを使用してレスポンス・ファイルを変更します。

複数 CD からの単一インストール・ステージの作成

リリース 2 (9.2.0.2.1) は 3 枚のコンポーネント CD に収録されています。つまり、そのままではインストールに関するすべての質問に答え、席を離れ、戻るまでにインストールを完了させることはできません。Oracle Universal Installer が、プロンプトを表示せずに 2 枚目および 3 枚目の CD を見つけることができるように、3 枚の CD の内容をハード・ディスクのステージング領域にコピーできます。

複数の CD から単一インストール・ステージを作成するには、次のようにします。

1. ハード・ディスク・ドライブに、3 枚の CD の内容を収められる十分なディスク領域があることを確認します。
2. ハード・ディスクの同じレベルに、必要に応じて各 CD 用に Disk1 および Disk2 という名前の 2 つのディレクトリを作成します。これらの名前を必ず使用してください。
3. 各コンポーネント CD の内容を該当するディレクトリにコピーします。
4. Disk1 と名付けたディレクトリから setup.exe を実行します。
追加のコンポーネント CD の挿入を求めるプロンプトが表示されることなく、インストールが進行します。

Oracle Universal Installer の実行およびレスポンス・ファイルの指定

Oracle Universal Installer を実行しレスポンス・ファイルを指定するには、次のようにします。

1. コマンド・プロンプトに移動します。
2. Oracle Universal Installer がインストールされているディレクトリに移動します。

3. 適切なレスポンス・ファイルを実行します。次に例を示します。

```
C:\program files\oracle\oui\
install> setup.exe -silent -nowelcome -responseFile filename
```

要素名	説明
<i>filename</i>	特定のレスポンス・ファイルのフルパスを指定します。
-silent	完全なサイレント・モードで Oracle Universal Installer を実行します。「Welcome」ウィンドウは自動的にスキップされます。このパラメータはオプションです。-silent を使用する場合、-nowelcome は必要ありません。
-nowelcome	インストール時に表示される「Welcome」ウィンドウは表示されません。このパラメータはオプションです。

関連資料：『Oracle Universal Installer Concepts Guide』

異なる言語の Oracle コンポーネント

この項では、次の機能について説明します。

- [異なる言語での Oracle Universal Installer の実行](#)
- [異なる言語での Oracle コンポーネントの使用法](#)

異なる言語での Oracle Universal Installer の実行

デフォルトでは、Oracle Universal Installer はオペレーティング・システムの選択された言語で実行されます。次に示す言語で Oracle Universal Installer を実行することもできます。

- ポルトガル語（ブラジル）
- ドイツ語
- 中国語（簡体字）
- 中国語（繁体字）
- フランス語
- イタリア語
- 韓国語
- スペイン語

Oracle Universal Installer を異なる言語で実行するには、次のようにします。

1. オペレーティング・システムが実行されている言語を変更します。次に、Windows Server 2003 の例を示します。
 - a. 「Start」 → 「Settings」 → 「Control Panel」 → 「Regional and Language Options」を選択します。
 - b. 「Advanced」 タブを選択します。
 - c. 前述の言語から 1 つ選択して、「OK」をクリックします。
2. 4-3 ページの「Oracle9i のインストールの開始」の指示に従って Oracle Universal Installer を実行します。

注意： 選択された言語が NLS_LANG レジストリ・パラメータに割り当てられます。

異なる言語での Oracle コンポーネントの使用法

Oracle コンポーネント（Oracle Net Configuration Assistant、Database Configuration Assistant など）を使用する際の言語として他の言語を選択できます。これは、Oracle Universal Installer の実行で使用される言語を変更するということではありません。Oracle コンポーネントを選択された言語で実行するには、オペレーティング・システムの言語設定と同じにする必要があります。オペレーティング・システムの言語は「Control Panel」の「Regional Settings」ウィンドウで変更できます。

異なる言語でコンポーネントを使用するには、次のようにします。

1. 4-3 ページの「Oracle9i のインストールの開始」の指示に従って Oracle Universal Installer を起動します。
2. 「Available Products」ウィンドウで、「Product Languages」を選択します。
「Language Selection」ウィンドウが表示されます。
3. 「Available Languages」フィールドから Oracle コンポーネントの実行に使用する言語を選択します。
4. 「>」を使用して言語を「Selected Languages」フィールドに移動し、「OK」をクリックします。
5. インストールするコンポーネントを選択し、「Next」をクリックします。

インストールの完了後、インストールされたコンポーネントのダイアログの文字、メッセージおよびオンライン・ヘルプが選択した言語で表示されます。

グローバル化・サポート

この付録では、グローバル化・サポートについて説明します。

この付録の項目は次のとおりです。

- [NLS_LANG パラメータ](#)
- 一般的に使用される [NLS_LANG の値](#)
- [MS-DOS モードおよびバッチ・モードでの NLS_LANG 設定](#)

NLS_LANG パラメータ

Oracle では、グローバリゼーション・サポートが提供されています。これによりユーザーは、NLS_LANG パラメータによって定義された各自の言語でデータベースとの対話ができます。Oracle9i コンポーネントをインストールすると、NLS_LANG パラメータがレジストリに設定されます。

インストール時の NLS_LANG パラメータの値は、オペレーティング・システムのロケール設定に基づいて自動的に選択されます。オペレーティング・システムのロケール値と NLS_LANG 値のマッピングのリストを、D-3 ページの「[一般的に使用される NLS_LANG の値](#)」に示します。

NLS_LANG パラメータは、
HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\ORACLE\HOMEID\NLS_LANG サブキーのレジストリに格納されています。ID は、Oracle ホームを識別する一意の番号です。

NLS_LANG パラメータは、次のような形式です。

NLS_LANG = LANGUAGE_TERRITORY.CHARACTER_SET

文字列の意味は、次のとおりです。

表 D-1 NLS_LANG パラメータ

パラメータ	説明
LANGUAGE	言語と、その言語でメッセージ、曜日、月を表示する場合の規則などを指定します。
TERRITORY	地域と、その地域で週数と日数を計算する場合の規則などを指定します。
CHARACTER_SET	メッセージを表示する場合に使用するキャラクタ・セットを制御します。

関連資料：

- 複数の Oracle ホームに対するサブキーの場所の詳細は、『Oracle9i Database for Windows プラットフォーム・ガイド』を参照
- NLS_LANG パラメータおよびグローバリゼーション・サポートの初期化パラメータの詳細は、『Oracle9i Database グローバリゼーション・サポート・ガイド』を参照

一般的に使用される NLS_LANG の値

表 D-2 は、様々なオペレーティング・システムのリケールに対して一般的に使用される NLS_LANG 値の一覧です。

表 D-2 NLS_LANG パラメータの値

オペレーティング・システムのロケール	NLS_LANG の値
アラビア語 (U.A.E.)	ARABIC_UNITED ARAB EMIRATES.AR8MSWIN1256
ブルガリア語	BULGARIAN_BULGARIA.CL8MSWIN1251
カタロニア語	CATALAN_CATALONIA.WE8MSWIN1252
中国語 (PRC)	SIMPLIFIED CHINESE_CHINA.ZHS16GBK
中国語 (台湾)	TRADITIONAL CHINESE_TAIWAN.ZHT16MSWIN950
クロアチア語	CROATIAN_CROATIA.EE8MSWIN1250
チェコ語	CZECH_CZECH REPUBLIC.EE8MSWIN1250
デンマーク語	DANISH_DENMARK.WE8MSWIN1252
オランダ語 (オランダ)	DUTCH_THE NETHERLANDS.WE8MSWIN1252
英語 (イギリス)	ENGLISH_UNITED KINGDOM.WE8MSWIN1252
英語 (アメリカ)	AMERICAN_AMERICA.WE8MSWIN1252
エストニア語	ESTONIAN_ESTONIA.BLT8MSWIN1257
フィンランド語	FINNISH_FINLAND.WE8MSWIN1252
フランス語 (カナダ)	CANADIAN FRENCH_CANADA.WE8MSWIN1252
フランス語 (フランス)	FRENCH_FRANCE.WE8MSWIN1252
ドイツ語 (ドイツ)	GERMAN_GERMANY.WE8MSWIN1252
ギリシア語	GREEK_GREECE.EL8MSWIN1253
ヘブライ語	HEBREW_ISRAEL.IW8MSWIN1255
ハンガリア語	HUNGARIAN_HUNGARY.EE8MSWIN1250
アイスランド語	ICELANDIC_ICELAND.WE8MSWIN1252
インドネシア語	INDONESIAN_INDONESIA.WE8MSWIN1252
イタリア語 (イタリア)	ITALIAN_ITALY.WE8MSWIN1252
日本語	JAPANESE_JAPAN.JA16SJIS
韓国語	KOREAN_KOREA.KO16MSWIN949
ラトビア語	LATVIAN_LATVIA.BLT8MSWIN1257

表 D-2 NLS_LANG パラメータの値 (続き)

オペレーティング・システムのリソース	NLS_LANG の値
リトアニア語	LITHUANIAN_LITHUANIA.BLT8MSWIN1257
ノルウェー語	NORWEGIAN_NORWAY.WE8MSWIN1252
ポーランド語	POLISH_POLAND.EE8MSWIN1250
ポルトガル語 (ブラジル)	BRAZILIAN PORTUGUESE_BRAZIL.WE8MSWIN1252
ポルトガル語 (ポルトガル)	PORTUGUESE_PORTUGAL.WE8MSWIN1252
ルーマニア語	ROMANIAN_ROMANIA.EE8MSWIN1250
ロシア語	RUSSIAN_CIS.CL8MSWIN1251
スロバキア語	SLOVAK_SLOVAKIA.EE8MSWIN1250
スペイン語 (スペイン)	SPANISH_SPAIN.WE8MSWIN1252
スウェーデン語	SWEDISH_SWEDEN.WE8MSWIN1252
タイ語	THAI_THAILAND.TH8TISASCII
スペイン語 (メキシコ)	MEXICAN SPANISH_MEXICO.WE8MSWIN1252
スペイン語 (ベネズエラ)	LATIN AMERICAN SPANISH_VENEZUELA.WE8MSWIN1252
トルコ語	TURKISH_TURKEY.TR8MSWIN1254
ウクライナ語	UKRAINIAN_UKRAINE.CL8MSWIN1251
ベトナム語	VIETNAMESE_VIETNAM.VN8MSWIN1258

MS-DOS モードおよびバッチ・モードでの NLS_LANG 設定

Oracle Internet Directory コマンドライン・ツールや、SQL*Plus、SQL Loader、Import、Export などの Oracle Utilities を MS-DOS モードで使用するときは、最初にそのセッションの NLS_LANG パラメータのキャラクタ・セット・フィールドを正しい値に設定する必要があります。

注意： Oracle Internet Directory コマンドライン・ツールは、コマンド・プロンプトから実行します。これらのツールを実行するために、Windows 用の UNIX エミュレーション・ユーティリティは不要です。エミュレーション・ユーティリティは、Oracle Internet Directory のシェル・スクリプト・ツールを実行する場合にのみ必要です。詳細は、『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』を参照してください。

いくつかの例外はありますが、MS-DOS モードでは Windows (ANSI コードページ) とは異なるキャラクタ・セット (またはコードページ) を使用し、レジストリ内のデフォルトの Oracle ホームの NLS_LANG パラメータが常に該当する Windows コードページに設定されているため、キャラクタ・セット・フィールドの設定が必要になります。MS-DOS モード・セッションの NLS_LANG パラメータが適切に設定されていない場合、キャラクタ・セットの変換が正しく行われなためにエラー・メッセージやデータが破損する可能性があります。

日本語、韓国語、中国語 (簡体字) および中国語 (繁体字) では、MS-DOS コードページは ANSI コードページと同一です。このような場合は、MS-DOS モードで NLS_LANG パラメータを設定する必要はありません。

バッチ・モードでも同様に、バッチ・プロシージャの開始時に SET NLS_LANG コマンドを挿入して、プロシージャで処理するファイルのキャラクタ・セットに応じて、NLS_LANG に適切なキャラクタ・セット値を設定します。

表 D-3 は、様々なオペレーティング・システムのリケールに対して MS-DOS モードに対応する Oracle キャラクタ・セットの一覧です。

表 D-3 オペレーティング・システムのリケールに対する Oracle キャラクタ・セット

オペレーティング・システムのリケール	キャラクタ・セット
アラビア語	AR8ASMO8X
カタロニア語	WE8PC850
中国語 (PRC)	ZHS16GBK
中国語 (台湾)	ZHT16MSWIN950
チェコ語	EE8PC852
デンマーク語	WE8PC850
オランダ語	WE8PC850
英語 (イギリス)	WE8PC850
英語 (アメリカ)	US8PC437
フィンランド語	WE8PC850
フランス語	WE8PC850
ドイツ語	WE8PC850
ギリシア語	EL8PC737
ハンガリア語	EE8PC852
イタリア語	WE8PC850
日本語	JA16SJIS
韓国語	KO16MSWIN949
ノルウェー語	WE8PC850

表 D-3 オペレーティング・システムのロケールに対する Oracle キャラクタ・セット (続き)

オペレーティング・システムのロケール	キャラクタ・セット
ポーランド語	EE8PC852
ポルトガル語	WE8PC850
ルーマニア語	EE8PC852
ロシア語	RU8PC866
スロバキア語	EE8PC852
スロベニア語	EE8PC852
スペイン語	WE8PC850
スウェーデン語	WE8PC850
トルコ語	TR8PC857

関連資料： Oracle Internet Directory のグローバリゼーション・サポートの問題および Oracle Internet Directory 環境の様々なコンポーネントおよびツールに必要な環境変数 NLS_LANG の詳細は、『Oracle Internet Directory 管理者ガイド』の「ディレクトリにおけるグローバリゼーション・サポート」を参照してください。

Enterprise Edition

データベースの完全なインストール・タイプ。

ldap.ora ファイル (ldap.ora file)

Oracle Net Configuration Assistant により作成されるファイルで、次のディレクトリ・アクセス情報を含む。

- ディレクトリのタイプ
- ディレクトリの場所
- クライアントまたはサーバーがデータベース・サービスに接続するための接続識別子を
検索または構成するために使用する、デフォルトの管理コンテキスト

ldap.ora ファイルは、%ORACLE_HOME%\network\admin に置かれる。

listener.ora ファイル (listener.ora file)

リスナーが次の項目を識別するための構成ファイル。

- リスナー名
- 接続要求を受け付けたプロトコル・アドレス
- リスニング対象のサービス

listener.ora ファイルは、%ORACLE_HOME%\network\admin に置かれる。

Oracle9i データベースはサービス登録によりデータベース・サービスの識別を必要としない。

Oracle Cluster File System (OCFS)

Oracle Cluster File System (OCFS) は、Oracle9i 用に設計された共有ファイル・システム。OCFS を使用すると、Oracle データ・ファイルを論理ドライブにリンクする必要がなくなり、各ノードがそれぞれのローカル・コピーを持つのではなく全ノードで 1 つの Oracle ホームを共有することが可能になる。OCFS ボリュームは、冗長性およびパフォーマンスのために、1 つの共有ディスクまたは複数の共有ディスクにまたがる事が可能。

Oracle Cluster File System は、次のことを行う。

- 可用性を妨げない拡張。OCFS に格納された Oracle ホームおよびデータ・ファイルは、動的に拡張できる。
- RAID ボリュームおよび SAN を最大限に活用。
- Oracle データベース管理の簡易化。OCFS は、Oracle ホーム・ファイルおよび Oracle データベース・ファイルの両方について、クラスタ全体にわたってファイルおよびディレクトリの統一されたビューを提供する。
- 物理ノードの障害時には、アーカイブ・ログへの統一的なアクセスを提供。
- Oracle パッチの適用時には、クラスタ内の全ノードでの更新済 Oracle ホームの表示を保証。
- クラスタ内の全ノードでのメタデータの一貫性を保証。

Oracle Cluster Setup Wizard

Oracle Cluster Setup Wizard は、すべてのノード上で次のタスクを実行する。

- Oracle9i オペレーティング・システム固有クラスタウェアのインストールおよび起動。
- オプションとして、OracleClusterFileSystem サービスをインストールして起動し、1 つまたは 2 つの共有ファイル・システムを作成する。
- オプションとして、Object Link Manager をインストールし、Oracle Object Service をすべてのノードで起動する。このツールにより、論理ドライブへの永続シンボリック・リンクが作成される。このサービスは、シンボリック・リンクが変更されるとすべてのノードを更新し、コンピュータを停止して再起動した際に常に起動されるよう「Automatic」に設定される。
- Oracle Object Link Manager の以前の起動時に作成された既存シンボリック・リンク情報の保持。
- 全ノードでの他のディスク管理ツールのインストール。
- 既存クラスタへのノードの追加。

Oracle Net Foundation レイヤー (Oracle Net foundation layer)

クライアント・アプリケーションとサーバー間の接続の確立と維持、およびこれら間のメッセージ交換を行うネットワーク通信レイヤー。

Oracle コンテキスト (Oracle Context)

相対識別名が cn=OracleContext のディレクトリ・サブツリーのルートで、すべての Oracle ソフトウェア情報が保持される。ディレクトリ内には 1 つ以上の Oracle コンテキストを含めることができる。Oracle コンテキストは、ディレクトリ・ネーミング・コンテキストと関連付けることができる。

Oracle コンテキストには、次の Oracle エントリを含めることができる。

- Oracle Net Services ディレクトリ・ネーミングとともに使用してデータベース接続を行う接続識別子
- Oracle Advanced Security とともに使用するエンタープライズ・ユーザー・セキュリティ

Oracle スキーマ (Oracle schema)

LDAP 準拠のディレクトリ・サーバーに格納できるものを決定する規則の集合。Oracle には、Oracle Net Services エントリなど、多くの Oracle エントリ・タイプに適用される独自のスキーマがある。Oracle Net Services エントリ用の Oracle スキーマは、エントリに含まれる属性を含む。

Oracle ホーム (Oracle home)

Oracle コンポーネントをインストールするディレクトリ・パス (たとえば、D:\oracle\ora92 など)。Oracle Universal Installer の「File Locations」ウィンドウの「Path」フィールドで、Oracle ホームの入力が要求される。

Oracle ホーム名 (Oracle home name)

現在の Oracle ホームの名前。各 Oracle ホームには、コンピュータ上のすべての Oracle ホームと区別するために名前が付いている。インストール時に、Oracle Universal Installer の「File Locations」ウィンドウの「Name」フィールドで、Oracle ホーム名の入力が要求される。

Personal Edition

インストール可能なデータベースのインストール・タイプの 1 つ。Personal Edition for Windows には、Oracle Real Application Clusters は含まれていない。

SID

データベースをコンピュータ上にあるその他すべてのデータベースと区別する Oracle システム識別子。SID は、入力した文字が 8 文字以上かまたはピリオドでないかぎり、グローバル・データベース名のデータベース名部分（たとえば `sales.us.acme.com` の `sales`）に自動的にデフォルトで設定される。デフォルト値は確定または変更できる。

注意： Oracle Real Application Clusters では、入力した SID の末尾に識別子が自動的に追加される。たとえば、入力値が DB の場合、クラスタの最初のインスタンスには DB1 という SID、2 番目のインスタンスには DB2 という SID が設定される。

sqlnet.ora ファイル (sqlnet.ora file)

クライアントまたはサーバーの構成ファイルで、次を指定する。

- 修飾されていないサービス名またはネット・サービス名に追加されるクライアント・ドメイン
- 名前を解決するときにクライアントが使用するネーミング・メソッドの順序
- 使用するロギング機能およびトレース機能
- 接続の経路
- 外部ネーミング・パラメータ
- Oracle Advanced Security パラメータ

sqlnet.ora ファイルは `%ORACLE_HOME%\network\admin` にある。

Standard Edition

インストール可能なデータベースのインストール・タイプの 1 つ。Standard Edition には、Oracle Advanced Security、Oracle COM Automation、Oracle OLAP、Oracle Partitioning、Oracle Real Application Clusters および Oracle Spatial は含まれていない。

Terminal Server

Microsoft Windows Terminal Server は Windows Thin クライアントのターミナル・サーバーで、Windows Server 上の複数の同時クライアント・セッションに対するサポートを追加する製品。Windows Terminal Server はオペレーティング・システムの GUI を Oracle9i データベースのユーザーに提供する。

tnsnames.ora ファイル (tnsnames.ora file)

接続記述子にマップされるネット・サービス名を含む構成ファイル。このファイルは、ローカル・ネーミング・メソッド用に使用される。tnsnames.ora ファイルは `%ORACLE_HOME%\network\admin` にある。

UNC

「汎用命名規則」を参照。

UNDO 表領域 (undo tablespace)

データベースを自動 UNDO 管理モードで実行する場合に、UNDO 情報のみを格納する専用表領域。UNDO 表領域には 1 つ以上の UNDO セグメントが含まれる。UNDO 表領域には他のタイプのセグメント（表、索引など）は作成できない。

自動モードの場合、各 Oracle インスタンスには、UNDO 表領域が 1 つのみ割り当てられる。各 UNDO 表領域は一連の UNDO ファイルで構成される。UNDO ブロックは、エクステンツに分けられる。任意の時点において、エクステンツはトランザクション表に割り当てられている（使用されている）か、または未使用である。

UNDO 表領域のブロックは、次のカテゴリに分けられる。

- 領域管理に使用されるファイル制御ブロック、ビットマップ・ブロックなど
- トランザクション管理に使用される、トランザクション表ブロック、UNDO ブロックおよびエクステンツマップ・ブロックを含む UNDO セグメント
- ファイル制御にも UNDO セグメントにも割り当てられていない空きブロック

インストール・タイプ (installation type)

インストールするコンポーネントを自動的に選択する事前定義のコンポーネント・セット。各最上位コンポーネントで使用可能なインストール・タイプのリストは、1-4 ページの「インストール対象の Oracle9i 製品」を参照。

オペレーティング・システム認証による接続 (operating system authenticated connections)

Windows ログオン資格証明を Oracle9i データベースへのユーザー接続の認証に使用できる。Windows システム固有の認証には、次の利点がある。

- ユーザーはユーザー名やパスワードを入力しなくても、複数の Oracle9i データベースに接続できる。
- Oracle9i データベースのユーザー認証情報を Windows で一元管理することによって、Oracle9i でユーザー・パスワードを保管または管理する必要がない。

外部プロシージャ (external procedures)

Oracle データベース上で実行される PL/SQL ルーチンでは、C プログラミング言語で記述され共有ライブラリに保存されている外部プロシージャまたは関数をコールできる。

Oracle9i データベースが外部プロシージャに接続するには、データベースをネット・サービス名で構成し、リスナーをプロトコル・アドレスおよびサービス情報で構成する必要がある。

仮想インタフェース・アーキテクチャ (Virtual Interface Architecture: VIA)

クラスタ間通信のための業界標準アーキテクチャ。VIA の高速なサーバー間通信により、アプリケーションの拡張性とパフォーマンスが向上する。VIA は、1 つのアプリケーションを数十のクラスタ化ノードで効率的に実行できるようにし、異なるアプリケーション・サーバーで動作する分散アプリケーション・モジュール間のデータ交換の速度を上げることでこれを実現している。

クラスタ (cluster)

クラスタは、一般に 2 台以上のコンピュータ (ノード) から構成される。Oracle Real Application Clusters ソフトウェア、およびクラスタと呼ばれるハードウェアの集合により、各コンポーネントの処理能力が 1 つに統合され、コンピューティング環境を形成する。Oracle Real Application Clusters は、相互接続された複数のコンピュータの処理能力を活用する。

グローバル・データベース名 (global database name)

データベースをネットワーク・ドメインの他のデータベースから一意に区別する完全データベース名。たとえば、次のようになる。

```
sales.us.acme.com
```

sales はデータベース名、us.acme.com はデータベースが置かれているネットワーク・ドメイン。

サービス登録 (service registration)

PMON プロセス (インスタンス・バックグラウンド・プロセス) がリスナーに情報を自動的に登録する機能。この情報はリスナーに登録されるため、[listener.ora ファイル](#)はこの静的情報を構成する必要はない。

サービス登録はリスナーに次の情報を提供する。

- 実行中のデータベースの各インスタンス用のサービス名
- データベースのインスタンス名
- 各インスタンスで利用可能なサービス・ハンドラ (ディスパッチャおよび専用サーバー)

これにより、リスナーがクライアントの要求を正しく管理できる。

- ディスパッチャ、インスタンスおよびノードのロード情報

これにより、リスナーがクライアントの接続要求を処理できる最良のディスパッチャを決定できる。すべてのディスパッチャがブロックされている場合、リスナーは接続に対して専用サーバーを実行できる。

この情報により、リスナーはクライアントの接続要求を処理するために最良の方法を決定できる。

最上位コンポーネント (top-level components)

Oracle Universal Installer をコンポーネント CD から実行する場合は、「Available Products」ウィンドウで、最上位コンポーネントのインストールが要求される。各最上位コンポーネントには、複数のインストール・タイプが含まれ、その中から選択できる。各インストール・タイプでは、個々のコンポーネントのセットが事前に定義されている。各最上位コンポーネントで使用可能なインストール・タイプのリストは、1-4 ページの「[インストール対象の Oracle9i 製品](#)」を参照。

システム識別子 (system identifier)

「[SID](#)」を参照。

自動 UNDO 管理モード (automatic undo management mode)

UNDO データが専用 [UNDO 表領域](#) に格納されるデータベース・モード。[手動 UNDO 管理モード](#) と異なり、ユーザーは UNDO 表領域の作成のみを管理する。他のすべての UNDO 管理は自動的に実行される。

修飾されていない名前 (unqualified name)

ネットワーク・ドメインを含まないネット・サービス名。

手動 UNDO 管理モード (manual undo management mode)

UNDO ブロックをユーザーが管理するロールバック・セグメントに格納するデータベース・モード。[自動 UNDO 管理モード](#) では、UNDO ブロックはシステム管理の専用 [UNDO 表領域](#) に格納される。

接続記述子 (connect descriptor)

特別にフォーマットされた、ネットワーク接続のための宛先の記述。接続記述子は、宛先サービスおよびネットワーク経路情報を含む。

宛先サービスは、Oracle9i データベースの場合はサービス名を使用して表される。ネットワーク・ルートは、少なくとも、ネットワーク・アドレスを使用して [リスナー](#) の場所を示す。

接続識別子 (connect identifier)

接続記述子を解決する名前、ネット・サービス名またはサービス名。ユーザーは、接続するサービスに対する接続文字列内に、接続識別子とともにユーザー名およびパスワードを渡すことで接続要求を開始する。たとえば、次のようにする。

```
SQL> CONNECT username/password@connect_identifier
```

ディレクトリ・サーバー (directory server)

LDAP 準拠のディレクトリ・サーバー。ディレクトリは集中化された記憶領域を提供し、データベース・ネットワーク・コンポーネント、ユーザー方針およびコーポレート方針の作業環境、ユーザーの認証およびセキュリティの情報を取り出し、クライアント側とサーバー側のローカル・ファイルを置き換える。

ディレクトリ情報ツリー (Directory Information Tree: DIT)

エントリの識別名 (DN) のディレクトリ・サーバー内の階層的なツリー構造。

ディレクトリ・ネーミング (directory naming)

ネット・サービス名を接続記述子に解決するディレクトリ・サーバーを指定する**ネーミング・メソッド**。ネット・サービス名はディレクトリ・サーバーに一元的に保存される。

ディレクトリ・ネーミング・コンテキスト (directory naming context)

ディレクトリ・サーバー内の重要なサブツリー。通常、編成されているいくつかのサブツリーの一つ上となる。一部のディレクトリでは固定されたコンテキストのみ許される。他はディレクトリ管理者により構成される。

デフォルト・ドメイン (default domain)

ほとんどのクライアント要求が発生するネットワーク・ドメイン。クライアントが置かれるドメイン、またはクライアントがネットワーク・サービスを要求するドメインとなることがある。デフォルト・ドメインは、修飾されていないネットワーク名要求に追加されるドメインを決定するクライアント構成パラメータにもなる。"." 文字を含まない場合、名前要求は修飾されない。

ネーミング・メソッド (naming method)

クライアント・アプリケーションで、データベース・サービスへの接続の際、接続識別子をネットワーク・アドレスに解決するために使用される解決方法。Oracle Net Services は、次のネーミング・メソッドをサポートする。

- ローカル・ネーミング
- ディレクトリ・ネーミング
- ホスト・ネーミング
- 外部ネーミング

ネット・サービス名 (net service name)

接続記述子に解決されるサービスの単純名。ユーザーは、接続するサービスに対する接続文字列内に、ネット・サービス名とともにユーザー名およびパスワードを渡すことで接続要求を開始する。たとえば、次のようにする。

```
SQL> CONNECT username/password@net_service_name
```

必要に応じて、ネット・サービス名は次のような様々な場所に格納できる。

- ローカル構成ファイル (各クライアントの tnsnames.ora)
- ディレクトリ・サーバー
- 外部ネーミング・サービス (NIS、CDS など)

汎用命名規則 (Universal Naming Convention: UNC)

汎用命名規則 (UNC) は、ネットワーク・ドライブをドライブ名にマッピングせずにネットワーク上のファイルへアクセスする手段を提供する。UNC 名は次のように表される。

¥¥computer name¥share name¥filename

プロセス間通信 (Interprocess Communication: IPC)

クライアント・アプリケーションで使用されるプロトコルで、データベースとの通信のために **リスナー** と同じノードに置かれる。IPC は、TCP/IP よりも高速なローカル接続を提供する。

プロトコル・アドレス (protocol address)

ネットワーク・オブジェクトのネットワーク・アドレスを識別するアドレス。

接続が行われるとき、クライアントとその要求の受信者 (**リスナー** または **Oracle Connection Manager**) は同じプロトコル・アドレスを使用して構成される。クライアントはこのアドレスを使用して接続要求を特定のネットワーク・オブジェクト位置に送信し、受信者はこのアドレスで要求のリスニングを行う。クライアントと接続受信者に対して同じプロトコルをインストールし、同じアドレスを構成することが重要である。

リスナー (listener)

サーバーに常駐するプロセスであり、クライアントからの接続要求のリスニングおよびサーバーへの通信量の管理を行う。

クライアントがデータベース・サーバーとのネットワーク・セッションを要求するときに、リスナーは実際の要求を受け取る。クライアント情報がリスナー情報と一致した場合、リスナーはデータベース・サーバーへの接続を許可する。

ローカル・ネーミング (local naming)

ネット・サービス名を接続記述子に解決する **ネーミング・メソッド**。この名前は、各クライアントの **tnsnames.ora ファイル** に構成および保存される。

索引

数字

- 3DES_112 Encryption サポート
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-2
- 3DES_168 Integrity サポート
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-2

A

- 「Administrators」グループ
 - Oracle インストールの要件, 4-2
- 「Administrator」インストール・タイプ
 - インストールされるコンポーネント, A-6
 - 定義, 1-4
- Advanced Queuing API
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-2, A-6, A-7
 - 定義, A-10
- Advanced Replication
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-2, A-7
 - 定義, A-10
- Apache Configuration for Oracle Java Server Pages
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-3, A-8
- Apache Configuration for Oracle XML Developer's Kit
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-3, A-8
- Apache JServ
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-3, A-8
- Apache Web Server Files
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-3, A-8
- Assistant Common Files
 - 定義, A-11

B

- BaliShare, A-11

C

- Character Set Migration Utility, A-13
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-3, A-7
- CMWLITE 表領域
 - cwmlite01.DBF データ・ファイル, 6-8
 - 説明, 6-8
- crlogdr ユーティリティ, B-18
- CTXSYS
 - データベース・ロール, 6-4
 - ユーザー名およびパスワード, 6-4
- custom.rsp ファイル
 - 説明, C-2
- 「Custom」インストール・タイプ
 - インストール, 4-9, 4-11, 4-16
 - 定義, 1-4, 1-5
- cwmlite01.dbf データ・ファイル, 6-8
- CWMLITE 表領域
 - Oracle Real Application Clusters, B-16

D

- Database Configuration Assistant
 - 「Custom」データベース・タイプの作成, 3-7
 - listener.ora ファイルの構成, 3-9, 3-11
 - Oracle Real Application Clusters の構成, 3-9
 - インストール時に自動的に起動する, 4-8
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-2
 - 定義, A-11
 - データベース環境の作成, 3-4, 3-5
 - データベースの作成方法の選択, 3-5
- Database Verify Utility, A-13
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-3, A-7
- DB_DOMAIN パラメータ, 6-6
- DB_NAME パラメータ, 6-6

dbca.rsp ファイル
説明, C-2

DBSNMP
データベース・ロール, 6-4
ユーザー名およびパスワード, 6-4

DBUI, A-11

DeleteDisk ユーティリティ, B-18

DES40 Encryption サポート
使用可能なインストール・タイプ, A-2, A-3

DES56 Encryption サポート
使用可能なインストール・タイプ, A-2, A-3

drsys01.dbf データ・ファイル, 6-8

DRSYS 表領域
Oracle Real Application Clusters, B-16
説明, 6-8

DSS
データ・ウェアハウス・データベース環境と同じ,
3-4

E

「Enterprise Edition」インストール・タイプ
インストールされるコンポーネント, A-2
定義, 1-4

enterprise.rsp ファイル
説明, C-2

EWT, A-11

example01.DBF データ・ファイル, 6-8

EXAMPLE 表領域
example01.DBF データ・ファイル, 6-8
説明, 6-8

ExportSYMLinks ユーティリティ, B-18

I

ICE Browser, A-11

ImportSYMLinks ユーティリティ, B-18

indx01.dbf データ・ファイル, 6-8

INDX 表領域
indx01.dbf データ・ファイル, 6-8
Oracle Real Application Clusters, B-16
説明, 6-8

installActions.log ファイル, 2-2, 4-19

Inventory ディレクトリ, 4-19

IPC
構成, 3-9

iSQL*Plus

使用可能なインストール・タイプ, A-2
定義, A-11

J

Java Runtime Environment
使用可能なインストール・タイプ, A-5, A-6, A-9
定義, A-11
要件, 2-3

Java Swing Components, A-11

Java Virtual Machine
使用可能なインストール・タイプ, A-4, A-9

JDBC, A-16

JSDK
使用可能なインストール・タイプ, A-3, A-8

JVM Accelerator
使用可能なインストール・タイプ, A-4, A-9
定義, A-17

K

Kerberos サポート
使用可能なインストール・タイプ, A-2

Kodiak, A-11

L

LBACSYS
データベース・ロール, 6-4
ユーザー名およびパスワード, 6-4

LDAP 準拠のディレクトリ・サーバー
ディレクトリ・サーバーでクライアントを構成,
3-11
ディレクトリ・サーバーでデータベースを構成,
3-10

LetterDelete ユーティリティ, B-18

listener.ora ファイル
Database Configuration Assistant を使用した構成,
3-9, 3-11
Oracle Net Configuration Assistant を使用した構
成, 3-9, 3-10, 3-12

LogPartFormat ユーティリティ, B-18

M

- MD5 Integrity サポート
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-2, A-3
- MDSYS
 - データベース・ロール, 6-4
 - ユーザー名およびパスワード, 6-4
- Microsoft ODBC 仕様
 - Oracle ODBC ドライバが準拠する, A-18
- Migration Utility, A-13
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-3, A-7
- MS-DOS モード
 - NLS_LANG パラメータの設定, D-4

N

- Net Services
 - 「Custom」インストール・タイプによるインストール, 4-9, 4-12
 - 構成に必要なユーザー入力, 3-2
 - 削除, 4-21
 - サポートされる構成方法, 3-2
 - ディレクトリ・サーバーでデータベースを構成, 3-10
 - ネットワーク構成ファイルの場所, 3-8
- netca.rsp ファイル
 - 説明, C-2
- NLS_LANG パラメータ, D-2
 - MS-DOS モードおよびバッチ・モードでの設定, D-4
 - 地域およびキャラクタ・セットのデフォルト, D-3
- NTFS
 - システム要件, 2-3

O

- Object Link Manager, B-18
- OCI
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-3, A-6, A-7
 - 定義, A-13
- ODBC, 「Oracle ODBC ドライバ」を参照
- OID Configuration Assistant
 - Database Configuration Assistant の自動的な起動, 4-17
 - インストール時に自動的に起動する, 4-17
- OiD Configuration Assistant
 - Database Configuration Assistant の自動的な起動, 4-15
 - インストール時に自動的に起動する, 4-15
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-8
 - 定義, A-16
- OIDCTL ユーティリティ
 - Oracle Internet Directory Server の停止, 4-20
- OIDMON ユーティリティ
 - Oracle Internet Directory Windows サービスの削除, 4-21
- oid.rsp ファイル
 - 説明, C-2
- OLAP, 「Oracle OLAP」を参照
- OLAPSYS
 - データベース・ロール, 6-5
 - ユーザー名およびパスワード, 6-5
- OLTP
 - 定義, 3-4
 - データベース環境, 3-4
- omicustom.rsp ファイル
 - 説明, C-2
- oms.rsp ファイル
 - 説明, C-2
- Online Transaction Processing, 「OLTP」を参照
- Optimal Flexible Architecture
 - インストールの問題および制限事項, 1-2
- Oracle Administration Assistant for Windows
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-2
- Oracle Advanced Security
 - Oracle Enterprise Security Manager, A-3
 - Oracle Wallet Manager, A-3
 - SSO サポートの定義, A-12
 - Thin JDBC Java ベースの暗号化サポート, A-3
 - 暗号化と整合性のサポート, A-2
 - 暗号化と整合性のサポートの定義, A-12
 - インストール後の構成タスク, 5-3
 - インストール前の要件, 2-6
 - エンタープライズ・ユーザー・セキュリティ・サポートの定義, A-12
 - エンタープライズ・ユーザー・セキュリティ・サポートの認証, A-3
 - 概要の定義, A-12
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-2, A-7
 - 認証サポート, A-2
 - 認証サポートの定義, A-12
- Oracle Call Interface
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-3, A-6, A-7

- 定義, A-13
- Oracle Cluster Configuration Assistant
 - インストール時に自動的に起動する, 4-7
- Oracle COM Automation
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-3
 - 定義, A-13
- Oracle Counters for Windows Performance Monitor
 - 単一 Oracle ホーム・コンポーネント, 2-2
 - 定義, A-13
- Oracle Data Gatherer
 - Oracle Intelligent Agent とともにインストールされる, A-14
- Oracle Database Demos
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-5, A-9
 - 定義, A-13
- Oracle Database Upgrade Assistant
 - automatically starting during installation, 4-10
- Oracle Database Utilities
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-3
- Oracle Enterprise Security Manager
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-3
- Oracle Help for Java, A-11
- Oracle Home Selector
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-5, A-6, A-9
- Oracle HTTP Server
 - インストール後の構成タスク, 5-3
 - インストール時にサービスを自動的に起動する, 4-8, 4-15, 4-18
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-3
 - 定義, A-14
- Oracle Intelligent Agent
 - Oracle Agent Extensions をインストールできない, A-14
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-3, A-8
 - 定義, A-14
- Oracle *interMedia*
 - インストール後の構成タスク, 5-4
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-3
 - 定義, A-14
- Oracle *interMedia* Annotator
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-6, A-8
- Oracle *interMedia* Audio
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-3, A-8
 - 定義, A-14
- Oracle *interMedia* Client Option
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-3, A-4, A-6, A-8
- 定義, A-15
- Oracle *interMedia* Image
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-4, A-8
 - 定義, A-15
- Oracle *interMedia* Java Client
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-4, A-6, A-8
- Oracle *interMedia* Locator
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-4, A-8
 - 定義, A-15
- Oracle *interMedia* Video
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-4, A-8
 - 定義, A-15
- Oracle *interMedia* Web Client
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-4, A-6
- Oracle Internet Directory
 - MS-DOS モードでのコマンドライン・ツールの実行, D-4
 - Oracle Internet Directory での 9.2 データベースの構成, 2-6
 - インストール, 1-5
 - インストール前の要件, 2-6
 - 機能, 1-5
 - グローバリゼーション・サポートの問題, D-6
 - 最初のインストール, 4-13
 - 削除, 4-21
 - ツールに必要な環境変数 NLS_LANG, D-6
 - 定義, A-16
- Oracle Internet Directory Client
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-6, A-8
 - 定義, A-16
- Oracle Internet Directory Client Toolset
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-8
- Oracle Internet Directory Configuration Assistant, 「OiD Configuration Assistant」を参照
- Oracle Internet Directory Server
 - Oracle サービスの削除, 4-21
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-8
 - 定義, A-16
 - 停止, 4-20
- 「Oracle Internet Directory」インストール・タイプ
 - インストール, 4-13
 - インストールされるコンポーネント, A-7
 - 定義, 1-5
- Oracle INTYPE File Assistant
 - 定義, A-16
- Oracle JDBC Thin Driver for JDK 1.4.1
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-4, A-8

- Oracle JDBC/OCI Driver for JDK 1.4.1
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-4, A-6, A-8
- Oracle JDBC ドライバ
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-4, A-6, A-8
 - 定義, A-16
- Oracle JVM
 - Oracle9i データベース・タイプのネーミング規則, A-17
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-4
 - 定義, A-17
- Oracle9i JVM
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-8
- Oracle Mod PL/SQL Gateway
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-3, A-8
- Oracle Net
 - 構成方法の選択, 3-8
 - サーバー環境の構成, 3-8
- Oracle Net Configuration Assistant
 - listener.ora ファイルの構成, 3-9, 3-10, 3-12
 - sqlnet.ora ファイルの構成, 3-9, 3-10, 3-11, 3-12
 - tnsnames.ora ファイルの構成, 3-9, 3-10, 3-11
 - インストール時に自動的に起動する, 4-8, 4-14, 4-17
 - クライアント環境の構成, 3-11
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-4, A-6, A-9
 - 定義, A-17
 - ディレクトリ・サーバーでクライアントを構成, 3-11
 - ディレクトリ・サーバーにアクセスするようデータベースを構成, 3-8, 3-10
 - ディレクトリ・サーバーへのクライアント・アクセスの構成, 3-11
- Oracle Net Manager
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-3, A-4, A-6, A-9
 - 定義, A-18
- Oracle Net Services
 - インストール後の構成タスク, 5-4
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-4, A-6, A-9
- Oracle Net リスナー
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-4, A-9
- Oracle Object Service, 用語集-2
- Oracle ODBC ドライバ
 - Microsoft ODBC 仕様に準拠, A-18
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-4, A-6, A-9
 - 定義, A-18
- Oracle OLAP
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-4
 - 定義, A-19
- Oracle OLAP API
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-4
- Oracle Open Database Connectivity ドライバ, 「Oracle ODBC ドライバ」を参照
- Oracle OSD
 - Oracle Real Application Clusters, B-15
 - 削除, B-23
- Oracle Partitioning
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-4, A-9
 - 定義, A-19
- Oracle Perl Interpreter
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-3, A-8
- Oracle Programmer
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-6
- Oracle Provider for OLE DB
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-4
 - 単一 Oracle ホーム・コンポーネント, 2-2
 - 定義, A-19
- Oracle Real Application Clusters
 - 「Custom」インストール・タイプによるインストール, 4-9
- CWMLITE 表領域, B-16
- Database Configuration Assistant を使用した構成, 3-9
- DRSYS 表領域, B-16
- INDX 表領域, B-16
- Oracle Object Service, 用語集-2
- REDO ログ・ファイル, B-16
- SID, 4-7
- SID の割当て, 4-7
- SYSTEM 表領域, B-16
- TOOLS 表領域 (tools01.dbf), B-16
- UNDOTBS 表領域, B-16
- USERS 表領域, B-16
- USERS 表領域 (users01.dbf), B-16
- XML 表領域, B-16
- インストール後の構成タスク, 5-5
- インストール前のタスク, B-15
- 使用可能なインストール・タイプ, A-4
- シンボリック・リンクの作成, B-18
- 制御ファイル, B-16
- ソフトウェアをインストールするクラスター・ノードの選択, 4-3
- 定義, A-19
- データ・ファイル, B-16

- 投票ディスク, B-16
- Oracle Remote Configuration Agent
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-4, A-9
 - 定義, A-20
- Oracle Services for Microsoft Transaction Server
 - 「Custom」インストール・タイプによるインストール, 4-9, 4-12
 - Microsoft Transaction Server のインストールが必要, 4-9, 4-12
 - インストール後の構成タスク, 5-5
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-4, A-6
 - 定義, A-20
- Oracle SNMP Agent
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-4, A-9
 - 定義, A-20
- Oracle SOAP Client
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-4, A-9
- Oracle SOAP for JServ
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-4, A-9
- Oracle SOAP Server
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-4, A-9
- Oracle Spatial
 - インストール後の構成タスク, 5-4
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-4
 - 定義, A-20
- Oracle SQLJ
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-5, A-9
 - 定義, A-20
- Oracle Text
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-5
 - 定義, A-21
- Oracle Trace
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-5, A-9
 - 定義, A-21
- Oracle Type Translator
 - 定義, A-12
- Oracle Ultra Search Middle Tier
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-5, A-6, A-9
- Oracle Ultra Search Server
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-5
- Oracle Universal Installer
 - Database Configuration Assistant の実行, 3-5
 - Net Services 環境の構成, 3-2
 - Oracle Net Configuration Assistant の実行, 3-8
 - Oracle Net 構成方法の選択, 3-8
 - インベントリ, 4-19
 - 異なる言語での実行方法, C-4
- コンポーネントの削除, 4-21
- コンポーネントを異なる言語で実行, C-5
- サイレント・モードでの実行, C-2
- 使用可能なインストール・タイプ, A-5, A-6, A-9
- 使用方法のドキュメント, 1-3
- 定義, 1-3, A-21
- データベースの作成, 3-2
- 非対話形式モードでの実行, C-2
- ログ・ファイル, 4-19
- Oracle Utilities
 - Database Verify Utility, A-13
 - Migration Utility, A-13
 - MS-DOS モードでの設定, D-4
 - Recovery Manager, A-13
 - SQL*Loader, A-13
 - インポート・ユーティリティ, A-13
 - エクスポート・ユーティリティ, A-13
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-7
 - 定義, A-13
- Oracle Wallet Manager
 - Oracle Advanced Security の機能, A-3
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-3, A-7
 - 定義, A-22
- Oracle Workflow
 - Oracle との統合のためのインストール前の要件, 2-7
 - インストール後の構成タスク, 5-6
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-9
 - 定義, A-22
- Oracle Workflow Builder
 - 定義, A-22
- Oracle Workflow Configuration Assistant, 4-18
 - インストール時に自動的に起動する, 4-18
- Oracle Workflow Manager
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-5, A-9
- Oracle Workspace Manager
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-5, A-9
- Oracle XML Developer's Kit
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-5, A-6, A-9
 - 定義, A-23
- Oracle XML SQL Utility
 - 使用可能なインストール・タイプ, A-5, A-6, A-9
 - 定義, A-23
- ORACLE_HOME
 - 環境での設定の制限事項, 4-4
- ORACLE_HOME 環境パラメータ
 - パスに設定しない, 4-4

Oracle9i
「Custom」インストール・タイプによるインストール, 4-10
概要, 1-2
機能, 1-2
使用可能なインストール・タイプ, A-9
定義, A-23

Oracle9i Development Kit
使用可能なインストール・タイプ, A-5

Oracle9i Enterprise Edition
定義, 1-4

Oracle9i Globalization Support
使用可能なインストール・タイプ, A-5, A-6, A-9

Oracle9i Management and Integration
使用可能なインストール・タイプ, 1-5, A-7
定義, 1-5

Oracle9i Standard Edition
定義, 1-4

Oracle9i Windows Documentation
使用可能なインストール・タイプ, A-5, A-7, A-10
定義, A-24

Oracle9i クライアント
使用可能なインストール・タイプ, 1-4, A-2, A-6
定義, 1-4

Oracle9i 最上位コンポーネント
使用可能なインストール・タイプ, 1-4

Oracle9i データベース
使用可能なインストール・タイプ, 1-4, A-2

Oracle インベントリ
ログ・ファイル, 4-19

Oracle サービス
停止, 4-3, 4-20

Oracle ホーム
単一 Oracle ホーム・コンポーネント, 2-2
単一ホーム・コンポーネントの2回目のインストール, 2-2

Oracle ホーム名
最大長, 4-4

ORDPLUGINS
データベース・ロール, 6-5
ユーザー名およびパスワード, 6-5

ORDSYS
データベース・ロール, 6-5
ユーザー名およびパスワード, 6-5

P

Performance Monitor, A-13

「Personal Edition」インストール・タイプ
定義, 1-4

personal.rsp ファイル
説明, C-2

PL/SQL
使用可能なインストール・タイプ, A-5, A-7, A-9
定義, A-24

PL/SQL Embedded Gateway
使用可能なインストール・タイプ, A-5, A-9
定義, A-24

PL/SQL 外部プロシージャ
インストール後の構成タスク, 5-6

PL/SQL モジュール
妥当性チェック, 5-2

Pro*C/C++
使用可能なインストール・タイプ, A-5, A-7, A-10
定義, A-24

R

RADIUS サポート
使用可能なインストール・タイプ, A-2

RAW パーティション
DRSYS 表領域, B-16
INDX 表領域, B-16
SYSTEM 表領域, B-16
TOOLS 表領域, B-16
UNDOTBS 表領域, B-16
USERS 表領域, B-16
データ・ファイル, B-16

RC4_128 Encryption サポート
使用可能なインストール・タイプ, A-2, A-3

RC4_256 Encryption サポート
使用可能なインストール・タイプ, A-2, A-3

RC4_40 Encryption サポート
使用可能なインストール・タイプ, A-2, A-3

RC4_56 Encryption サポート
使用可能なインストール・タイプ, A-2, A-3

Recovery Manager, A-13
使用可能なインストール・タイプ, A-3, A-7

REDO ログ・ファイル, 6-9

Oracle Real Application Clusters, B-16
初期データベース, 6-9

Replication Management API

定義, A-10

「Runtime」 インストール・タイプ

インストールされるコンポーネント, A-6

S

Sample Schema Demos

使用可能なインストール・タイプ, A-5

Server Management (SRVM)

定義, A-24

Service Pack, 2-4

SERVICE_NAMES パラメータ, 6-6

SHA-1 Integrity サポート

使用可能なインストール・タイプ, A-2, A-3

SID

Oracle Real Application Clusters, 4-7

SQL*Loader, A-13

使用可能なインストール・タイプ, A-3, A-7

SQL*Plus

MS-DOS モードでの NLS_LANG パラメータの設定, D-4

使用可能なインストール・タイプ, A-5, A-7, A-10

定義, A-24

SQLJ Runtime

使用可能なインストール・タイプ, A-5, A-9

定義, A-25

SQLJ Translator

使用可能なインストール・タイプ, A-5, A-9

定義, A-25

sqlnet.ora ファイル

Oracle Net Configuration Assistant を使用した構成, 3-9, 3-10, 3-11, 3-12

SSO サポート

使用可能なインストール・タイプ, A-2

定義, A-12

「Standard Edition」 インストール・タイプ

インストールされるコンポーネント, A-2

定義, 1-4

standard.rsp ファイル

説明, C-2

Sun SDK

使用可能なインストール・タイプ, A-3, A-8

SYS

データベース・ロール, 6-4

ユーザー名およびパスワード, 6-4

SYSTEM

データベース・ロール, 6-4

ユーザー名およびパスワード, 6-4

system01.dbf データ・ファイル, 6-8

SYSTEM 表領域

説明, 6-8

SYSTEM 表領域、Oracle Real Application Clusters, B-16

T

temp01.dbf データ・ファイル, 6-8

TEMP 表領域 (temp01.dbf)

Oracle Real Application Clusters, B-16

説明, 6-8

Thin JDBC Java ベースの暗号化サポート

使用可能なインストール・タイプ, A-3

tnsnames.ora ファイル

Oracle Net Configuration Assistant を使用した構成, 3-9, 3-10, 3-11

tools01.dbf データ・ファイル, 6-8

TOOLS 表領域 (tools01.dbf)

Oracle Real Application Clusters, B-16

説明, 6-8

U

undotbs01.dbf データ・ファイル, 6-8

UNDOTBS 表領域

Oracle Real Application Clusters, B-16

UNDOTBS 表領域 (undotbs01.dbf)

説明, 6-8

UNDO セグメント

初期データベース, 6-10

UNIX

Windows での Oracle のインストールとの相違, 4-2

users01.dbf データ・ファイル, 6-8

USERS 表領域 (users01.dbf)

Oracle Real Application Clusters, B-16

説明, 6-8

utlrp.sql ファイル, 5-2

W

Windows

- UNIX での Oracle のインストールとの相違, 4-2
- Windows Server 2003 の Terminal Services Client
Oracle Real Application Clusters, B-24
- Windows Terminal Server
サポートされないコンポーネント, 2-5
- Windows の Oracle サービス
停止, 4-3, 4-20

X

XDB 表領域 (xdb01.dbf)

説明, 6-8

XML

- Oracle XML Developer's Kit, A-5, A-6, A-9, A-23
 - Oracle XML SQL Utility, A-5, A-6, A-9
- ### XML 表領域
- Oracle Real Application Clusters, B-16

あ

暗号化と整合性のサポート

- 使用可能なインストール・タイプ, A-2
- 定義, A-12

い

意思決定支援システム, 「DSS」を参照

インストール

- 「Custom」インストール・タイプ, 4-9, 4-11, 4-16
- Oracle Internet Directory, 1-5
- 「Oracle Internet Directory」インストール・タイプ, 4-13
- UNIX と Windows での Oracle のインストールの相違, 4-2
- インストール・セッションのログの確認, 4-19
- インストール前, 4-2
- 最上位コンポーネント, 1-4
- 使用可能なインストール・タイプ, A-1
- 使用可能なコンポーネント, 1-4, A-1
- 単一 Oracle ホーム・コンポーネント, 2-2
- 単一インストール・ステージ, 4-4, C-3
- 手順, 4-3
- 非対話形式モード, C-2

要件, 2-2

Optimal Flexible Architecture, 1-2

インストール後

- 個々のコンポーネントの構成要件, 5-3
- パスワードの変更, 6-2
- 無効な PL/SQL モジュールの妥当性チェック, 5-2

インストール後の構成手順

ネットワーク・ソフトウェア, 5-4

インストール・タイプ

Enterprise Edition, A-2

Oracle9i Management and Integration, 1-5, A-7

Oracle9i クライアント, 1-4, A-2, A-6

Oracle9i データベース, 1-4

Personal Edition, A-2

Standard Edition, A-2

各最上位コンポーネントで使用可能, 1-4

インストール前

- Oracle Advanced Security の要件, 2-6
- Oracle Internet Directory の要件, 2-6
- Oracle Real Application Clusters の要件, B-15
- Oracle Workflow の要件, 2-7
- 個々のコンポーネントの要件, 2-6
- サービスの停止, 4-3
- タスク, 4-2

インストレーション・ガイド

- 使用可能なインストール・タイプ, A-5, A-7, A-10
- 定義, A-24

インポート・ユーティリティ, A-13

使用可能なインストール・タイプ, A-3, A-7

え

エクスポート・ユーティリティ, A-13

使用可能なインストール・タイプ, A-3, A-7

エンタープライズ・ユーザー・セキュリティ・サポート

- 使用可能なインストール・タイプ, A-3
- 定義, A-12

お

オペレーティング・システム, サポート, 2-4

オペレーティング・システム認証による接続
構成, 3-9, 3-10, 3-12

か

外部プロシージャ

インストール後の構成タスク, 5-6

構成, 3-10

概要

Oracle9i for Windows, 1-2

環境

ORACLE_HOME 設定の制限事項, 4-4

環境パラメータをパスに設定しない, 4-4

管理コンテキスト

構成, 3-10

き

共通マニュアルの参照先

Windows 固有の NLS_LANG の値, D-3

Windows 固有の REDO ログ・ファイルの場所, 6-9

Windows 固有の REDO ログ・ファイルのファイル・サイズ, 6-9

Windows 固有のパラメータ・ファイルのファイル名と場所, 6-9

共有サーバー

作成, 3-7

く

クライアントのインストール

手順, 4-10 ~ 4-12

レスポンス・ファイル, C-2

グローバリゼーション・サポート, D-3

グローバル・データベース名

定義, 6-6

け

言語

異なる言語での Oracle コンポーネントのインストール, C-4

異なる言語での Oracle コンポーネントの使用, C-5

こ

コンポーネント

Windows XP 64-bit Edition/ Windows Server 2003
での手動削除, 4-23

インストール, 4-3

インストール後の構成ガイドライン, 5-3

インストールに使用可能, 1-4, A-1

インストール前の必須要件, 2-6

互換性マトリックス, 2-5

異なる言語で使用, C-5

サポート, 2-5

単一 Oracle ホーム, 2-2

単一 Oracle ホーム・コンポーネントの2回目のインストール, 2-2

単一 Oracle ホーム・コンポーネントのインストール, 2-2

データベース、Oracle Internet Directory および Net Services サービスとレジストリ・エントリの削除, 4-21

さ

サービス

停止, 4-3, 4-20

最上位コンポーネント

システム要件, 2-2

定義, 1-4

サイレント・インストール

概要, C-2

作業を始める

概要, 1-5

削除

Oracle OSD, B-23

Oracle コンポーネント, 4-23

Windows XP 64-bit Edition/ Windows Server 2003
上で Oracle コンポーネントを手動で, 4-23

データベース、Oracle Internet Directory および Net Services サービスとレジストリ・エントリ,
4-21

サポート, 2-5

サポートされないコンポーネント

Windows Terminal Server, 2-5

サポートされるオペレーティング・システム, 2-4

し

システム識別子

複数 Oracle ホーム, 6-6

システム要件

NTFS ファイル・システム, 2-3

最上位コンポーネント, 2-2

初期化パラメータ・ファイル

init.ora, 6-9
説明, 6-9
データベース, 6-9
初期データベース・ユーザー名およびパスワード, 6-4
～ 6-5
シンボリック・リンク
Oracle Real Application Clusters, B-18
既存の構成, 用語集 -2

せ

制御ファイル, 6-10
Oracle Real Application Clusters, B-16
製品サポート, 2-5
接続記述子
定義, 3-9

そ

相違
Windows と UNIX での Oracle のインストール,
4-2

た

単一 Oracle ホーム
コンポーネント, 2-2
単一ホーム・コンポーネントの 2 回目のインストール,
2-2

て

ディレクトリ・サーバー
「Custom」インストール・タイプによるアクセスの
構成, 3-9
ディレクトリ・サーバーへのクライアント・アクセ
スの構成, 3-11
ディレクトリ・サーバーへのデータベース・アクセ
スの構成, 3-10
データ・ウェアハウス
DSS データベース環境と同じ, 3-4
定義, 3-4
データベース環境, 3-4
データ・ディクショナリ
初期データベース, 6-11
説明, 6-11
データのコピー

論理パーティション, B-22
データ・ファイル, 6-8, B-16
データベース
「Custom」インストール・タイプ, 3-7
REDO ログ・ファイル, 6-9
UNDO セグメント, 6-10
構成タイプ, 3-5
削除, 4-21
作成に必要なユーザー入力, 3-2
作成方法の選択, 3-5
サポートされる作成方法, 3-2
使用可能なデータベース・タイプ, 1-4
初期化パラメータ・ファイル, 6-9
制御ファイル, 6-10
ディレクトリ・サーバーで構成, 3-10
データ・ディクショナリ, 6-11
データ・ファイル, 6-7
データベース環境の作成, 3-4
デフォルト・パスワード, 6-2
デフォルト・ユーザー名, 6-2
表領域, 6-7
ロール, 6-4 ～ 6-5
ロールバック・セグメント, 6-10
データベース・タイプ
Oracle9i データベース, 1-4
デフォルト REDO ログ・ファイル, 6-9
デフォルト・キャラクタ・セット, 4-7, 4-15, 4-17
デフォルト・データ・ファイル, 6-8
デフォルト・ドメイン
構成, 3-9, 3-10, 3-11, 3-12
デフォルトの初期化パラメータ・ファイル
init.ora, 6-9
デフォルトの制御ファイル, 6-10
デフォルト表領域, 6-8

と

投票ディスク
Oracle Real Application Clusters, B-16
ドキュメント
Oracle Universal Installer の使用方法, 1-3
単一インストール・ステージの作成, C-3
レスポンス・ファイルの使用方法, C-3
トラブルシューティング
Inventory ログ・ファイル, 4-19
トランザクション処理, 「OLTP」を参照, 3-4

に

認証サポート

- インストール前の要件, 2-6
- 使用可能なインストール・タイプ, A-2
- 定義, A-12

ね

ネーミング・メソッド

- 構成, 3-9, 3-10, 3-11, 3-12

ネット・サービス名

- 構成, 3-9, 3-10, 3-11

ネットワーク

- Oracle Net 構成方法の選択, 3-8
- ネットワーク構成ファイルの場所, 3-8

は

パスワード

- 変更, 6-2

バッチ・セット情報, 5-2

バッチ・モード

- NLS_LANG パラメータの設定, D-4

ひ

非対話形式のインストール

- 概要, C-2

必須 Service Pack, 2-4

必須、個々のコンポーネントの要件, 2-6

表領域, 6-8

- TEMP, 6-8
- TOOLS, 6-8
- USERS, 6-8
- XDB, 6-8
- 大規模なソート処理のための拡張, 6-8
- データベース, 6-7

ふ

ファイル

- Oracle Universal Installer ログ・ファイル, 4-19

ファイル・システム

- システム要件, 2-3

複数 Oracle ホーム

- システム識別子, 6-6

ゆ

ユーザー名

- パスワードの変更, 6-2

よ

要件

- Java Runtime Environment, 2-3
- Oracle コンポーネントのインストール後, 5-3
- インストール前, 4-2
- 個々のコンポーネント, 2-6
- 個々のコンポーネントのインストール前の要件, 2-6
- 最上位コンポーネント, 2-2

り

リスナー

- インストール前の停止, 4-3
- クライアント・ソフトウェアでディレクトリにデータベースをインストール, 4-4
- 構成, 3-9, 3-10
- 作成, 3-10

リリース・ノート

- 使用可能なインストール・タイプ, A-5, A-7, A-10
- 定義, A-24

れ

レジストリ

- 使用時の注意, 4-23

レスポンス・ファイル

- CD 上, C-2
- インストール時の指定, C-3
- クライアント・ファイルの説明, C-2
- 使用方法, C-2
- 単一インストール・ステージ, C-3
- ドキュメント, C-3
- 変更, C-3

ろ

ロール, 6-4 ~ 6-5

ロールバック・セグメント

 初期データベース, 6-10

ログ・ファイル

 インストール・セッションの確認, 4-19

論理パーティション

 CWMLITE 表領域, B-16

 REDO ログ・ファイル, B-16

 XML 表領域, B-16

 互換性の問題, B-25

 制御ファイル表領域, B-16

 データのコピー, B-22

 投票ディスク, B-16

